
くーな

藍田陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くーな

【Nコード】

N2597D

【作者名】

藍田陽介

【あらすじ】

突然僕の前に現れた少女くーな。僕は意味も分からないまま、くーなの兄にされてしまった。不思議な縁で結ばれた僕、リュウイチとくーなは一緒に生活を始めるが、その裏にあるものは……。

1 出逢い（前書き）

初めての投稿作品になります。まだ途中ですが、最後まで書き通すことが今の最大目標です。

時間はかかるかもしれませんが、よろしければお付き合いください。

1 出逢い

今になって思い返してみると、背筋がゾツとする。もう二十年くらい経つだろうか。リュウイチがくーなに出会ってから。

リュウイチはまだ大学を出て、ある研究所に就職したばかりの頃である。それまで武蔵野丘陵の一角にあるT大学で、物理学を専攻し、量子力学を学んでいた。その後、就職した研究所は、同じく武蔵野丘陵のまだ周りに雑木林が多く残る中にひっそりと建っていた。

首尾よく就職できたのは、大学のゼミで師事した教授の推薦のおかげである。教授には今も感謝している。

リュウイチは、入所してすぐに、主に原子炉に関連した研究をするプロジェクトチームに入った。普段から身の周りにウランやら、プルトニウムのような、まるで化学の時間に元素記号表でしかお目にかかったことのない放射性金属を、日常的に扱うこととなった。そのせいか、いきおいプロジェクトチームの雰囲気はいつもピンと張りつめた系のようだった。それは入ったばかりのリュウイチに、想像以上の緊張を強いた。

研究所に通いだしたばかりのリュウイチは、チームの中に一日身を置いていだけで、激しい疲弊感を覚えた。研究所にいる間は、呼吸をするのさえ無意識ではできないような気がした。毎日、その繰り返しだった。

研究所を出て帰宅の途に着くと、ピンと張りつめた彼の神経は、膨張しきった風船に針を刺したかのように、パチンと音を立てて弾けるのが常だった。

その日もそうだった。

研究所に勤めだして、二ヶ月くらい経った頃である。まだリュウイチの神経は、極端な緊張と弛緩を繰り返していた。

異常なほどの神経の緊張状態から一気に開放されたリュウイチの体は、その急激な弛緩に耐えかねた。研究所から駅までの帰り道、道端の電柱に右腕を伸ばして、己が体を支えた。そして激しく嘔吐すると、そのまましばらく肩で荒い息をしていた。

ここに来てからは、何度もあったことだ。

己の吐瀉物ですえた臭いを含んだ空気を何度も大きく吸い込んだ。

やがて「ふう」と一つため息をつくとき、やおら電柱から離れ、再びリュウイチは駅に向かって歩き出した。

いや、歩き出そうとした彼の足は、半歩踏み出したところでピタリと停止した。

リュウイチの視線の先に、まだ少女と呼んでも差し支えないような一人の女が立っていた。少女は少し笑みを浮かべたまま、リュウイチの視線を的確に捉えた。

リュウイチと少女の間の空気だけが濃度を増した。二人はその濃密な空気の両端に対峙して、約十三秒完全に停止した。

残りの半歩をリュウイチが踏み出すのと少女が口を開いたのは、ほぼ同時であった。

「大丈夫？」少女は、意外にハスキーな大人びた声だった。リュウイチは一度、自分の体から湧き出した汚物のわだかまる電柱を見やっただ。

「ああ、大丈夫だ」

「よかった、お兄ちゃん」リュウイチは「えっ？」と聞き返した。

少女はリュウイチの疑問符を無視して、続けた。

「私、くーな　っていうの」

「くーな、ね。それよりも今僕のことを　お兄ちゃん　って言わなかった」

「言ったわよ。いいじゃない。今日からあなたは私のお兄ちゃんよ。あなた　じゃ変ね、名前は？」少女、くーな　は、一気に畳み掛けるように言い切った。

「ミネギシ、リュウイチ」

「じゃリュウイチ兄さんね」そう言うと、くーなは屈託のない笑顔でリュウイチの前まで来た。と、彼の横に立ち、瞬く間に彼の左腕に自分の右腕をすべり込ませた。白く細長いくーなの右腕は、リュウイチの疲れ切った心の桎梏となった。

リュウイチはくーなを左腕にぶら下げたような格好で、下を向いて二十七歩歩いた。その間くーなは、雑木の群れの間に民家の立ち並ぶ変哲のない風景を見回していた。

二十七歩、足を進めたところで、リュウイチは顔を上げて立ち止まった。

「くーな　っていうのは、本名じゃないよね？」

「多分、ね。私にも分からない。でも誰もが私のことを　くーな　って呼ぶわ」

「そう。じゃ名前そういうことにしよう。けれどもどうして、僕が君のお兄さんになるんだい」

「どうもこうもないでしょ。お兄ちゃんはお兄ちゃんよ」

「……そう言われても、ついさっきまで僕は自分が一人っ子だと思っていたよ。二十二年間、兄弟と呼べる人はいなかった。だからさ、急に君が妹として名乗り出てきても困るんだよ」実際、リュウイチは二十七歩の間、隣を歩くまだ幼さの残る　くーな　をこれからどうするべきか逡巡していた。「今まで君はどこでどうしていて、どこから来たのさ」

「一度にたくさん聞かれても、答えに困っちゃうな。おいおい話すから、まずは家に帰ろうよ」くーなの言葉には、すでに兄弟の親しさが十分に込められていた。

「帰るって、どこへ」

「お兄ちゃんの家に決まっているじゃない」

「君もかい？」

「そうよ」

「しかしそこは、僕の住処であって、君のではない」

「いいじゃない、兄弟なんだから。それに……」

つとくーなは前を向くと、今度は彼女がリュウイチを引きずるような形で、数歩歩いた。リュウイチはいきなり引かれ、バランスを崩して転びそうになって、慌てて走るようにくーなの横に行った。

前につんのめるような格好で走ったリュウイチの目に、くーなの胸元が映った。

くーなの胸はあまり豊かではなかったけれど、ギリシャ彫刻を思わせるような白さで、首から胸にかけてのラインはミロのヴィーナス像を想像させた。リュウイチは少し眩しそうに眉をひそめた顔をした。

「いきなり引つ張るから、コケそうになったじゃないか」早口で、少し強い口調で言った。くーなは全く意に介さない様子で、前を向いたままぼそりと呟いた。

「他に……、行く所なんてないんだもん」
それきり二人は黙って、再び歩き出した。

空気は重く、二人の間に垂れこめた。駅までの道すがら、雨が降り出した。梅雨のどっしりとした空気はいよいよ重さを増し、二人の肩にのしかかった。息苦しささえ覚えるほどである。雨がアスファルトの道を叩き、土埃の臭いが充満した。

リュウイチはカバンから折りたたみ式の黒い傘を取り出した。それを横から奪うようにくーなが取った。手早く広げると、くーなより頭一つ背が高いリュウイチに合わせて、左腕をぐつと伸ばし二人の間に差しかけた。

傘は二人で共有するには小さすぎたが、くーなはリュウイチにぴったりとくっつくようにして駅まで歩いた。

京王線を調布で降りると雨は止んでいた。止んだばかりと見えて、駅前の道にはまだそこかしこに雨水が溜まっていた。

二人は結局、車中でも口を利くことはなく、黙って改札口を抜け、黙って空を見上げた。背格好こそ違い、まるで映し鏡のように二人

は同じ動作をした。

駅からリュウイチの部屋のあるマンションまでは、リュウイチの足できっちり十分間かかる。この日はクーなを連れていたので、十三分を要した。

家に着くと、まずリュウイチはバスタオルを二枚持ち出して、薄桃色の方をクーなに手渡した。

「濡れただろ。拭きなよ」

玄関で立ったままのクーなに言った。長いこと黙ったままだったので、うまく声が出なかった。

傘からはみ出していた右肩を拭いながら、部屋に入ろうとしたとき、玄関からクーなの声が響いた。

「お邪魔しまあす」

クーなはバスタオルを頭に載せて、部屋に入ってきた。まるで薄桃色のフードを被ったような格好で。

食事に行こう、とリュウイチが提案した。しかしクーなは、先にシヤワーを浴びたい、と言った。

「困ったな。でもうちには、クーなが着るような服はないよ」

「やっと私のことを普通に　クーな　って呼んでくれたね」クーなは出会ってから初めて、天使の笑顔を見せた。相変わらず問いかけとクーなの答えはかみ合わない。

「……だからさ、とりあえず食事に行こう。その帰りに服を買ったらしいだろ」

あえてリュウイチもクーなの返事に取り合わず、もう一度提案した。少し照れくさそうに、横を向いた。

「分かったわ。じゃ行きましょう」

リュウイチはこの期に及んで初めて気がついた。クーなはバッグ一つ持たずに、あの研究所から駅に続く道に佇んでいたのだった。

2 くーなの夜話

「ただいま」

マンションに近づくとき、リュウイチの部屋の明かりが点いていた。まだくーなは部屋にいるらしい。

玄関を開けると「おかえりい」という大きな声がした。くーなは元氣よく話すときに、語尾を伸ばす癖があるらしい。部屋の中は、カレーの匂いが充満していて、玄関までその匂いは届いた。

部屋で上着を脱いで、ベッドの上に置いた。くーなが素早く取り上げて、ハンガーに掛けた。その甲斐甲斐しい様子を見て、リュウイチは照れくさい気持ちになった。

いいよ、自分でやるよ。

くーなが笑いながらリュウイチに言った。

「居候だから、これくらいやるわよ。お兄ちゃんには感謝しているしね」

着替えて、手と顔を洗い、部屋の小さなテーブルに着くと、くーながカレーライスを盛った皿を運んできた。

「こんなものしかできなくて」

「カレーライスは大好物だよ」

その言葉に気を良くしたのか、くーなは「いただきます」と元氣良く、語尾を伸ばした。くーなの言葉を合図に、二人は食事を始めた。二人とも黙々とカレーライスを頬張った。

食事を終わると、リュウイチはテーブルの上のリモコンで、テレビのスイッチを入れた。

テレビでは、防衛庁の不正への糾弾をする野党黨員へのインタビューが流れていた。続いて国際問題に関するニュースが始まり、核兵器開発に関する諸外国の対応をテーマにした特集が始まった。

（自分の関わる仕事も一歩間違えれば「核兵器」にもなり得るな。）
リュウイチはサイケデリックな花柄模様の蛇を見たような顔になった。

「ねえお兄ちゃん、どうしたの？」

先程から食い入るようにテレビを見ているリュウイチに、くーなが呼びかけた。

「いや、なんでもない。ただニュースを見て、軍事的な問題は怖いなと思っただけさ」

大学で学んで以来、リュウイチは、いわゆる核融合という化学作用の持つポテンシャルエネルギーの威力が、すばらしく強烈なものであることを知った。しかし核の持つ潜在的な威力が、専ら兵器開発という側面で利用されていることは恐ろしかった。

すでに核兵器を持つ国が、新たに核兵器を持つとする他国をあたかも極悪人のように批判し、糾弾し、必死で止めさせようとすることは、大いなる矛盾であると感じた。我知らず、リュウイチは大きなため息を付き、眉間に大きなしわが刻まれた。

「お兄ちゃん、本当にどうしたのよ。疲れてるの」

心配そうにくーなが顔を覗き込んだ。リュウイチは何かを振り払うように大きく、数度頭を横に振った。そしてくーなの方に向き直った。

「こここのところ自分の生活も大きく変わったから、疲れているのかな。昨日もいろいろあったしね」

「私のこと？」

「うん、それもだ。ところでくーなはどうして僕のところに来たんだい。それに、なぜ僕が君のお兄ちゃんになったのかなあ」くーなの口調を真似てみたが、くーなは笑わなかった。

しばらく、くーなは黙っていた。何事か、考えている様子だった。

リュウイチも黙ってくーなが口を開くのを待った。

リュウイチは何としても、くーなの出自、自分の前に現れた理由を聞き出すつもりだった。そうしなければくーなをここに置いておけ

ない気がした。突然現れて自分の妹を名乗るくーなを、どう扱っていいものか決めあぐねていた。

ややあつてくーなは決心したように毅然とした表情で、リュウイチの顔を見た。あどけない表情に、今は厳しさが絶妙の割合でブレンドされていた。

「じゃ話すわ」

リュウイチが大きくうなずくと、くーなは毅然としたまま話し始めた。

くーなは防衛庁の今は幹部である父を持つ。その父は、先程ニユースで糾弾されていた与党議員とも何らかのパイプがあるらしい。

くーなの父は自分の書斎には常に施錠し、家族といえどもその部屋に入ることは堅く禁じられていた。くーなが小学生の頃、一度たまたま鍵を掛け忘れた父の書斎に入り込み、そこで本を読んでいたことがある。くーなはその部屋で、いつしか寝入ってしまった。

帰宅した父は烈火のごとく、くーなを叱り飛ばした。以来、くーなは父に肉親の親愛よりも 敵 に対する憎しみといった感情を持つようになったらしい。

それからも常に家族さえも立ち入ることのできない結界に足を踏み入れてしまったくーなを父は疎ましく思ったようだった。はつきりと父の口からそのような感情が語られたわけではないが、くーなははつきりと父の思いを感じ取った。

だからくーなは家を出ようと思った。やがてくーなの決心は、彼女の成長とともに具体的な計画の実行へと昇華する。

高校を卒業したらね、家を出ようと思っていたの。そうして本当にか家出しちゃった。

くーなは一気に話し終えて、一息をついた。

（そういえば自分も同じようなことを思った時期がある）リュウイチはかつての自分に重ね合わせた。

くーなの話によれば、くーなは本名を「大和田匡子^{くにと}」という。「く

にちゃん」と呼ばれていたのが「くーにゃん」になり、最終的な愛称として「くーな」と呼ばれるようになった。

「ということは、やっぱり僕は君のお兄ちゃんではない。つまり血を分けた兄弟ではないということなんだね。それに君が昨日、『本名なんてわからない』と言ったこともウソ、ということになる」リユウイチはやや非難するような目でくーなを直視した。くーなは決まり悪そうな顔をした。

「えへへ」そう言つて、くーなは頭を掻くふりをした。

「だってあんなところで、今のような話をするのも変でしょ。それに自分の名前も嫌いだったわ。だから言いたくなかったの」

「家を出たくらいだから、それはそうかもしれないけど、何でよりによって僕を お兄ちゃん に選んだの？」

「何となく、かな」くーなは冗談めいた口調で言った。

「だつてお兄ちゃん、優しそうだつたし、そもそもあの場所まで駅から歩く間、お兄ちゃん以外の人に会わなかったよ」

「たしかにあの駅は人通りも少ないけどさ。よりによってどうしてあの駅で降りたのさ」

「それも、何となくね。風景が田舎っぽくて気に入ったの。こういうところなら、きっと優しい人がいるにちがいないって思ったのよ」
「それで、電柱に寄りかかってゲロしていた僕が、その いい人 だつたつて訳かい」

「ちよつと見ていて痛々しかったけどね」くーなはそこで大笑いし、リユウイチもまた、つられて笑つてしまった。

テレビではまたニュース番組が始まっていた。内容は、先程見たものと変わりなく、どの番組でも「核を放棄しろ」、「役人が税金を無駄遣いすることはけしからん」といった、ステレオタイプで大衆向けのする論調を 解説員 と称する人間が、生真面目な顔をしてテレビカメラに必死に訴えていた。その必死さが可笑しかった。

「ところでくーなのお父さんが、家族にまで秘密にしたかったこと

って、何なんだろう」

「さあ、本当に必死に隠し通していたから分からないわ。でも一度父の部屋に忍び込んだとき見たんだけど、本棚にはやたら『核兵器』に関する本がたくさん並んでいたわね。英語で書かれた本もたくさんあったわ。私は小学校の宿題で、感想文を書くために何かいいお話がないか、探しに入っただけなんだけど。我が家で本といえば、父の部屋以外にはほとんど置いていなかったから」

「ふうん、核兵器ね」リュウイチの心に、何かが引つかかった。それは先程から、ニュースでやかましく核問題について、繰り返し語っていたからかもしれないが。

リュウイチが腕組みをして、ニュースを眺めているとクーナは思い出したように、頓狂な声を出した。

「父の部屋に入ったとき、何となく覚えているんだけど、マル秘のマークが入った分厚い書類が机の上にあったの」クーナは何かを思いつくように、二秒間黙った。

「確か『日本の核兵器開発に関する』何とかって書いてあったような気がする。子供の頃のことだから、よく覚えてないけど」

「えっ、クーナがお父さんの部屋に忍び込んだというのはいつのこと？」

「確か小学三年生だったわ」

「ということは……」

「今から十年くらい前ね」

リュウイチは自分の思いつきに空恐ろしいものを覚えて、それを口にするべきかどうか、逡巡した。いくら顔が青ざめたように見えた。

「お兄ちゃん」心配そうにクーナがリュウイチの顔を見た。

リュウイチは口をつぐんだままだった。二人の間には三十秒間、沈黙が居座った。リュウイチはそれを払いのけるように、重い口を開いた。

「今のクーナの話聞く限り、君が小学校三年生だった約十年前か

ら、日本は核兵器を開発していた、いや少なくともしようとする計画があつたことになるんじゃないのかな……」

リュウイチは言ってしまったから、自分の言葉の重みを改めて思い、再び口をつぐんだ。

くーなにもその重みは伝わった、ようだった。岩にへばりつく貝のように堅く口を閉ざしたリュウイチとテレビとの間を、くーなの視線は行き来するばかりだった。

リュウイチは知ってしまった、あるいは気付いてしまった者の煩悶にもがいた。傍目からは瞑想でもしているかのように見えたが、自分の研究テーマでもあり、己の生業としても関わりのある核というものが、このような形でくーなという一人の少女とともに入り込んできたことに、言い得ぬ戸惑いを感じた。

リュウイチの前に、不定形の大きな「何か」が立ちはだかつているように思えた。恐怖とともに、好奇をくすぐられた。我知らず高揚していた。

くーなが夕食の後片付けを始めたので、リュウイチは風呂に入った。入浴を終えて、再びテレビを見始めたリュウイチの横に、後片付けを終えたくーなが座った。

「私もお風呂に入っている、お兄ちゃん」くーなは最後の「ちゃん」のところで少し甘えるような口調になった。リュウイチはこれまで兄弟を持ったことはなかったが、あたかもくーなが本当の妹であるような錯覚を覚えた。（妹がいるのも悪くないな）

「うん。バスタオルは、洗面台の下の棚に入っている」

「ありがとう」くーなはそう言い残して、スキップでもするような足取りで浴室に向かった。くーなは妹としての地位を得つつあった。

「ああ、やっぱりお風呂つていいわね」くーなが年寄りじみた口調で言いながら、浴室から出てきた。風呂上りで頬を赤く上気させた彼女を見て、リュウイチの心拍数は毎分八十五回まで上昇した。

二人はしばらく風呂上りのコーヒーを楽しんだ。くーなはまだ未成年だったし、リュウイチもあまり酒をたしなむ方ではなかった。食後のコーヒーならぬ、風呂上りのコーヒータ임は、この日以来二人の習慣となった。

コーヒータ임을終えると、リュウイチはくーなに、そろそろ寝ないかと提案した。昨日から、リュウイチの身に様々なことが続けたまに起きたせいで、リュウイチは心も肉体も疲弊していた。

「くーなはそこで寝ろよ」

リュウイチは今まで自分が寝ていたベッドを指差した。自分は昨夜くーながベッド代わりに使った、部屋の片隅に打ち捨てるように置いてあるソファに毛布を持っていた。

「お兄ちゃんがベッドに寝たらいいじゃない。私はソファでいいわよ」

「いいから、ベッドで寝ろよ」リュウイチはさつさとソファに横になり、上から毛布をかけた。くーなは暫く立ったまま、どうすべきか迷っていた。やがて寝ていたリュウイチの腕を取り、彼の体を強く引く張った。

「ねえ、お兄ちゃん。そんなところで寝たんじゃ、寝た氣しないでしょ。あつちで一緒に寝よ」

リュウイチの体はソファから引きずりおろされた。「いてて」と言いながら、リュウイチは仕方なく立ち上がった。

「何するんだよ。もういいから、ベッドで寝ろよ」

「だからあ、ベッドでお兄ちゃんと一緒に寝るう」やたらと語尾を伸ばした口調だった。リュウイチは狼狽した。

「何言ってるんだよ。あんな狭いベッドに二人も寝れないよ。それにくーなは女だし、な」

「別に男も女もないじゃない。だって私とお兄ちゃんは兄弟なんだから」

言い合いは一分三十秒の間続き、軍配はくーなに上がった。リュウイチは狼狽した顔のままベッドに入った。身を横たえるとすぐに、

くーなが横にすべり込んできた。

リュウイチは眠ったふりをした。しかし横でくーながぴったりと身を寄せて寝ていると思うと、再び心拍数が毎分八十五回になった。眠ることなんてできなかった。くーなはそんな様子に気付くことなく、リュウイチの腕にしがみつくように横になり、果ては足まで絡めてきた。

（困った、全然眠れない。）リュウイチは仕方なくくーなの寝顔を見た。しかしくーなはまだ起きていた。至近距離で目と目が合った。くりつとした丸いくーなの目が、微笑をたたえて細長くなった。

「お兄ちゃんに会えてよかったな」

くーなは一言呟くと顔をリュウイチの腕に埋めた。程なく静かで、安らかな寝息が静寂で満たされた部屋に響いた。すぐ目の前には、安心して警戒心を完全に解いてしまった仔犬のように眠るあどけない少女がいた。

リュウイチは手を伸ばして、枕元の照明スタンドの灯りを消した。それからリュウイチはくーなを起こしたりしないように、じっと体を硬直させたまま、まんじりともせず、時間だけが過ぎた。

結局リュウイチがうつとしたのは、もう空も白み始めた頃だった。

3 研究所の朝

東京の梅雨は長く、その日も朝からうんざりするほどしとしと雨が降っていた。空気は比重を増し、体中にまとわりつくようだった。傘をさして、研究所までの道を歩くリュウイチの足取りも重かった。研究所に着いたときには、リュウイチの下半身は雨に濡れ、家を出たときと同じ服を着ているとは思えぬほど色が変化していた。濡れたズボンはリュウイチの歩みをいよいよ重くした。

研究所の入り口には、掌をかざす装置があつた。これで掌の静脈を読取り、その形や模様から個人を認証し、識別する。

リュウイチは装置に手をかざした。緑色のランプが点灯状態から点滅状態に変わり、三秒経過するとピツという電子音とともに、入り口が解錠し、金属製の扉は滑るように横にスライドする。リュウイチは研究所の中に入った。

入り口のすぐ横にある階段で二階上がり、廊下を一番奥まで進んだところにある右側の部屋が、リュウイチの属しているプロジェクトルームだった。部屋の前にも入り口と同様の扉と認証装置が設けられており、研究所員であつても、立ち入りのできる部屋は厳しく制限されている。

また研究所の建物には、窓がなかった。換気ダクトの取り込み口などは設けられているけれども、いわゆるガラス窓というものは一切なかった。

研究所は遠くから見ると、雑木林の中にぼつねんと屹立する箱に見えた。実際、数少ない近所の民家に住む人々は、研究所のことを箱と呼んでいた。

リュウイチが箱の中のプロジェクトルームに入ると、その日は朝からざわついた雰囲気満たされていた。主任研究員であるツジイを中心に、キトウ、ユラ、ミヤシタという先輩メンバーが頭を寄せ合

い、何事かを話し合っていた。普段ならプロジェクトで使用している装置やその試験媒体となる重金属などの点検を行う当番である者が、最も早くプロジェクトルームにやってくる。ほかのメンバーは、当番が点検を終えた頃に出社してくるのが通例であった。この日、多くのしかも上級のメンバーがこのように早く出社することは、異様といえる。この日の点検の担当は、リュウイチだったのである。何か問題があったのではないか。それでプロジェクトの主要メンバーの面々がツジイに呼び出され、こうして集まっているのではないか。

リュウイチはそう推測して、部屋の入り口に掛けてある白衣を着ながら、先輩の集まっている部屋の中心に進んだ。

「おはようございます。何かあったんですか？」

皆がいつせいにリュウイチを見た。口々に「おはよう」と挨拶を返してくれたものの、集まっている理由については誰の口からも説明はなかった。

「リュウイチ、今日の点検当番は確か君だな」主任であるツジイは、今までの話し合いを中断して、そうリュウイチに呼びかけた。

「はい」

「では、まず点検をしてくれ。その後で話があるんだ。できるだけ早く、点検を済ませてきてくれ、頼むよ」

「は……はい」

主任研究員のツジイにそう言われては、点検にとりかかるしかなかった。皆が何を話し合っているのかは気になったが、取り付く島もない。

点検を始めた途端、リュウイチは部屋の様子が不可思議だと感じた（今朝は、すでに誰か点検をしたのではないか）

いつもなら試験を終えた器具やらが雑然と放置しており、それを正しい位置に戻すのも点検当番の役割の一つであった。しかしこの日は、一分の隙もないほどに整然とそれらが並んでいた。もちろん床などもきれいに掃除が終わっている。試験内容によっては、空気中

の塵芥の類も影響するため、特別な掃除機で床といわず壁といわず、埃を吸い取るのもまた点検作業の一部になっていた。

結局、リュウイチは文字通り 点検 はしたけれど、この研究所で点検と称している作業は、この日に限っては何もすることがなかった。

一通り点検を終えた後、リュウイチは皆のところに帰ろうとして、ふと足を停めた。

やはり、おかしい。明らかに、今日はもう誰かが点検をしたとは思えない。だがツジイ主任は、僕に点検作業をするように命じた。どうしてだ。これはもしかして、僕に（つまり僕のような下っ端研究員に）彼らの話し合いの内容を聞かれなくなかったのではないか？

点検はすでに誰かが作業した後をなぞるようなものだった。普段なら慣れているメンバーでも、三十分くらいかかるところだが、十分ほどで終わってしまった。ツジノはできるだけ早く戻ってくるようにと言っていたが、あまりに早く終わってしまった。今すぐ彼らのところに戻れば、点検作業の手を抜いたと思われる可能性がある、と考えた。そこでリュウイチは、部屋の奥にある衝立の中の、コーヒーなどが置いてあるちよつとした休憩コーナーに行った。

衝立の中にある休憩用の丸テーブルには、先客がいた。

同期で研究所に入社したユイである。彼女は研究所の数少ない女性研究員であり、リュウイチが所属するプロジェクトチームの唯一の女性メンバーでもある。少しかだけ褐色の長い髪が印象的な、美しい女性だった。背が高いこともあるが、落ち着いた風貌は実際の年齢よりも年上に見えた。しかしそれは、彼女の美しさを低減することとはなく、むしろその 落ち着き は、彼女の魅力に華を添えていた。

今やユイは、研究所創設以来のビューティフルウーマンとして、すべての男性所員に認知されていた。しかしその美しさは、容易に他

人が近づくことのできない、不可侵領域を彼女の周りに形成するものでもあった。そのためか、今のところユイは、特定の男性所員との噂などはなかった。

ユイは今朝も、オリュンポスの山に住むアフロディテのように、高い美しさを伴い、静かにコーヒーを飲んでいた。白衣を着て、優雅に伸びた足を組み、静かにコーヒーを飲んでいる姿はやはり美しかった。

コーヒーをカップに注いで、テーブルの脇にフラクタルな形状を構成するように置かれている四つの椅子の一つに、リュウイチは腰かけた。その椅子の位置は、ユイの椅子と六十度の角度に置かれていた。椅子に座ると、ユイのスラリと均整のとれた足が、眩しくリュウイチの目に飛び込んできた。

昨夜、くーなと飲んだコーヒーと比べたら、小豆のとき汁のように不味いコーヒーを一口すすった。あまりの不味さにやや顔をしかめて、その顔のままユイの方に向き直った。おはよう、とユイに声を掛けた。

「リュウイチ君、おはよう。今朝はずいぶん早かったのね。私も早めに来たけれど、すっかり点検が終わってたんで驚いたわ」

「いや、そうじゃないんだ。確かに今日は僕が点検当番だったんだけど……」

今朝出社したら、錚々たるメンバーが集まって、何事かを話し合っていたこと。ツジイ主任に点検を指示されたこと。点検をやるうとしたが、実際には点検はもうすっかり終わっていたことを、ユイに説明した。

だからあつという間に点検もおわってしまって、仕方なくコーヒーを飲みに来たんだ。

するとユイが答えた。

「そうなのよ。ツジイさん達が集まって、話をしていたから、私もなんだか入りづらくて、結局ここに来てしまったの」ユイは形の良い唇の端を少しだけ持ち上げて、ヴィーナスの微笑をたたえながら、

そう言った。

「それにしても、一体、何を話し合っているんだろう」

「よく分からないけど、皆さん、とても真剣な顔をしていたわね。近づくな、というオーラを発しているみたいだったわ」

「本当にそうだね。『点検』の指示も、まるで僕に『この場から去れ』と言っているように思えたな」

「そんなことはないと思うけど……」

二人はコーヒーを飲みほすと、どちらともなく、そろそろ戻ろうかと言った。ユイは美しく伸びた髪をさつと翻し、立ち上がった。リュウイチと自分の空の使い捨てカップを取り上げると、傍らのダストボックスにポンと放り込んだ。カランとカップとダストボックスが奏でた、乾いた音だけを置き去りに、リュウイチ達はツジイ主任と先輩メンバーが話し合いをしていた結界に向かった。

二人が再び、そこに戻ったとき、ツジイを中心とした結界は、すでに解けていた。ユイとリュウイチが近づくと、今度は結界の中心にいたツジイも、名前通りオニの形相で結界の境界に守役のように立っていたキトウも、快く笑顔で迎えてくれた。

「おはようございます」

ユイとリュウイチの挨拶が、研究所の部屋にシンクロナイズされて反響した。

「おはよう」ツジイもすぐに挨拶を返し、リュウイチのほうを見て、手招きした。

リュウイチは三步半進み、ツジイの正面に立った。太字のフォントで印刷された一枚の書類を、ツジイは手にしていた。正面のリュウイチからは、その太い字が、逆さまに見えた。その文字は「研究所 視察計画」と読めた。さらに目を走らせると、小さく判読し難い文字も見えた。「大和田」と書いてあるようだった。

「おい、リュウイチ！」

ツジイの呼びかけに、心ここにあらずといった表情のリュウイチは、

ばね仕掛けの人形のように飛び上がりながら「はい！」と反射的に答えた。

「なにをボーツとしてるんだ。今日は 特別な日 なんだ。ちょっとお願いしたいことがあるんだよ。説明するから、そこに座ってくれ」ツジイは自分の後ろにある椅子に腰を掛けながら、その正面の椅子に手を差し伸べて、リュウイチに勧めた。

リュウイチがやや緊張した面持ちで腰掛けると、ツジイが手にしていた先程の書類を見ながら話し出した。

「実は今日、防衛庁のお歴々がこの研究所の視察に来られることになった」

「えっ？ 防衛庁！」

「そうだ、防衛庁だよ。この研究所では、原子炉関係の研究が主なテーマだ。けれどもうちの荒木所長は、一時期、防衛庁にいたことがあってね。その頃一緒に兵器に関する調査なんかをやっていた、

大和田 さんという方がいる。間もなく書記官に昇格されるという噂もあるキャリア組だよ。その大和田さんが、所長に『一度視察させてくれ』と依頼してきたらしいんだ。その視察というのが、実は今日で、私はその視察の案内役を所長から仰せつかったって訳だ」説明しながら、先程見た「大和田」という文字を指差した。今は、はつきりと見える。そこに書かれた文字は、「大和田」に相違なかった。

ツジイは続けた。

「そこでだ。相手は何せ防衛庁のエライさんだ。しかも所長の親友にもあたる。粗相があっちゃいけない。」

「はい」リュウイチの声は、緊張のため若干ビブラートを帯びていた。

ああ、それと、とツジイはより厳しい顔をして言った。

「もちろん今日の視察のことは、トップシークレットだからな！

大和田さんもお忍びで来られる。だから、私も今まで、君たちにも大和田さんが来られることを黙っていたんだ」

「わかりました」二人の声が、絶妙のハーモニーで響いた。その声は、この日突然降ってきたイベントの重要度を、十分に理解していた。

「よし。無論、所内の案内、説明は私が行く。荒木所長の特命だからな。だが所内を一通り見て回るだけでも、結構大変だろ。だから君とユイ君に、休憩の際、コーヒーの給仕や所長との昼食の準備をお願いしたいと思っている。いいな。」

後ろで立ったまま、話を聞いていたユイの方を一度振り返り、顔を見合わせて軽くうなずいた。リュウイチは、二人を代表して「承知しました」と答えた。

「ところでツジイ主任。コーヒーは、あのいつもの休憩所のコーヒーでよろしいでしょうか？」

「何言ってるんだ。あんな不味いコーヒーをVIPに出してどうする。昼食もVIPが来られたとき用のお弁当を調達する店がある。」

君たちには、今から外でそれらを調達してきて欲しい」

そういうとツジイは机上のメモを一枚取り、白衣の胸に挿してあったボールペンでお弁当を調達する店の名前と簡単な地図を書いた。

そして「ほい」と言いながら、それをリュウイチに手渡した。

「さあ、大和田さんは、十一時過ぎにはこちらに到着されることになってる。もう一時間そこそこしか残っていないぞ。手分けして、抜かりのないように急いでくれ」

そういうとツジイは、ポンポンと二つ大きく手を叩き、「じゃ、一旦解散」と言つて、書類を手にして部屋を出て行った。

（「大和田」……どこかで聞いたような。くーな？ そうだ、確かくーなの本名が「大和田匡子」って言ってたな。しかもくーなお父さんは……確か防衛庁のお偉いさんじゃなかったか。まさか！ 今日来る大和田という人が、くーなお父さん！）

座ったままで、いつまでも立とうとしないリュウイチに、後ろで立っていたユイが凜とした良く通るソプラノで、彼の頭上から声を掛

けた。

「リュウイチ君、時間がないわ。遅れるとまずいでしょ。早く行きましょう」

ユイの声は、細く研ぎ澄まされた針のように、痛みを感じることもなくリュウイチの頭に刺さった。彼は我に返った。

「ああ、ごめん。そうだね、早く行こう」リュウイチは椅子に座ったときと同じように、ばね人形になった。

研究所を出ると、リュウイチはユイに、手分けして「おいしいコーヒー」と「VIP弁当」を買いに行こう、と申し出た。彼女も同意した。

「じゃ、私コーヒーを買ってくるわ。おいしいのをね」おいしいの部分だけが、一オクターブ高かった。ユイは少し上目遣いで、意地悪そうな顔をして笑った。

「じゃ僕も、せいぜい大和田先生でも、箸をつけていただけのようなVIP弁当を探してくるとしよう」

リュウイチは研究所から駅に向かう道に出た。最初に交差する四ツ辻で、手を振りながらユイと別れて、左に折れた。三十分後に研究所の前で落ち合うことにし、遅れそうなときは、互いの携帯電話に連絡することを申し合わせた。「粗相のない」ように、である。

弁当を買いに向かう道すがら、リュウイチはくーなの顔と「大和田」の文字をずっと反芻した。

4 邂逅（前書き）

2008年、あけましておめでとうございます。今年もよろしくお
願いします。

4 邂逅

箱の前に、大きな黒光りした車が到着した。入り口では、荒木所長以下、研究所のメンバーが整然と並び、今や遅しと車の到着を待っていた。

荒木は紺色のスーツを着ていたが、その横には一様に白衣で固めた所員が、ズラリと並んだ。灰色の空と灰色の箱を背景にして、白衣の集団は周りの景色からくつきりと浮かび上がった。さまざまな色彩に揺れている傘と白で統一された集団のコントラストが、まますまず彼らだけを浮かび上がらせた。

まがまが 禍々しいほどに黒い車が、箱に向かってゆっくりと進んできた。その車は、荒木の三メートル手前で、右にステアリングを切った。見事に荒木の横に左後部座席の扉が停止した。

後部の座席には、誰かが乗っているようであった。しかしリアウィンドウには車と同様の黒い遮光フィルムが貼られており、車中の人物を外から確認することはできなかった。

車が停止して約十五秒経過した。右のフロントドアが開き、中から典型的な運転手と思しき人物が頭を出した。車越しのため上半身しか見えなかったが、神経質そうな線の細い男である。車を出るとすぐ、黒い大きな傘を開き、荒木に向かって会釈をした。そして長く伸びた車のフロント部分を大きく回り、左後部の扉のところに進んだ。

「中川さん、ご苦労さまです」目の前に運転手が来たときに、荒木が声をかけた。中川と呼ばれた男は、扉に伸ばした手を一度停め、改めて荒木に向かい、今度は深々と頭を下げた。

「ご無沙汰しております、荒木所長。研究所の視察をご快諾いただき、本当にありがとうございます」

いささか芝居がかっていると思われるほど丁寧で紋切り型の言葉で、中川は挨拶を返した。再び扉に向き直り、持っていた大きな傘を扉

の上部に差しかけた。そして純白の手袋をした手で、ゆつくりと扉を開いた。「ガチャリ」と扉の開く音は、あたかも大聖堂の扉を開けたときのように、荘厳な音に思われた。

開かれた扉から、中川に輪をかけて神経質そうな男が、ゆつくりと立った。仕立ての良いダークグレーのスーツに包まれた体軀はがっしりしていたが、太っている印象はなかった。十分すぎるほどの威厳を保ってはいたが、むしろどこことなく脆さを感じさせる雰囲気があった。

すぐに中川は濡れないように傘を差しかけた。

中川と今しがた車から出た男は、扉をはさんで立っていた。そのため大きな傘といえども、二人を雨から覆うことはできなかった。中川の衣服にはたちまち梅雨の重たい雨がしみこんだ。

「やあ、荒木君。元氣そうだな」

「そちらこそ。ずい分出世されたみたいで何より。今日は生憎の天気だな」

荒木の言葉に、男は相好を崩しながら右手を差し出した。荒木もそれに応えて、三秒間笑顔で握手をした。男は、横で傘を差し出している中川には、まったく頓着しなかった。

荒木が握手をしながら、ちらつと中川に目を走らせた。そして握手していた右手を解くと、男に言った。

「さあ雨の中で立ち話もなんだから、早速だが中へ入ろう、大和田君」

「うむ」荒木に促され、大和田は研究所の入り口に進んだ。後ろから傘を持って、中川が寸分違わぬ歩幅で、傘を持ったまま続いた。扉の前で、大和田はようやく後ろに中川が立っていることに気付いた、という風に振り返った。

「ああ、中川君。今日は一日こちらにお邪魔することになる。午後四時にまたこちらに車を回してくれ」

「わかりました、先生」中川は恭しくこつこつ答えた。

荒木の合図でツジイが認証装置に掌をかざし、入り口の扉が開いた。大和田は感心したように、荒木に尋ねた。

「荒木君、こちらの研究所は静脈認証で制御されているのかい？」

「うん、そうだ。入り口も各部屋も、すべて地下の中央監視センターにある認証用サーバに繋がっている認証装置で制御しているんだよ」

大和田と荒木を先頭に、所員が続いて入り口のホールまで進んだ。

そこで振り返って、荒木は集まった所員たちに、大和田を紹介した。

「みんな、こちらが今日、当研究所の視察に足を運んでくださった、防衛庁の防衛政策局におられる大和田局長だ」

横に立つた大和田は、一度首だけでお辞儀をした。

「今、荒木所長に紹介いただいた大和田です。皆さん日々研究に取り組んでおられるお忙しい身ながら、今日は私の視察を承諾いただいて、ありがとうございます。かねてから荒木所長には、最先端の研究設備や優秀な諸君があげてこられた成果の話を伺っていた。だから一度、この目で研究所と諸君の成果を見たくなり、荒木君にわがまを言っ、て、視察を了承いただいた次第だ。是非、いろいろと見せていただきたい」

いかにも役人調の、いささか長い挨拶が終わった。大和田は再び、目の前に並ぶ白衣の集団に頭を下げた。今度のお辞儀は、腰から深々と下げたもので、きっちり三秒間だった。

「そういう訳で、今日は君たちの日頃の成果をとくと大和田局長に見ていただくつもりだ。大いに成果を自慢してやってくれ」

荒木は言いながら、大和田と顔を見合わせ、笑った。その声はホール中に響いた。白衣の集団が大和田に揃って頭を下げた。

荒木がツジイに右手を伸ばして、手をひらひらさせて「ちよつとこちへ来てくれ」と合図した。ツジイは素早く、荒木のところまで小走りした。荒木はツジイを、大和田に紹介した。

「こちらが当研究所の主任を務めるツジイ君だよ。君の視察の案内

は、ツジイ君に任せてある。僕の片腕といってもいい男だ」

「本日は案内役を務めさせていただきます。ツジイです。よろしく
願います」

ツジイが大和田に頭を下げた。大和田は右手を差し出して、「ああ、
よろしく頼むよ」といいながら握手を求めた。おずおずとツジイも
右手を差し出した。

握手が済むと荒木が、大和田にまず自分の部屋に来いと誘った。

「視察の前に、これまでの成果なんかを一通り説明しよう。まずは
私の部屋で話そう」

荒木はツジイに言った。

「ツジイ君、悪いが私の部屋にコーヒーを二つ運んでくれないか。
君が運んでくるんだぞ」荒木は大和田とともにホールの奥にある所
長室に向かって歩き出しながら、もう一度念を押した。

「いいかい、僕の部屋には君が運んでくるんだ」

二人はツジイと白衣の面々に見送られながら、ホールから続く廊下
を進み、所長室に吸い込まれた。二人の姿が消えると、それまで整
然と並んでいた白衣は、それぞれの部屋へと散っていった。

ツジイはプロジェクトルームに戻ると、リュウイチとユイを呼んだ。
「どうだい、準備の方は」

「はい。コーヒーも買ってきましたし、昼食の方も手配できました。
昼食は、お昼前にこちらに届けてもらおうよう、お願いしてきました」
リュウイチが答えた。

「そうかい、ありがとう」

「ところでツジイ主任」

「うん、何だい？」

「先ほど所長が、ツジイ主任に、自らコーヒーを持ってくるよう念
を押していましたが、どうしてですか？」

「あの部屋に入れるのは、きっと所長以外に僕だけだからじゃない
かな」

「そうなんですか！」

「今日の視察の案内を任されたときに、所長がいろいろと打ち合わせもあるからと言って、下の管制センターに所長室への入室権限リストに私も登録してくれるよう、お願いしてくれたんだ」

「なるほど、そういうことですか。ほかに登録されている人はいないですね」

「うん。確かに所長以外には、僕だけのはずだ。所長の部屋にはいろいろと機密情報もあるからなあ。そうそう誰でもが立ち入れるようでは、困ってしまうだろう」

「そういうとツジイは立ち上がった。「じゃ、これから打ち合わせが始まるんで、何かあったら連絡してくれ」

リュウイチとユイも、ひとまず今日の実験の準備にとりかかった。

結局、荒木と大和田の会談は、その日の午前中いっぱい時間を要した。

5 ハッピー・バースデー

リュウイチは調布駅に降り立つと、汗を拭った。梅雨はもう明けようとしており、真夏の陽光に地表にある全てのものがとろけてしまいうそであった。

七月二十九日。クーなの十九回目の誕生日にして、リュウイチの二十三回目の誕生日である。奇しくも同じ日に生まれた二人は、突然の出会いから三十日という期間を共有したことになる。

武蔵野丘陵にあるこのベッドタウンの空は暮れなずみ、それでも暑さは一向に衰えを知らずにいた。コンコースを抜け、駅に併設されたビルに飛び込むと、冷たい空気に包まれた。吹きだした汗が瞬時に揮発して、急激に体温を奪い去るような寒さを覚える。

地下に降りて、リュウイチはいくつかのコンフェクショナリーを順に見て周った。しかし見れば見るほど、どの店でクーなのバースデーケーキを買うべきかという、簡潔だが深遠な命題を前に戸惑うばかりだった。

しかし冷風に包まれた地下街で、深遠なる命題への思索をするための時間は、長くは与えられなかった。リュウイチが着ているスーツの胸ポケットの中で、携帯電話が震えたからである。

クーなからのメールが届いていた。

おつかれさま。お兄ちゃん、誕生日ケーキ買ったからね！早く帰って、一緒にお祝いしよう。

了解。実は今、俺もケーキを買おうと迷っていたところ。じゃこれから家に帰るよ。

手早く返信すると、再び地上階に出た。

一階でフロアマップを見て、小さなジュエリーショップに向かう。店員は愛想良くいらっしやいませと声をかけたが、リュウイチはその声を意図的に無視した。そうして素早くショウウィンドウの中にちりばめられたアクセサリーと、その横に鎮座する、顔を近づけな

いと読み取れないほど小さな字で値段の書かれた札を見回した。

声をかけた手前、リュウイチの前から動くこともできず、笑顔を凍りつかせたまま、その場に硬直した店員に、一つのピアスを指差した。

「これを」リュウイチが放った短い呪文に、店員の凍りついた微笑は氷解した。

「こちらでございますね」ほっとしたような顔の店員はすかさず顧客向けの微笑を作り直し、リュウイチをにこやかに直視したまま言った。

シヨウウインドウの中に、すらりと伸びた白い腕が差し入れられた。ピンク色の小さなダイヤ型をした石がはめ込まれたピアスは、店員のすらりとした指につままれ、シヨウウインドウの上に置かれた。

「どなたかへ、贈り物ですか？」

「……ええ、まあ。兄弟なんです。誕生日で」

「では、ギフト用にお包みます。こちらへどうぞ」

店員に促され、リュウイチはレジカウンターに進んだ。店員にリボンの色を尋ねられ、桃色のリボンを選んだ。クーなを思い出すと、一緒に家に連れ帰ったときの、薄桃色のバスタオルを被った姿が、今も印象的な記憶としてあった。そのとき以来、リュウイチにとって、クーなのテーマカラーは桃色になった。

青いパステルカラーの紙に包まれた小さな箱をカバンにしまうと、リュウイチは出口に向かった。自動ドアが開くと、重く、湿っぽい外気がビルの中へなだれ込んできた。

「ただいま」

リュウイチが部屋に入ると、すでにテーブルの上にはクーなの心づくしの料理が並んでいた。

テーブルの真ん中には、純白のクリームの上に色とりどりのフルーツが並んだケーキが鎮座していた。中央にはチョコプレートでできた楕円形のプレートが置かれている。白いチョコプレートで、英語のよ

うな文字が書かれていた。

Happy Birthday Ryuichi & Coona

リュウイチの顔がほころんだ。キッチンから、最後の皿を手にしたくーなが出てきた。

「おかえりなさい。お兄ちゃん、お誕生日おめでとう」

「ありがとう。くーなも今日だろ。おめでとう」

くーなは手にしていた皿を、テーブルの残り少ない隙間に無理やり押し込んだ。

「さあ、お兄ちゃん、早く着替えて、手を洗ってきて。お祝いしましょ」

「うん」リュウイチは部屋に入り、カバンを置いた。スウェットにTシャツといういでたちで洗面所に向かうと、汗でぬらぬらした顔と手を洗った。そしてもう一度忍び足で自室に戻ると、カバンの中から桃色リボンの箱を取り出し、スウェットのポケットに押し込んだ。

テーブルに着くと、ケーキには太いキャンドルが二本と細いのが三本立っていた。

「くーな、君の歳にあわせたらうそくにしたらいいじゃないか。そのほうが本数も多いしさ」

「多すぎて、一度で吹き消せないわ。それに、それしかろうそくを貰ってこなかったの」

リュウイチの許に身を寄せてからすぐ、くーなは調布駅の近くの洋菓子店でアルバイトを始めていた。この日のケーキも、その店で安く譲ってもらったのだと言う。

食後のコーヒーを飲みながら、リュウイチはポケットから小箱を取り出した。長い間、ポケットの中に幽閉されていた小箱は、リボンの形がやや崩れかけていた。リュウイチは、リボンの形を手早く直し、包みをくーなに手渡した。

「改めて、誕生日おめでとう」

くーなは突然差し出された小箱に、目を丸くした。

「ありがとう！ 本当に貰っていいの」丸い目をしたまま、くーなは両手で包み込むように、小箱を受取った。

「何かなあ？ 開けてみてもいい」

「ああ、安物ですまないけど……」

細く白い指先がリボンの端をつまみ、惜しむようにゆっくりとリボンが解かれた。包装紙を開けると、中からビロードのような布が貼つてある、小さな箱が現れた。

「わあ、ピアスね。カワイイ！ 本当は高いんじゃない、大丈夫？」
くーなは笑いながら、リュウイチの顔を覗くようにした。

「いや、安物だよ。まだ安月給だから、それで勘弁してよ」

「とんでもない。嬉しいわよ、お兄ちゃん。本当にありがとう。居候させてもらっているだけでもありがたいのに……」

一瞬、くーなは顔を歪めた。双の瞳がうるんでいた。

それまで着けていた本当に小さなピアスを外すと、くーなはピンクに輝くプレゼントを手にした。くーなの両耳で揺れるそれは、小さくて白い彼女の顔によく映えた。

「どう？」

「うん、とってもよく似合うよ。馬子にも衣装、だな」

「ひどい」

くーなはからかうリュウイチを叩く真似をして、一瞬ふくれっ面をした。そして二人は顔を見合わせて、大きな声をあげて笑った。

「さあ、お次はケーキね」

くーなはケーキに並ぶキャンドルに火を点け、部屋の灯りを消した。再び席に着いたくーなの両耳のピアスが、キャンドルの光を受けて、^{なまめ}艶かしく揺れていた。

「吹き消していいわよ、お兄ちゃん」

その声にリュウイチは一息で炎を吹き消した。真つ暗な空間に、キャンドルの先からほの白い煙が、ゆらゆらと立ち昇った。

部屋の照明が再び室内を明るく照らした。くーなは拍手をしながら、

歌いだした。このときのくーなはリュウイチのところに来て、一番楽しそうに、輝いて見えた。

ささやかな誕生日の祝いの翌日。蒸し暑さは相変わらずである。

この日、仕事を終えて調布駅に降り立ったリュウイチの横に、一人の女が立っていた。ユイだった。

金曜日だったので、週末を深大寺の近くに住む姉夫婦のところでごすと、彼女は話した。リュウイチは、それならば調布まで一緒に行こうとユイに申し出た。

そのユイが、リュウイチと一緒に調布駅の改札を出て、バスターミナルのある駅のロータリーに現れたのである。時刻は七時を回っており、くーなは一時間ほど前にアルバイトを終えて、もう部屋に戻っているはずであった。

しかしくーなは、駅の横の、昨日リュウイチがプレゼントを買い求めた店のあるビルから、今まさに出てきた。

昨日、自分だけプレゼントを貰った手前、ネクタイでもと思い立ち、アルバイトの帰りに立ち寄っていたのだった。

リュウイチはくーなに気付いていなかった。しかしくーなからは、背の高いリュウイチとあまり背格好の変わらないすらっとした容姿の、美しい女性が並んで歩くのが良く見えた。

くーなはくるりと踵かかひすを返した。駅のロータリーを大回りして、後ろを振り向くことなく、一目散に家に向かった。

リュウイチとユイは、談笑しながら 深大寺行き のバス停の場所まで、肩を並べて歩いた。ユイはまだくーなと面識はなかったが、リュウイチはすでに、突然我が家に闖入してきた我が妹について、すでにユイに話していた。

「このバス停から乗ればいいよ。じゃおつかれさま。気をつけて」バス停で、リュウイチはユイにそう言うと、再び駅の方へ戻ろうとした。ユイの声が、リュウイチの背中を追いかけた。

「じゃ、妹さん にもよろしくね」

リュウイチは、ユイに背を向けたまま、大きく上げた手を三回降つて、挨拶した。丁度バス停に、深大寺と表示されたバスが入ってきたところであつた。

その頃、くーなはすでに駅を離れて、大股で、今にも駆け出しそうなほどの早足になり、マンションへと向かつていた。

帰宅するなり、リュウイチはまだ靴も脱ぎ終わらないうちに、くーなから細長くて、薄い、黄色の包装紙にくるまれた箱を押し付けられた。

「はい、プレゼント」

くーなはそのまま、サンダルを履いて出て行つた。すれ違いざま、ちらと見えたくーなの横顔は、泣いていたように見えた。

「おい、くーな……」

その声は階段を駆け下りるサンダルの音にかき消された。

取り残されたリュウイチは、彼の胸の中に取り残された包みを見た。テーブルの脇にカバンを置いて、包みを開けた。

中から細長くて薄い箱が出てきた。開けると黄色地に水玉模様をあしらったネクタイの上に、誕生日おめでとうと書かれた小さなカードが添えられていた。

リュウイチは玄関を振り返つた。くーなの幻影でも探すように。

しかしそこには、開け放たれたままのドアと、ドアで長方形に切り取られた廊下の白い壁が見えるだけだつた。

カードを箱に収めて、再び閉めた。リュウイチはソファに上着をポンと放り投げ、もう一度靴を履いた。廊下に出て、階段を駆け降りた。

マンションを出ると、左右を見回しながら、大きく二回「くーな！」と叫んだ。無論、返事はない。

リュウイチは駅に向かった。まだあまり土地勘のないくーなは、おそらく駅の方角に向かうと判断した。

しかし駅までの道程で、くーなを見つけることはできなかった。駅

とマンションの間を何度もくーなを探しながら、三往復した。リュウイチは今にも泣きそうな顔になって、もう一度駅に向かった。駅に着くと、ロータリーを三人組で歩いているユイに出くわした。姉夫婦とともに、再び食事に出てきたところだった。

ユイは姉夫婦を紹介しようとしたが、リュウイチの姿を見て、その言葉はユイの口から出る前に飲み込まれた。

汗みずくになって、荒い息をしているリュウイチを見て、ユイは目を丸くした。

リュウイチ君、どうしたのよ？ 汗びっしょりになって。家に帰ったんじゃないの？

くーなが……あ、妹が出て行ってしまったんだ。

リュウイチは膝に手を突いて、前かがみになると大きく五回、肩で息をした。そしてユイに家に帰ってから、くーなが家を飛び出すまでの経緯^{いきさつ}を話した。

ふうん、くーなちゃん はリュウイチ君に誕生日プレゼントを渡してから飛び出たのね。

そうなんだよ。まったく訳が分からない！

未だ息が整わず、途切れがちな言葉でリュウイチが語った。

そうでもないわね。きつとくーなちゃんは、駅で私たちが話しながら歩いているのを見かけたのではないかしら。

でも、あの時間にくーながどうして駅に……。それに君と僕が歩いているのと、くーなが家を出ていくことの因果関係が分からない。

ふふっ、とユイは口に手を当てて笑った。

そういうものよ。オンナゴコロね！

オンナゴコロ？

そう。失礼だけど、くーなちゃんはリュウイチ君と血が繋がった兄弟ではないでしょう。つまり 恋 ね。ジェラシーと言い換えでもいいわ。

ジェラシー……、じゃくーなは君と歩いている僕に妬いていた

という訳かい？

おそらくね。まして今は、あなたのところしか身を寄せる場所がないんだもの。唯一頼りにしていたリュウイチ君が、私と歩いているのを見て、心細くなつたかもしれないわね。そう言つと、ユイはくーな搜索の手伝いを申し出た。

折角食事に出てきたんだろ。お姉さんたちに、悪いよ。

ま、私にも責任の一端があるわけだし。くーなちゃんだって、知らない土地でいつまでも一人にしておくのは可哀そうだね。

しかし、君の責任ではないよ。

いずれにしても、一人より四人の方が早いわ。

ユイは姉夫婦に向かつて言った。

「人捜しをするの。私もあまりこの辺りの地理は詳しくないし、手伝つてくれない？」

そついうと再びリュウイチを見た。

「ところでくーなちゃんの写真、持つてない？」

リュウイチは携帯電話を開き、デジタルカメラで撮影したくーなの顔を見せた。ユイは忘れないように、ユイの携帯電話に写真をメールで送信してくれないかと言つた。

万事てきぱきと事を進める、研究所での姿そのままのユイがいた。見つけたら、互いに携帯電話で連絡することを申し合せて、駅周辺はユイと姉夫婦に任せた。

「折角のお食事を邪魔してしまつて、申し訳ありません。よろしくお願いします」

姉夫婦に一つ頭を下げて、リュウイチは再び自分のマンションの方へと駆け出した。

マンションに近づくと、街灯の物陰に人影が見えた。くーな、だつた。

くーなは電柱に寄り添うようにして、しゃがみこんでいた。それを見たリュウイチも、一気に膝の力が抜けて、同じようにしゃがみこ

んだ。

「くーな」

荒く呼吸を繰り返す合間に呼びかけた。返事はなかった。しゃがみこんだくーなは、電柱の街灯が形づくる、影のわだかまりの一部と化していた。

「くーな、だろう？」

リュウイチは立ち上がると電柱に近づいた。黒いわだかまりがわずかに動いた。くーながリュウイチから顔を背けたせいだった。

「どうしたんだ、くーな！ とにかく家に帰ろう」

それきり微動だにしようとしないうちに影をリュウイチは掴^{つか}んで、強引に引き上げた。泣いた痕がくつきりついたくーなの顔が、街灯の明かりでぼんやりと照らされた。

くーなは何度か、リュウイチの手をふりほどこうとしたが、やがておとなしくなった。手を掴んだまま、リュウイチは部屋に戻った。

テーブルの足の横に置かれたカバン、ソファに打ち捨てられた上着、テーブルの上の細長い箱が、出て行ったときのまま空しく置かれていた。

リュウイチはテーブルの上の箱を手にとると、軽く二回、テーブルの脇にうずくまるようにしているくーなに振って見せた。努めて平静を装うように、くーなに語りかけた。

「これ、ありがとう。くーなもいいセンスしているなあ」

そういつてくーなに微笑んで見せた。くーなは笑わずに、自分の膝を見つめていた。

そつとリュウイチは、くーなの腕をとって、立たせた。もう抵抗はしなかった。再び、くーなの瞳は涙で満たされた。

「さあ、もう泣くな。顔を洗ってこいよ。明日は休みなのに、その顔じゃどこにも出かけられないぞ」

口を開くととめどなく涙が出そうだったくーなは、何も言わず、かすかに頷いて、洗面所に向かった。

くーなが洗面所に言っている間に、リュウイチはユイの携帯電話に

ダイヤルした。三回の呼び出し音の後、ユイが出た。まだ何も言わないうちに、ユイの声が電話口から飛び出した。何かにつけ先を読む、回転の速いユイらしかった。

くーなちゃん、見つかったの？ 見つかったのね。

ああ、実はマンションに戻ると、マンションの入り口にいてさ。灯台下暗しって感じだよ。

良かったじゃない。じゃくーなちゃん、今家にいるのね。

うん。ところで君たちは今、どこにいるの？

メゾン調布第一 って建物が見えるわ。

じゃあ、僕の家近くだ。ちよつと待ってくれるかい。

リュウイチは表の道路に面したベランダに出た。さつきまでくーながしゃがんでいた電柱を見た。電柱の先に、小さく三人組が見えた。

おおい。

電話にそう呼びかけながら、ベランダから手を振った。ユイは何度か振り返ったりしていたが、やがてベランダのリュウイチを発見した。

ああ、見えたわ。そこね。

せつかくだから、少し寄っていつてくれないか。お茶くらいいいだろう。

そうね、じゃお言葉に甘えるわ。くーなちゃんにも会いたいし、ね。

そこで電話は切れた。三人組は電柱の影まで来ていた。

くーなも洗面所から戻ってきた。腫れぼったい目をしていた。リュウイチはコーヒーを淹れるために台所に向かいながら、くーなに話しかけた。

「くーな、もうすぐ素敵なお客さんがやってくるぞ。インターホンが鳴ったら、鍵を開けてくれ」

五秒後、果たしてインターホンは鳴った。くーなが玄関の鍵を開けた。ドアノブがゆっくりと回り、ドアが開いた。

くーなの目の前に、先程駅で見た綺麗で背の高い女性がいた。

「こんばんは。くーなちゃん、ね」

くーなの目の前に、再び件の美麗な女性が現れ、いたずらっぽい顔で微笑んでいる。その女性の後ろに、もう二人の男女がいた。

「どうぞ」

くーなは目を丸くした。

（さっきのきれいな人じゃない。どうして私の名前を知っているのかしら？）

「お邪魔します」ユイは、くーなのジェラシーを再び増長させるほど上品な口調で言った。静かだがよく通る声だった。脱いだハイヒールにも、くーなにとっては大人の女性の魅力があふれているように見えた。

「いらつしゃい」リュウイチは台所から出てきて、ユイと姉夫婦を迎えた。

「くーな捜しを手伝ってくれてありがとうございました」もう一度、三人に頭を下げた。リュウイチとユイの顔の間を、秒間一往復のスピードで、くーなの視線がせわしなく往復運動を繰り返した。

「くーな、こちらは僕と同じ研究所のユイさんだ。後ろにいるのが、ユイさんのお姉さんとその旦那さん。お姉さん達は調布の近くに住んでいて、ユイさんは週末、お姉さんのところに遊びに来たって訳さ」

まだ見開いた目を往復運動させているくーなに、かいつまんでユイを紹介した。リュウイチに対するライバルとして見ていたユイに関する、リュウイチ自身からの説明を聞いて、くーなは自身の誤解に屈服するしかなかった。

くーなは恥ずかしそうに下を向いた。

早くも察したユイが、くーなの肩にそつと手を置いて、語りかける調子でくーなに囁いた。

「くーなちゃん、いいのよ。勘違いするのも無理はないわよね。それにおかげで、こうしてリュウイチ君のご自慢の妹さんに会えたんだし……」

「おいおい、僕がいつ自慢したんだい」リュウイチはいきなりのユイの言葉に、思わず横槍を入れた。ユイは取り合わず、くーなの顔を見たまま、「ふふふ」と笑っていた。その笑みはまさしく 大人の女のそれであった。くーなは、その余裕を悔しく思った。

しかしまだ完全に失ったわけではなくくーなのプライドが、彼女の顔に笑みを作った。やがて悔しさは、ユイがリュウイチに 特別な感情を持っていないことがわかると、姉に対する思慕へと変化した。

リュウイチはその笑顔を見て、再び台所に戻った。程なく湯気を立てている五つのコーヒークップを載せた盆を持ち、テーブルに現れた。

結局その日は、リュウイチ、くーな、ユイ、ユイの姉夫婦で、リュウイチの部屋で食事を共にした。近くで買ってきた寿司を皆でつまむだけの簡素な食事だったが、久しぶりの賑やかな食卓は、リュウイチもくーなも、晴れ晴れとした気持ちにさせた。ユイらが暇乞いをする頃には、くーなとユイもすっかり打ち解けて、あたかも本当の姉妹のように談笑しているのだった。

「じゃそろそろ失礼するわ。リュウイチ君、すっかりお邪魔したわね」

「いや、こちらこそ……」リュウイチの言葉をすぐに受け取って、くーなが横から口をはさんだ。

「ユイさん、また遊びに来てね」

「現金な奴だ」そう言うのと、リュウイチはくーなの頭を小突く真似をした。くーながユイに向かって、ペロりと舌を出した。

ひとしきり五人は晴れ晴れとした笑いを交わし、ユイと姉夫婦は立ち上がった。

リュウイチは玄関まで見送りに出たが、くーなはそのまま玄関を、ユイたちと一緒に出て行った。

「おい、くーな。今度はどこへ行くんだよ」

「ユイ姉さん を下まで見送りに行くだけよ」振り向いてくーな

はリュウイチに頷いた。

「一体、何人を兄弟にしたら、気が済むんだ！」あきれ顔でリュウイチが言った。

ユイがくーなに向かって、諭すように言った。やはり 大人の女の余裕を含んだ口調で。

「だめよ、くーなちゃん。そんなこと言っちゃ。今度は、お兄ちゃんが妬くわよ」

リュウイチを玄関に残して、ドアがゆっくりと閉まった。リュウイチは「ほっとけよ」と口を尖らしたが、その声は閉じたドアに跳ね返された。

仕方なくリュウイチは、ベランダに出て眼下の道路を見た。去りゆく三人組に向かって「また来てね」と言いながら、いつまでも手を振っているくーなが見えた。

その姿を見ていると、くーながあの 大和田局長 の娘かと、リュウイチは訝しく思った。リュウイチの心に兆して以来、ずっと黒い澱^{おり}としてわだかまっている あのこと が、またも鎌首を持ち上げていた。

くーなが手を振っている間、リュウイチは飽かず彼女をじっと見つめた。

6 檻、兵器、ピラス

誕生日の翌日、リュウイチはクーなと連れ立って、動物園に行った。前夜、ユイと姉夫婦が帰った後に、リュウイチは「明日、デイズニールランドにでもいかないか」と持ちかけた。クーなの年頃なら、きっと誰もが一番行ってみたい場所だと考えたからである。

しかしクーなの反応は、案外だった。

「動物園がいいな。私ね、遊園地の乗り物って苦手なの。特にジェットコースターのようなものは、あまり好きじゃないわ」

リュウイチは自分の提案が却下され、しばらく逡巡した。だがクーなの意思を尊重することにした。

調布からなら、京王線で行ける動物園もあるしな、と考えた。

「じゃ、そうしよう。実は僕もまだコアラを見たことがないしね」

動物園に着いた途端、クーなは子供に返ったようにはしゃぎ、檻のなかの動物に「こんにちはア」などと話しかけ、手を振っていた。両耳に光るピラスだけが、クーなの本当の年齢を主張していた。

開園とほぼ同時に入場したにもかかわらず、午前中いっぱいかけておおむね半分の動物を観るのがやっとだった。

「遠足の前の日みたいな気分で、眠れなかったの」と言い、やたら早起きしたクーなが作った弁当を、シマウマの見えるベンチで広げた。快晴の空から降り注ぐ陽光は、二人のむき出しの腕を焦がすようだった。

だが二人とも、気分は清々^{さすが}しかった。

「クーな、おいしいよ。それにしても、随分たくさん作ったなあ」「だって眠れなくて、作る時間がたっぷりあったもの。どんどん食べてね」クーなが笑った。

「でも、どうして動物園なんだい？ 普通、クーなぐらいの女の子って、デイズニールランドなら間違いなく行きたがると思ってい

「だけどな」

「嫌いじゃないけど、動物園には 本物 の動物がいるでしょ。デイズニールランドじゃ、中に人間の入ったネズミやアヒルしかないじゃない」

「ま、それはそうだけど……」

「それに海賊が戦争するアトラクションとか、あまり夢があると思わないわ。檻に入っけていても、本物の動物を見ているほうが素敵よ」動物の方が良いと語るクーナの瞳は、不思議に強い意志を持った輝きを放った。

クーナの心づくしの弁当を食べて、リュウイチは近くの売店で、コカコーラを二つ買ってきた。よく冷えた黒褐色の液体は、炎天下に焼けるような二人の喉を快く潤した。

「じゃあさ、午後は檻に入っていないライオンを観よう。ライオンの代わりに、僕たちがバスの中から観るんだ。僕たちが檻に入るんだよ」笑いながら、リュウイチがそう持ちかけた。

「なるほど、私たちがライオンに観られるって訳ね。面白そう！」弁当の後始末を終えると、通称ライオンバスと呼ばれている、色が塗られていなければあたかも護送車を思わせるバスの乗り場に向かった。

バスに乗ると、しばらくしてライオンが群がってきた。バスの窓にはライオンが首を突っ込まないよう、鉄格子が嵌め込まれていた。鉄格子を張り巡らしたバスの車内は、動く檻であった。

ライオンがバスの外に取り付けられた肉片目がけて、のっそりと歩み寄った。肉片をむさぼるライオンを、鉄格子一つ隔てた車内から見た。その迫力に、クーナは手を打って喜んだ。まるで自分の指まで差し出してしまうのではないかと、心配になるほどに。

「おい、クーナ。騒ぎすぎだぞ。子供だってもう少し行儀良くライオンを観ているじゃないか」

「だって……」クーナは少しすねたような素振りをした。それでもバスの周りの肉片にかじりつくライオンから、目を離すことはなか

った。

「こんな近くでライオンを観るの、初めてだもん」

ゆっくりとバスは走っていたが、それでも十分そこで短いサファリツアーは終わった。くーなは名残惜しそうに、遠くなるライオンの群れを見送った。

「ああ、楽しかった。じゃいよいよ、次はコアラね」

そう言つて、コアラ館と書かれた看板が示す矢印の方角へ、駆け出した。

全ての檻を余さず観た。

最後に出口の脇に設けられた土産物売場に立ち寄った頃には、閉館も間近い時間だった。夏の空はまだ高かったが、土産物を物色していると、閉館を告げるアナウンスが流れてきた。

くーなはおそろいのマグカップを手にして、リュウイチに見せた。

風呂上りのコーヒー用だと言う。

閉店間際で、レジの前には列ができていた。カップを抱えたくーなが最後尾に並んだ。

二つのカップの入った袋を大事そうに持ち、くーなは動物園から駅までの道を、リュウイチの腕に身を寄せて歩いた。

帰りの車中、くーなは発車するなり眠りだした。カップの入った袋がずり落ちそうになり、リュウイチがくーなの手から袋を取りあげた。くーなはそれにも気付かず、すやすやと気持ち良さそうに、深いまどろみに落ちた。ピアスが少しだけ傾き始めて、車窓から射す陽光を弾いていた。

家に着き、くーなは昼間の興奮の余韻を残したまま、話し出した。

私ね、動物園なんて幼稚園か小学生の頃、遠足で行ったきりなの。父は動物とか植物とか、そういう自然のものが嫌いだったみたい。博物館や美術館には何度も連れて行ってもらったけれど、動物園や水族館はだめ。博物館にある、昔の大砲とか鉄砲の説明は良くてくれた。でも私はさっぱり興味がなかったわ。一応聞いて

いる振りをしていただけ、さっぱり頭には入ってこないの。
くーなは遠くを見つめながら、自虐的な笑いを浮かべた。

結局、父は兵器マニアなんだわ、きっと。

そうして話は、あのたった一度、父の部屋に忍び込んだときの記憶に飛んだ。

部屋に大きなガラス棚があつてね。その中に、銃の模型がいくつも並んでいたわ。それに兵器に関する本や戦争の本もあった。もちろん 核兵器 の本もね。あの秘密の資料も、父の趣味に関するのかなあ。

そこまで言つて、くーなは我に返つたように頭を四回横に振つた。

「ああ、嫌なことをまた思い出しちゃった」

くーなは立ち上がった。

「ねえ、お兄ちゃん。今日は楽しくて、騒ぎすぎたせいかちよつと疲れちゃった。先にお風呂に入ってもいい？」

「ああ、入ってきなよ」

くーなが浴室に向かうと、リュウイチは何ごとかを考え込むように、下を向いた。

リュウイチが入浴を終えた頃、すでにくーなは先程のマグカップで、風呂上りのコーヒーを飲み終えていた。リュウイチが出てきたのを見て、すぐにリュウイチの分を運んできた。くーなのカップにはライオンが描かれており、リュウイチのはコアラだった。

「ありがとう」リュウイチは旨そうにコーヒーを一口すすった。

「じゃお兄ちゃん、先にベッドに入っているわね」

「随分早いな。分かったよ。じゃこれを飲んだら、僕も今日は寝るよ」

コーヒーを飲んでいるおよそ十五分間、リュウイチは再び考え込んだ。自分が普段、研究所で見たり、手にしたりしているものが、つい先程のくーなの言葉と頭の中で錯綜し、いくら考えを巡らしても収束しそうになかった。畢竟リュウイチの考えは、『核兵器』とい

う言葉のイメージからくる関連性に依拠しているに過ぎない。

カップの中の残り少なになったコーヒーを見て、リュウイチは考えることに疲れ、単なる 核 という言葉の符合に過ぎないと結論付けて、思考を中断させ、残りのコーヒーを飲み干した。

ベッドに入ると、クーなはまだ起きているようだった。枕もとの小さな灯りだけが点いていた。

「もう寝たと思っていたよ。まだ起きてたんだ」

そう言つて、クーなの横に身を横たえた。
刹那。

クーなの細い腕が、リュウイチの手首をつかむや否や、その手首は乳房にいざなわれた。パジャマの前のボタンは、すでに全て外れていた。リュウイチの手は例えようもないほど柔らかなヴィーナスの丘の斜面をなぞり、その頂点に達した。頂点だけはそれまでの柔らかさと対照的に、堅く屹立しひととき突き出していたが、その自然な堅さとは明らかに異質で、人工的な堅さを同時に感じた。

（なんだ、このリングみたいなものは）

声を出す間もなく、ヴィーナスの丘の頂きに手が達すると同時に、リュウイチの唇もクーなの柔らかな唇に塞がれた。口と手の自由を同時に奪われたリュウイチは、ベッドの中で、まるで大海のまつた中で溺れる者のようにもがいた。

驚きのあまりもがき回つて、クーなの手を振り解いたリュウイチは、ベッドの布団をいきなりめくり上げた。枕元の小さな灯りが絶妙の陰影を作り、クーなの白い裸身を浮かび上がらせた。

丘の頂上に屹立したものに、さっきまでクーな自身を美しく飾っていたピアスが、突き刺さっていた。

おそらくリュウイチがコーヒーを飲んで、思索にふけっている間に、急いで開けたものである。頂上の桃色がかつたようにも見える褐色の突起には、血が滲んでいた。その血は、二筋の細く赤い線を描いて、突起からヴィーナスの丘を伝い、丘の中腹で線の輪郭がぼや

けていた。

くーなの目にも、涙が滲んでいた。

くーなは何も言わず、潤んだ瞳でリュウイチを見つめた。

「くーな。こ、これは一体、どういうことなんだ。なぜ、こんなことを、するんだよ。見ろよ。血が……、血が、出ているじゃないか」興奮のあまりどもりがちな言葉で、リュウイチは激昂した。それとは対照的に、くーなは無表情なほど冷静な顔で言った。

「ボディピアスよ。今どき、みんなやっているわよ。一度やってみただけ。お兄ちゃんにだけ、見せてあげようと思ったの」

「とにかく血も出ているし、もういいから外せよ。もしも化膿したりしたら、どうするんだ」

「わかったわよ」

痛むのか、くーなはやや顔を歪めながら、ピアスを外した。鮮血が、新たな線を描いて、一筋流れ落ちた。リュウイチは思わず、顔を背けた。

「お兄ちゃん、私のこと嫌いになった？」

不安げに、くーながリュウイチの顔を覗きこむ。

「そうじゃない。でもそうやって自分の体を傷つけるようなことはして欲しくない。もう二度と、ボディピアスなんてするなよ。いいな。少なくとも、僕の趣味じゃない」

返事の代わりに、くーなは胸をはだけたままの格好で、リュウイチの胸にしがみついた。困り果てたリュウイチの顔に、再びくーなの小さいがぼつちやりした唇が迫った。リュウイチの胸に押し付けられて、あらわになったヴィーナスの双丘が、その美しい形を失った。二度目のキスは三十秒間続いた。くーなの舌は、ちろちろと休むことなく、リュウイチの口の中を這い回った。燃えさかる炎をまとった蛇のような舌は、リュウイチの中の何物かを焼き焦がすように、せわしなく動いた。そしてその小さい、桃色の炎は、三十秒かけて、リュウイチの理性を焼き尽くし、心の底に宿る官能を召喚した。リュウイチの手が柔らかな丘に再び触れると、桃色の小さな蛇は安

心したように巢穴へと戻った。

濡れ光るくーなの唇が、呟いた。

「今日で、妹はおしまい」

じつとリュウイチの目を見据えて唱えた呟きは、なお一層彼の本能を揺さぶり、喚起した。リュウイチは百八十度回転して、己の体をくーなの上に横たえた。そうしてくーなの最も柔らかな部分を彩る、半ば乾きかけた紅い血筋を舐め取り、その手はヴィーナスの最も敏感な場所へと伸びた。かすかにくーなが、リュウイチの頭上で呻いた。

くーながリュウイチの妹からオンナになった翌朝、ベッドのシートには紅色の染みが三つ残っていた。しかし前夜、くーなは一言も「痛い」とは言わず、ただ黙って最愛の兄だった者を受け入れた。

その夜、リュウイチは夢を見た。夢の中で、鮮血と違わぬ深紅のキノコ雲が、大きな爆音とともに、龍のように空に立ち昇っていた。

7 眠れる天使

リュウイチが研究所に来て、最初に手掛けたプロジェクトも、この日が最後である。これまでの研究で得たデータを整理し、資料として、ツジイに提出した。

ツジイは黙って、データに誤りがないか、内容に漏れがないかを見て、言った。

「うん、いいね。ごくろうさま。最初のプロジェクトでこれだけ書ければ、上々だよ」

「ありがとうございます」

ツジイの承認を得て、リュウイチは不要なデータの削除や資料の整理を始めた。

リュウイチの心の中では、昨日のくーなのイメージだけが、傷ついたレコード盤のように幾度も幾度も繰り返し再生されていた。イメージの中のくーなは、紅い血筋だけ色が付いていて、他は色を失いモノクロームであった。次第に心の中が、真紅に染めつくされてしまうのではないかという、漠然とした畏怖^{いふ}の念にとらわれた。

資料整理が一段落して、リュウイチは休憩コーナーに向かった。ユイがいた。

「昨日は大変だったわね。でもくーなちゃん、最後は元気になったみたいだし、よかったわ」

「本当に昨日は迷惑をかけてしまったね。ありがとう。ユイちゃんにもすっかりなついてしまったね。あいつは誰にでもそうなのかな」
くーなの話題になると、モノトーンを深紅で塗りつぶしたイメージが彼を席卷した。憂鬱な心が、彼の顔を屈託で満たした。

「ところで資料の整理は、もう終わったのかい？」

「ええ、大体。今日でプロジェクトも解散ね。またリュウイチ君と一緒にプロジェクトに入るといいね」

「そうだね。同期入社は君だけだし、ね」

そこで会話が途切れた。二人は沈黙とコーヒーを飲み干した。彼の心の中に、再びくーなのイメージが兆^{きざ}した。

あつという間に時間は過ぎて、夕方を迎えた。プロジェクトを解散するにあたり、ツジイが解散の弁を述べた。締め言葉 というやつだ。メンバーは皆、ツジイの周りに集まってきた。ステレオタイプな挨拶が始まった。

みんな、本当にごころうさま。今回のプロジェクトは、メンバーにも恵まれて、とても素晴らしい成果を上げられたと思っている。特に新人として入ったリュウイチ君とユイ君、非常によくやってくれたね。次のプロジェクトでも頑張ってくれよ。

このプロジェクトの成果は、日本国内の原子力発電所に公開され、より効率的な発電システムの開発に利用される予定である、という主旨の話で、ツジイによる 締めの言葉 は終わった。

最後にプロジェクトメンバーの、次の配属先がツジイから発表された。リュウイチとユイは同じプロジェクトだった。二人とも、再びツジイの率いるプロジェクトへの参画を命じられた。

午後六時。プロジェクトは解散し、次のプロジェクトのリーダーに挨拶に行く者もあれば、帰り支度を始める者もいた。帰ろうとしていたリュウイチに、後ろからツジイが呼びかけた。隣にユイもいた。「どうだい、リュウイチ。次も同じプロジェクトで仕事をする事になったことだし、ユイ君と三人で打ち上げでも。次のプロジェクトのキックオフも兼ねてな」

そう言つて、ツジイは右手を、コップをつかむ形に丸めて、飲む真似をした。

「はい」くーなのことが気にかかったが、リュウイチは承諾した。このようなとき、リュウイチは意に反して断れないことが多かった。我ながら、優柔不断だと思うことがしばしばあった。きっとユイならば、己の意に副^そわなければ即座に拒絶するのだろう。

「じゃ、帰る準備ができたなら声をかけてくれ。一緒に出よう」
ツジイはそう言い残し、自席に戻った。ユイが耳元で囁いた。

くーなちゃん、大丈夫？

仕方ないよ。遅くなるから、食事は先に済ませてくれとメールを入れておくよ。そうすれば大丈夫だろう。

そう。何ならまた、リュウイチ君のところへ言い訳しにお邪魔するわよ。

ユイは笑いながらそう言つて、「また後で」と手を振りながら、席に戻って行った。

二十分後、リュウイチ、ユイ、ツジイの三人は、研究所の一階のホールにいた。

「じゃ行こうか」

「あつ」ユイがいつになく取り乱したように、声を上げた。

「一つデータを消し忘れていました。ツジイさん、申し訳ありませんが、先に行っていていただけますか。十五分くらいで終わると思いますので、終わり次第追いかけます」

「ほう、ユイ君らしくないな。じゃ先にリュウイチと行っているよ。駅前の『鳥玄』^{とりげん}にいる」

「わかりました、すみません」一つ頭を下げて、ユイはホールの奥へと消えていった。

ユイが去り、かすかな違和感だけが残った。何か変だ、とリュウイチは感じた。

データを消すなら、二階のプロジェクトルームに行かねばならないはずだ。ホールの奥には実験器具や材料の倉庫になっている部屋と所長室 しかないはずだが。

「おい、リュウイチ。どうした、行くぞ」

ツジイの呼びかけに我に返り、リュウイチは連れ立って研究所を出た。

鳥玄 は地鶏のハツを塩だけで焼いた焼き鳥が旨い店だった。研究所に入っ**て**しばらく経った頃、リュウイチは同期の友好を深めるという名目で、ユイと来たことがあった。ユイも、ここのハツはお気に入りだと言**っ**ていた。この店の焼き鳥が、とっつきにくい印象のユイとの距離感を縮めてくれた。

くーなのことを話したのも、この店に来たときだ。

二人はユイを待たず、プロジェクトが無事終わったことに乾杯をした。大役を終えた安堵感からか、ツジイはよく飲み、饒舌だった。一方、リュウイチの顔に書かれた屈託は、未だ拭い去られてはいなかった。

結局ユイが到着するまで、ツジイが一方的に話し、リュウイチは曖昧な頷きを繰り返すばかりだった。

まったく。お前たち新人二人とも面倒を見なくてはいけないと決まった時は、どうなることかと思**っ**たよ。

はあ。

それに僕たちの研究で扱う重金属は、一つ間違えば被曝する。直接、生命に危険が及ぶ場合だ**っ**てある。そんなところに新人二人を放り込まれたんだからな。被曝は免れた^{まぬが}けれど、胃に穴が開きそうだったよ。

そういうとやや赤ら顔になったツジイは、がははと大声で、リュウイチの知る限り最も闊達に笑った。リュウイチはすまなそうに、頭を掻くしかなかった。

しかも、ほら、あれだ。大和田局長の視察の案内役まで任されたからな。あれも突然、荒木所長に頼まれて、びっくり仰天だ。防衛庁の局長で所長の親友じゃ、粗末には扱えないし……な。

そこで空になったジョッキを振**っ**て、ツジイは店の女将に「お代わり」と大声で言った。そしてリュウイチのまだ半分ほど残**っ**ているジョッキを見て、「何だ、飲んでいないな」ととろんとした目を向けた。ツジイは独白するような調子で、もはやリュウイチの相槌も

気に留めずに、続けた。

大和田局長が来られたとき、所長と何やら話し込んでたろう。何を話していたと思う？「核兵器」だってよ。所長のデスクの上の仰々しい資料が、コーヒーを持って行ったとき、チラッと見えたんだ。うちの研究所じゃ、兵器開発なんてテーマにないけどな。きつと、大和田局長が持ってきた資料だろう。二人とも妙に真剣な顔で、議論していたな。もちろん僕がいる間は、何も話さなかったけどな。余程真剣だったと見えて、二人の声が廊下まで聞こえたよ。そこへちようど女将が、新たなジョッキを持ってきた。一口ツジイが飲んだところへ、遅れてきたユイが現れた。

「遅れて申し訳ありません。あら、ツジイさん、もう結構ご機嫌ですな」

ユイは二人が陣取っていた奥座敷に上がり込むと、リュウイチの横に座った。リュウイチが座敷を降りかけた女将に、ユイのためにジョッキを一杯追加した。

「妹さん、大丈夫だった？」とユイがリュウイチにそつと尋ねた。

リュウイチは、「ああ」とだけ答えた。それを眠そうな顔をしていたと思ったツジイは、聞き逃さなかった。

「なんだ、リュウイチ。お前、妹がいたのか？」

仕方なくリュウイチは答えた。

「ええ、最近、一緒に住み始めたんです」

「一度だけ会ったことがあるんですけどね。とても可愛い妹さんなんですよ」ユイが追いかけるように、付け加えた。

「ほう、それは一度お会いしたいものだな」ツジイは冗談めいた調子で、笑った。

二時間ほど店にいて、もう一軒、と帰宅を済るツジイを何とかなだめ帰し、リュウイチとユイは同じ電車に乗った。

「ツジイさん、随分飲んでいたけれど、大丈夫かしらね」

「めずらしく盛り上がっていたね。まあ大きな仕事を終えたんだか

ら、今日くらいハメを外してもいいと思っていたんじゃないかな」
話題は自然とユイが店に到着するまでに、ツジイが話していた内容に移った。

新人二人は、ツジイにとって厄介者と思われていたこと。大変なプロジェクトの上に、大和田局長の視察の案内役まで任され、大変だったこと。所長の部屋に入ったとき、所長と大和田局長が 核兵器に拘泥^{こうでい}して、何かを議論していたこと。

最後の核兵器の話題に触れたとき、ユイの顔がかすかに曇った……
ように見えた。ユイが話題を変えた。何かしら、慌てたような素振りに見えた。

「くーなちゃんにお土産の一つも買って帰った方がいいわよ。きつと愛するお兄様が遅いって、心配しているから」

「そんなことはないと思うけど」

「二人を見ていると、兄弟っていうより恋人同士に見えるもの」

ユイの言葉にリュウイチは狼狽した。酩酊がしばし忘れさせた昨夜の記憶が、再び鮮明な映像として蘇生した。それからはずっと無言のまま、調布駅に着いた。

リュウイチはユイに、「それじゃ」と手を挙げて、電車のドアまで進んだ。ユイはさらに三つほど先の駅に住んでいる。ドアが開いたとき、リュウイチはもう一度、ユイに小さく手を振った。

改札を抜けると見知った顔が立っていた。ユイの姉である。駅の時計は午後十時を示していた。時刻と目の前にいる人の不釣り合いに、リュウイチはやや怪訝そうな顔をした。

まさに改札を出たリュウイチの前に突然出現したというタイミングだった。ユイの姉は、リュウイチを見ると、黙って頭を下げた。くーなを一人で待たせていることが気に掛かり、先を急ぎたかった。しかし目の前に立っている彼女の顔を素通りすることもできなかった。今は、己の優柔不断な氣質が鬱陶^{うつとう}しく思った。

「こんばんは」仕方なく、リュウイチは挨拶を返した。

「どうされたんですか？　こんな時間に」

「主人に頼まれて、夕食後に買い物に出たんです。でも探していたら、いつの間にか遅くなってしまうて。こんな時間に開いている書店って、なかなかないですわね」

「そうですね、特にこの辺りじゃなかなか……」

「それで駅前の書店から出たら、リュウイチさんが出てくるのが見えたものですから。こんな時間に失礼だとは思ったんですけど、ご挨拶せずに素通りするののもどうかと思ひまして」

「そうでしたか、わざわざすみません」

「もしよろしければ、私の車で家までお送りしますよ。ついと言つてはなんですけど、せつかくお知り合いになれたことだし、少しだけお茶でもいかが？」

内心リュウイチは困窮した。目の前でユイの姉は、ユイそっくりの聡明な微笑をたたえていたが、その目は強い意志を持ってリュウイチの否定を拒絶していた。（血は争えないな）とリュウイチは苦笑した。改札を出たときに、目を合わせたことにほぞを噛む思いだった。

結局、リュウイチは彼女の申し出を受け入れるしかなかった。

「ええ、少しだけなら」

「では参りましょう。そこに車を停めておりますので」

思い立ったら素早く行動を起こすところまで、ユイにそっくりだと思つた。

ユイの姉は、駅のロータリーに停まっている、ブルーメタリックのプジョーを指差した。

ゆつたりとしたシートに乗り込むと、彼女は、リュウイチのマンションの方角に車を走らせた。マンションまでの道程の途中にある、深夜まで開いているファミリーストランのパーキングに車を入れた。時間のせいでもあるう。店内は若い客がいくつかのシートを占めているだけで、閑散としていた。

店員の案内で、窓際のボックスシートに座った。向き合ったユイの

姉は、明るいところで改めて見ると、間違いなくユイと姉妹であることを感じさせた。ユイよりも、ややふつくらとした顔立ちをしていた。近寄りがたいほどに理的で、ときに冷たささえ感じさせるユイと比べると、幾分優しい印象を与えた。

「本当にこんな時間にごめんなさい。先日お会いしたときには、ろくに自己紹介もしていなかったものですから。私、ユイの姉のアキと申します。深大寺に住んでおりますの。リュウイチさんのお住まいとは、ちょうど駅を挟んで逆方向になるかしら」

ユイの姉、アキは席に着くなり、手早く自己紹介をした。澱みないはきはきとした口調も、ユイとそっくりである。

「先日は、妹のことで大変ご迷惑をおかけしました。僕はリュウイチです。ユイさんには研究所でいつもお世話になっていました……」

「お名前はユイから聞いておりますのよ。いつも電話でね。何でも研究所では、ユイと同期の方だとか。優秀な研究員だと伺っておりますわ」

「とんでもない。ユイさんにいつも助けていただいています」

コーヒーを一杯飲む間、そんな取りとめのない社交辞令が続いた。十五分ほどで二人はファミリーストランを後にした。この十五分間に得たものは、ユイの姉が アキ という名前だということだけである。

車内のデジタル時計が午後十時三十三分を表示したとき、アキのプジョーは、リュウイチのマンションの前に到着した。アキとは車で別れた。

「今日はわざわざ送っていただいて、ありがとうございます。お気をつけて」

「夜遅くにお引止めして、ごめんなさい。妹さんにもよろしくおっしゃってくださいね。では、おやすみなさい」

ドアを閉めると、プジョーは静かに夜の闇に溶けた。テールランプの赤が、最後まで夏の空気に溶け残っていた。

テールランプを見送ると、リュウイチはマンションの三階に昇った。二階から三階への階段の途中、リュウイチの目の高さが、三階の廊下と一致したとき、廊下にわだかまる塊が見えた。

塊と見えていたものは、人のようだった。

さらに近づくと、倒れていたのは 天使 だった。リュウイチの最愛の 天使 。

その瞬間、リュウイチはツジイらと居酒屋に立ち寄ったこと、アキと短い世間話をしていたことを後悔した。研究所に行ったことさえも悔いた。己の優柔不断さが恨めしかった。

今更ながらに、彼にとって、その 天使 は何物にも代えがたい宝であることが、はつきりと認識された。

（僕の天使が……）

くーなは目の前の廊下に、やや青白い顔で、うずくまるように、倒れていた。

リュウイチの部屋の、ちょうどドアの前で静かに眠っているようだった。

リュウイチは駆け寄り、くーなをそつと抱きかかえた。見る限り、外傷はないように見えたが、くーなは彼の胸で眠ったままであった。リュウイチは鍵を取り出し、ドアの鍵穴に差し込んだ。鍵を回したが、不思議に手ごたえがなかった。

（鍵が……開けられている！）

もう一度くーなを廊下に横たえようと、意を決してドアを開けた。部屋の灯りは点いたままだった。

足音をたてないように、そろそろと進んだ。気配はない。見渡しても、誰もいない部屋を空しく照明が照らすばかりであった。

リュウイチはばね人形のように、廊下にとって返した。くーなを抱きかかえ、ソファに寝かせた。眠り続けるくーなを見て、泣きたい気持ちになった。

まだ息はあった。ヴィーナスの双丘も、呼吸に合わせて上下運動を繰り返していた。

唇を重ねた。柔らかく、暖かい唇は生きていて、温かい。しかしそのキスは、眠れる王女を目覚めさせることはできなかった。

携帯電話で、一一九番をダイヤルした。

数分後、眠ったままのクーナは、赤く瞬く車にリユウイチとともに乗っていた。

8 面会者

くーなを乗せた救急車は、夜の闇にまぶしく赤いサイレンを瞬かせ、マンションの前を発車した。静かな夜に突如鳴り出した音に、何事かと、近所の人々が家から出てきた。明らかに物見の野次馬もいれば、本当に心配そうな表情で救急車を見つめる者もあった。

サイレンを鳴り響かせながら走る車中で、リュウイチはくーなを心配そうに見つめた。

くーなの身に降りかかった災厄は、凶らずも、リュウイチに変化を生じさせた。眠るように、目を閉じて動かないくーなを見つめるしかない車中で、リュウイチは己の意志の弱さを、優柔不断な心を激しく呪った。そしてそれは、一つの衝動を生み出した。いや、その衝動は、リュウイチの目の前で無防備に横たわるくーなへの思いが原動力だったのかもしれない。

（くーな、お前をこんな目にあわせた奴は一体誰なんだ。きっと僕がかたきは討ってやろう。だから頼む、目を開けてくれ。もう一度笑ってくれ。そうしてお前に危害を加えた者を、僕に教えてくれ。）そう考えたリュウイチの表情からは、持前の優柔不断さは完全に消えていた。

リュウイチはただただくーなの蘇生を祈り、未だ見えない 敵への報復を誓った。

しかし敵とは一体誰なのか、何なのか、それがわからない歯がゆさに、リュウイチは身悶えしたくなるような思^よいだった。 敵とその企みの大きさに、このときはまだ気付く由もなかった。

くーなはマンションから一番近かった病院に搬送された。救急車が病院に到着して、ベッドに載せられ院内に運ばれると、すぐに医師や看護師が詰めているガラス張りの部屋に入れられた。部屋の入り口に置かれた細長いベンチで、リュウイチはガラス越しにくーな

の様子を見守った。

深夜だからであろう。当直の医師が一人で救急診療にあたっていた。数名の看護師たちは、忙しそうに部屋中を飛び回っていた。

くーなを診ている医師は、まぶたを開けてライトを当てたり、聴診器で心音を聴いたりしていた。その様子を、リュウイチはガラス越しにじっと見た。

くーなを診察していた医師が部屋の入り口のところで、リュウイチの方を見た。リュウイチの心臓は、にわかに早鐘を打った。

「大和田匡子 さんのお知り合いの方ですか？」医師は入り口から半身だけ部屋の外に出して、リュウイチに尋ねた。

「ええ、そうです」

リュウイチが頷くと、医師は「じゃ、中にお入り下さい」と言った。リュウイチは医師の後ろに従い、くーなが寝かされているベッドの横に立った。医師が診察結果を説明し始めた。

どうやら、何らかの麻酔作用のある薬物により、一時的な昏睡状態に陥っています。ただ診る限り、呼吸は正常ですし、心拍、血圧にも特に異常は見られません。錠剤や液体のようなものを嚥下したということも考えられますが……、状況から見て麻酔作用のある気体を吸引した可能性が高いと思われます。具体的な麻酔剤の種類は、血液検査などの結果を見なければ特定できませんが。

それで、くーなの……あ、いや匡子の意識は？

リュウイチはそのことが一番聞きたかった。医師が長々と所見を語るのを聞いていて、少々苛立ちを覚えた。

医師は、慎重に言葉を選ぶように説明を続けた。

生命には別状ありません。薬物の種類にもよりますが、麻酔剤による昏睡状態であることには間違いないでしょう。麻酔剤ならば、麻酔作用がなくなれば覚醒します。ただ麻酔剤をどれくらい吸入したのか、現段階では分かりかねます。また麻酔作用の効力も、個人差があるので、どれくらい経過したら覚醒するのかは、今の段階でははっきりと申し上げられません。

では、いずれにせよ時間が経てば、彼女は目を覚ますってことですね？

ええ。まれに麻酔作用が永続する例もありますが、呼吸や心拍の状態から考えても、そういった状況に陥るリスクはまずないでしょうね。あくまで推測ですが、おそらく二日以内には、意識を回復されるのではないでしょうか。

一応命には別状がないことを知り、リュウイチは胸を撫なで下ろした。医師は続けた。

麻酔というものは、一般に麻酔ガスを吸引するか、あるいは注射によって麻酔作用のある液体を体内に注入します。しかし患者さんの腕には、少なくとも注射の痕跡は認められませんでした。そもそも注射は、一般の方にはかなり難しいです。気体なら……、例えばが不謹慎ですが、よくテレビなんかでハンカチに沁みこませた液体を嗅がせて眠らせるシーンがありますよね。あの程度の方法でも、眠らせることはできます。そう考えると、やはり麻酔作用のある気体を吸引した可能性が高いでしょう。

医師の説明はいささか饒舌すぎて、リュウイチは、最後の部分を半分くらいしか聞いていなかった。くーなの命が助かると医師が言ったこと、今はそれだけが大切だった。

看護師が用意してくれた椅子に腰掛けて、ベッドの上のくーなをしばらく眺めていた。リュウイチの手は、くーなの手と繋がつながっていた。祈るような表情で、固くしっかりと、くーなの小さな掌を握りしめていた。

やがて女性の看護師がリュウイチの許にやってきて、今晚はもう帰宅するようにと告げた。これ以上付き添っても、今晚中に意識が回復するとは考えにくいし、何かあればすぐに電話連絡をする、と看護師は言った。

これから一般の病室に移送します。二〇五号室になります。明日は午前十時半から面会できますので、それ以降の時間にお越し下

さいね。二階のナースステーションにお声掛けしていただければ、部屋にご案内しますので。

事務的にそう言うと、看護師はもう一人呼んできて、移送用のベッドにクーナを移した。リュウイチは何か言おうとしたが、看護師は自分の任務を遂行するのみで、取り付く島もない。

仕方なく、リュウイチは部屋を出た。薄暗い廊下には、誰もいなかった。まとわりつくように響く自分の足音を聞きながら、リュウイチは出口に向かった。

外に出ると、まばらに植えられた木々の隙間から洩れ出る薄暗い街灯の明かりが、わずかに足下を照らすのみで、遠くを見ても、そこは墨を流したような闇であつた。流しのタクシーも走っておらず、リュウイチは家まで、歩いて帰った。ダークグレーのスーツを纏^{まと}つたまま家を飛び出した彼の後ろ姿は、漆黒^{しっこく}の闇に同化した。

わずか一ヶ月と少しの期間、一つ屋根の下で暮らしていただけなのに、クーナのいない部屋に戻るのだと思うだけで、リュウイチは堪らないほどの寂寥^{せきりょう}の思いにとらわれた。

帰り道、リュウイチはこの一か月あまりのクーナとの生活を反芻した。今はクーナが、何故あのような事故に遭遇しなければならなかったのかを突き止めなければならなかったからである。

まさかクーナが自ら意識を失うようなことはすまい。きっとクーナをあのような状況に陥れたものが、他にいる。

クーナの意識が回復すれば、はつきりしたであろうが、リュウイチは、クーナが自らやったのではないことには確信があつた。それはこの一ヶ月あまりで、クーナとの間に形成された信頼であり、寄り添^よなきクーナの愛の力であつたろう。今のリュウイチには、クーナと共有した時間は、そしてその時間が育^{はぐ}んだ愛は、それほどに濃密だつた。

(にもかかわらず……僕は……)

再び悔恨が彼を支配していた。リュウイチの目に潤むものがあつた。それはわずかな夜の光の中で、クーナの耳によく似合つたピアスの

ようにピュアな輝きを放った。

くーなどの思い出もまた、リュウイチにとっては同じ輝きを伴っていた。

突然の研究所の前での出会い。そのままリュウイチの家の居候となった不思議に人懐っこい女。誕生日にくーなが作ってくれた手料理。ユイとの駅前での出会いとその後のくーなの搜索。妹からの卒業。ペアのマグカップ。

どのシーンを思い浮かべても、くーなが被った事件に結びつくようには思えなかった。リュウイチは家にたどり着くまでの間、何度も繰り返し、頭の中でこれらのシーンを再生した。

しかし原因にたどり着けぬまま、彼はマンションのある最後の曲がり角に着いた。

最後の角を曲がると目の前に赤い光が見えた。車のテールランプに見えた。そのときリュウイチは既視感デジャヴに襲われた。

くーなが倒れているのを発見する直前、マンションの前でユイの姉アキの車を見送った光景が甦った。目の前を遠ざかってゆく車のランプは、あのときのように、同じ形のまま闇の中に滲んでいった。

（まさかな。もう数時間も前の出来事だ。きっと僕は、疲れている。）

それでもどこか釈然としないまま、リュウイチはそのテールランプが完全に闇に消え去るまで、マンションの前で見送っていた。

翌朝、ツジイに電話をして休暇を取った。ちょうどプロジェクトが終わったところでもあり、快く承諾してくれた。

それから時計が十時半に近づくのが待ち遠しかった。秒針の一周はかくも遅いものかと感じながら、十時まで時計とにらめっこをして過ごした。

時計が十時になったとき、リュウイチは堪らず部屋を飛び出した。途中小走りで病院に向かったため、十時十五分過ぎには、病院に着いた。病院の入り口の脇にある駐車場から、印象的なブルーメタリ

ツクが目飛び込んできた。

アキのプジョーが停まっていた。そうしてアキ自身が車に向かって
いるところだった。リュウイチの動悸は、毎分六十回から八十五回
に上がった。

はやる気持ちを押さえつけながら、リュウイチはアキに駆け寄った。

おはようございます。良くお会いしますね。

昨日のアキとは別人のように、今朝の彼女は愛想が悪かった。

昨夜はどうも。風邪をひいてしまったみたいで、少し熱っぽか
ったので朝一番で来ましたの。遅くなると混みますでしょ。

それだけ言つと会釈をして、アキは運転席に体をすべり込ませた。
ほどなく快いエンジンの音がして、アキは再び会釈をすると車を走
らせた。リュウイチは呆然とテールランプを見送っていた。

ナースステーションは二階への階段のすぐ目の前にあった。時計は、
あと一分で十時半であることを示していた。

カウンターの一番近くにいた女性看護師に、声を掛けた。

「あいう。二〇五号室に入院している大和田匡子の知り合いの者で
すが」

「二〇五号室、大和田さんですね。はい、ご案内します。こちらへ」
台帳を見ながら、看護師は患者の名前を確認すると、ナースステ
ーションから出てきて、廊下を奥に進んだ。

くーなの病室は、廊下の両脇に並んだ病室の、向かって左側の廊下
の中ほどにあった。病室に掛けられた名札を見ると、二〇五号室に
は 大和田匡子様 の名前だけが、黒いサインペンで書かれていた。
病室には二つベッドが置かれており、くーなは奥の窓際のベッドに
寝かされていた。

「今朝確認したところ、少し意識も回復されてきているようです。
まだ寝ている状態に近いですが、おそらく今日の夕方辺りには、だ
いぶ回復されると思いますよ」

そう言いながら看護師はリュウイチをくーなが寝ているベッドに案

内した。

白いシーツに包まれたくーなを見た。昨夜よりいくらか血色も良く、時折まぶたをヒクヒクと動かしだした。だがリュウイチが耳元で「くーな」と呼びかけても、まだ目を開けることはなかった。

横で看護師が言った。

「そういえば少し前に、一人お見舞いに来られた方がいましたよ。まだ面会時間ではないのでと一度はお断りしたんですが、『用事がある。一目見るだけでいいから』とおっしゃったので、病室に通したんです」

「えっ、それは誰ですか……」

「私どものところでは、面会の方のお名前は伺わないことになってるんです。だからお名前の方は分かりませんが、女性の方でした」

（女性？）さつき病院の庭ですれ違いになったアキのことが、思い出された。

「どんな女性の方でしたか」

「そうね。割と背の高い方でしたよ」

「面会に来たのは何時ごろ？」

まるで刑事さんの尋問のようですね、と笑いながらも看護師は説明を始めた。

「十五分くらい前かしら。ちらつと匡子さんの顔を見て、すぐに出て行かれました。『声を掛けてあげて下さい』と申し上げたのですが、何もおっしゃいませんでしたね」

「そうですか」

アキと出会った時間と、辻褄はあっていると思った。だがアキは風邪で来院したと言っていた。それにくーなが倒れて入院したことはアキには話していない。いや、アキに限らず誰にも話していないはずだ。

「では、ごゆつくり。何かありましたら、その枕元のナースコールのボタンを押してください」

リュウイチが黙り込んだのを見て、看護師は病室から出て行った。リュウイチはくーなの顔を見ながら、考え込んだ。いつしか、まだ濃い靄もやの中を浮遊しているようなくーなに話しかけていた。

「おい、くーな。お前のお見舞いに来た女って、一体誰なんだ」

返事はなかった。くーなは相変わらず、ときどきまぶたを動かすのみで、まだ深い睡眠状態にあった。

リュウイチはそれからおよそ一時間、くーなの手を握ったまま、ときどき名前を呼び、飽くことなく彼女の顔を見て過ごした。傍目には、リュウイチまで眠ってしまったかに見えるくらい、微動だにしないかった。

やがてリュウイチは、そつとくーなの手を離れた。まだ何も答えてはくれないくーなに、また後で来るよと囁いて、立ち上がった。

ナースステーションの前で、病室を案内してくれた看護師に会釈をすると、リュウイチは病院を後にした。外は真昼の太陽がきらきらと照りつけて、殺人的な熱光線を放射していた。

一度家に戻ったものの、何かしら落ち着かない気分のまま。リュウイチは昼食に出た。家で食べてもよかったが、くーなのいない殺風景な部屋での食事が嫌だった。つい一か月前まではそれが日常だったが、今はたった二部屋のマンションが、やけに広く感じられた。マンションから駅へ向かう途中にある、小じんまりとしたコーヒーストップで、軽い食事をとった。

よく冷えた、香りの良いアイスコーヒーを飲んでみると、携帯電話がテーブルの上で震えた。小さな液晶画面に『ユイ』と表示されていた。

もしもし、ユイちゃん。

リュウイチ君、大丈夫？ 風邪でもひいたの。

いや、実は僕じゃなくて、くーななんだ。ちょっとした事故があつて、入院しちゃってるんだよ。大したことはないと思うけど、二日くらいは入院になると思う。それで休暇をもらったんだ。

まあ、大変ね。くーなちゃんの具合はどうなの？

うん、一時的な昏睡と病院の先生は言っていた。たぶん今日の夕方くらいには、意識は戻るだろうって。

てつきりリュウイチ君が病気が何かだと思ったわ。それで、今は病院なの？

いや食事に出たところだよ。

そう。私もお昼休みだったので、気になって電話してみたのよ。くーなちゃんは、どこの病院に入院しているの？

調布のC病院だよ。

わかったわ。それじゃ帰りにお見舞いに寄らせてもらうわね。

また夕方、電話するわ。あまり気を落としちゃだめよ。

うん、それじゃまた夕方に。

電話が切れた。ユイの心遣いが嬉しかった。気弱になっていたリュウイチは、少し勇気をもらった気がして、半分ほど氷が溶けて香りが薄くなったコーヒーを飲み干した。

昼食を終えて、再び病院に行ったりリュウイチは嬉しい驚愕を覚えた。くーなが病室で目を開けていたのである。

まだ麻酔効果から醒めやらぬ様子で、視点も定まっていなかったが、リュウイチが見舞いに来たことははっきりと認識していた。まだくーなは何も話さないけれども、ベッドの脇に立ったりリュウイチを見て、安心したような笑顔を見せた。

リュウイチが病室に入ると間もなく、担当医が来た。巡回の時間ということだった。

担当医はあのガラスに囲まれた部屋で、くーなを診察していた医師であった。リュウイチを見て、くーなの容体ようたいについて説明を始めた。やはり匡子さんは、麻酔ガスの作用による昏睡状態でした。今はもうほとんど麻酔作用が抜けていますから、あと数時間もすればほぼ元の状態まで回復するでしょう。今はまだ少し、通常時と較べると意識のレベルも低いので、話が十分にできる状態ではありません。

ん。

そうですか。でも意識が戻ってくれたので、安心しました。

このまま順調に回復すれば、明日には退院できますよ。

振り返るとクーなはじつとリュウイチを見ていた。うまく話をできないことがもどかしげだった。

ところで先生。その麻酔ガスというのは？

化学的にはジエチルエーテルと呼ばれているものです。一般には、単にエーテルと呼ぶことが多いですね。常温では液体ですが、気化しやすく、一時は病院でも麻酔に使っていたものです。ただ使用する量の調整が難しく、一つ間違うと死に至ることもあります。だから今では、麻酔薬としてはほとんど使われません。

ジエチルエーテル？ 普通の人が簡単に入手できるものではないですね。

ええ。麻酔科の同僚に、エタノールと硫酸から生成できると聞いたことがあります。だから化学に詳しい人なら、生成できないこともないかもしれませんが。

リュウイチは黙って、考え込んだ。それを見て、医者は病室から出て行った。リュウイチはしばらく、石膏の彫像にでもなったかのようになりそこに立ち尽くしていた。医師の語ったエーテルの製法が気になった。

エタノールにしろ、硫酸にしろ、試薬として研究所に常備されているものだ。ということは、研究所の人間なら、知識があれば作れるのではあるまいか。

そのときリュウイチの大腿部に何ものかが触れた。はっとして、リュウイチは自分の太ももの裏側を見るように、振り返った。

見ればクーながベッドから白い腕を伸ばして、まだ緩慢な動作ではあったが、懸命にリュウイチを呼ぼうとしているのだった。クーなは言葉こそ発しないものの、今にも何かを語りかけそうに、口が動いていた。

リュウイチはベッドの横に置かれていた、面会客のための椅子に腰

かけると、くーなの腕をそつと持ち上げて、その手を握った。

「くーな、分かるか。僕だよ、リュウイチだ。お医者さんも言っていたけど、すぐ良くなるって。明日には一緒に家に帰れるぞ。もう少しだから、頑張るんだよ」

ゆつくりと、言い含めるようにくーなに言った。くーなはリュウイチの一言ごとに、かすかに頷いていた。

くーなの目からは、あのピアスに嵌め込まれたストーンのように輝きを放つ涙がにじみ出ていた。やがてその涙は、あふれんばかりにとめどなく、流れ出た。リュウイチが握っていたくーなの手に、すこし力が込められた気がした。

リュウイチは空いている方の手でポケットからハンカチを取り出すと、そつとくーなの涙を拭った。

再びくーなが眠り込んだのを見て、リュウイチはトイレに行くために病室を出た。ついでに、飲み物を買いに、一階の売店に向かった。ナースステーションの前を通りかかったとき、今朝リュウイチを病室に案内してくれた女性看護師が、話しかけてきた。

「匡子さん、順調に回復されているようで、良かったですね」

看護師は我がことのように、嬉しそうに笑いかけた。リュウイチは頭を下げた。

「ありがとうございます」

「ところで朝もいらっしゃった方が、お昼頃またお見舞いに来ていたようですよ。ちょうど帰る時に、ここの前を通るのを見ましたから。匡子さんも一日中、誰かしらお見舞いに来てくれるんだから、幸せですね。入院しているときは、お見舞いに来てくださる方々がかけてくれる言葉が、患者さんにとって、何よりの元気づけになりますからね」

リュウイチは絶句した。黙ってしまったリュウイチを見て、看護師は怪訝そうな顔をした。しかしリュウイチは構わず、駆け降りるように一階に向かった。

見えない誰かにリュウイチとくーなの行動を盗み見られているような気がして、うそ寒い気持ちになった。

今や誰かがリュウイチ、あるいはくーなに何らかの意図を持って近づき、危害を加えようとしているということに、リュウイチは確信を持った。

（くーなの傍を離れてはいけない。）リュウイチは階段を一段飛ばしで駆け上がると、病室まで走った。ナースステーションの前を、疾風の如く駆け抜けたリュウイチを、先ほどの看護師が驚き顔で見送った。

息を切らしながら、リュウイチが病室に入った。くーなの天使のような姿が、病室を出る前とまったく同じく、ベッドの上にあった。ほっとした。

考えすぎかな、とリュウイチはあまりにも悪い方向にばかり考えたことを少しだけ恥ずかしく思った。しかし偶然が、しかも同じ日の朝と昼という極めて短い時間の中で、二度も起きるだろうか。頭の中にわだかまった猜疑心は、やはり払拭できなかった。

面会時間もあと一時間という頃、花と花瓶を手にしたユイが来た。

「連絡したけど、出なかったのね。何度か携帯に連絡したんだけど、くーなちゃんの本名が分からなくて、病室を探すのに手間取ったわ」ユイは少し恨みがましい口調でそう言った。リュウイチは座っていた椅子をユイに勧めながら、電話に出られなかったことの言い訳と謝罪をした。

「ごめん。院内では携帯電話の電源は切るルールになっているから、午後はずっと電源を切りっぱなしだったんだ。君からの連絡があることを忘れた訳じゃないんだけど。何時頃来るのかもわからなかったから、病室からも離れられなくてね。本当にごめん」

「まあいいわ。病室の名札を見たけれど、くーなちゃんの名前、大和田匡子 っていうのね。せめてそれだけでも、お昼に電話したときに聞いておけばよかった」

そう言うと、ユイはくーなの顔を見て、言葉をかけた。

「くーなちゃん、何があったか分からないけれど、大変だったわね。もう大丈夫なの？」

くーなはうなずいた。そしてかすかに「うん」と言葉を発した。

ユイは微笑んで頷き返していたが、リュウイチは久しぶりに聞くくーなの肉声に驚いた。

ユイは花瓶を手にして病室を出た。水を満たした花瓶を、少し重そうに抱えながら戻ってくると、枕元の台の上に置いた。そしてその中に、色とりどりの花を挿した。

それまで何もなく、殺風景なほどに純白だった病室が、一度に華やかになった。

「急いでいたから、安物の花瓶を駅の近くで買ってきたの。花を買うついでにね。こんなので、ごめんなさいね」

ユイはリュウイチにとも、くーなにともとれるように言った。

それから面会時間が終わるまで、三人は病室で過ごした。少しずつではあるし、まだ幾分呂律ろれつもあやしかったが、くーなも話に加わっていた。

午後八時を五分ほど回り、リュウイチとユイは病室を後にした。

「また明日、来るからな。ゆつくりと休むんだぞ」

リュウイチとユイは、くーなに手を振った。くーなは少し心細そうな顔をしたが、小さな声で「うん」と言った。

二人は病室を出た。一階への階段を降りながら、リュウイチはユイにお願いをした。

「ユイちゃん、お願いがあるんだけど」

「何かしら？」

「予定では、明日くーなが退院することになっている。だからあいつを迎えに行つてやりたいと思つているんだ。それでツジイさんに、もう一日休むと伝えて欲しいんだけど、いいかな」

「何かと思えば、そんなこと。お安い御用ね。わかったわ、伝えておくわよ。今はくーなちゃんの頼る人も、リュウイチ君しかいない

しね」

病院を出て、二人は薄暗い道を駅に向かった。駅の近くでユイと別れて、リュウイチは自分のマンションに向かった。

そこで携帯電話の電源を切りっぱなしだったことを思い出した。ちようどそこは、この前、アキがプジョーを停めていた場所であり、その前にはアキが夫に頼まれて、何かの本を買いに来たと思われる書店があった。

何気なく後ろを振り向いた。しかしそこからは、今まさに改札口に吸い込まれそうになっている、ユイの姿は見えなかった。

リュウイチは花のお礼を言い忘れたと思い、ユイの携帯電話に短いメールを送った。

今日はくーなに花をありがとう。

すぐにユイから返信があった。

付添いおつかれさま。安物だから、気にしないで。おやすみなさい。

駅から近くの中華料理屋に入り、リュウイチは遅めの夕食をとった。リュウイチが店に入り、扉を閉めた五秒後、店の前をブルーメタリックの車が通り過ぎた。

9 くーなの告解

翌朝、無事に退院したくーなを連れたリュウイチは、二日ぶりに明るさを取り戻した我が家に帰ってきた。くーなも今は二日前の元氣を取り戻している。

「ああ、久しぶり。やっぱりこの部屋が一番だね」

リュウイチはそう言っただきく伸びをしたくーなを、微笑ましく見ている。日々の暮らしの中で、空気や光を必要とするのと同じように、リュウイチにとってはくーなが絶対不可欠であることをひしひしと感じた。

「とりあえずコーヒーでも飲むかい」と言っ、リュウイチはキッチンに向かうとした。

「いろいろと助けてもらったし、私が入れてあげる」

リュウイチより早く、くーなはキッチンに入った。続いてリュウイチもキッチンに入ったが、くーなは早くもコーヒーの入った缶を手に入れた。

「大丈夫なのか？ 少し座って休んでいてもいいんだよ」

「大丈夫よ。ベッドで寝ていただけだから、却って元氣になったくらいよ、リュウイチ」

「えっ、リュウイチ？」

「だってもう お兄ちゃん とは呼べないじゃない。でしょ？」

くーなは女の顔になって、笑った。戸惑うリュウイチは「そうか」と言っ、曖昧に頷くしかなかった。

三か月前。家を飛び出したくーなは新宿を歩いているところを一人の男に呼びとめられ、そのまま一軒の店でアルバイトすることになったという。十九歳のくーなはそのまま、金を手にした男たちが、ひとときの癒しを求めてやって来る店で働くこととなった。

働き始めてひと月くらい経った頃、店で何度か見かけた紳士然とし

た男が、くーなを自分のテーブルに指名した。くーなはその店でもくーな という源氏名を使った。

くーなちゃんかい。新入りの子かな。

はい、店に来て一ト月です。でもお客さんは、もう何度かお見かけしているわ。是非これからも^{ひいき}顧にしてくださいね。

うん、そうしよう。

それから一時間、研究者の端くれと語った紳士は、自分の研究は今に日本を救うという話を^{とうとう}滔々と話した。

やがて紳士はくーなに、一枚のメモを手渡した。そこにはリュウイチが通う研究所の場所が書いてあった。紳士はそのメモを渡しながら、「その場所に行けば、一人の男に会える」と言つて、リュウイチの人となり話を話した、らしい。

その男はきつと君にとつて 運命の人 だよ。もし会ったら、その男についていけばいい。悪いようにはならないはずだ。

それはどういうこと？ こんなところには、私行ったこともないわ。

行けば分かるさ。

意味深長な言葉を残して、紳士は支払いとは別に、幾枚かのお札をくーなに握らせた。当座の生活費に使えばよい、と言つて紳士は店を去った。

その紳士は、それ以来二度と店には現れなかった。

だから店が休みの日に、そのメモの場所に行つてみたの。それ以来その人は店に来なかったし、気になるじゃない。行つてみたら、話通りリュウイチが歩いてきたわ。もうびっくりした。本当に運命の人か、話しかけてみた。

コーヒーを飲みながら、くーなはリュウイチにそう告白した。

「優しい人に見えたから、ついて来たわ」という言葉で、くーなは自分の告解を終えた。

ついてきて本当によかった。

しみじみとコーヒーを飲み、くーなはライオンの描かれたマグカップを、愛おしげに手で包み込んだ。

リュウイチは黙って聞いていた。くーなと出会って以来、遭遇した数々の出来事は、リュウイチの驚きに対する感情を摩耗させた。だからリュウイチはもう、くーなの言葉にも驚かない。

コーヒーを飲み終わると、くーながリュウイチをベッドに誘った。

まだ日の高い昼間に、二人の愛の交歓が始まった。

くーなどの交わりは、リュウイチが抱えた悩み、漠然とした不安を忘れさせる。くーなの肌に触れ、小さく艶やかな唇に自らのそれを重ねることで、リュウイチはくーなが今ここにいる実感を、くーなの実像を、彼の五感でとらえることができたからだ。そしてそのリアリティは、彼の五感を通じて、頭の中に「くーなを守る」ことへの使命感を生み出した。

くーなが現れたことから始まったリュウイチの憂鬱、不安を癒すものは、今やくーな以外にない。その矛盾をも、リュウイチはくーなとともに、余すことなく受け入れた。

交わりを終えて、汗ばんだリュウイチの肩に小さな頭を載せているくーなに、リュウイチは尋ねた。

お前エーテルって知っているか？

何か聞いたことはあるけど、学校で習ったことかしら。

じゃ作り方は分かるかい？

そんなこと、分かる訳ないじゃない。見たこともないもの。

そうだよな。

リュウイチは目を閉じた。くーなの体温とビロードを思わせる肌を感じたまま、リュウイチは瞑想した。

やはりくーなは、何者かに眠らされたんだ。しかもその者は僕のない時間を狙って、ここに来た。使われたのはエーテル。それはエタノールと硫酸から作られる。僕のいない時間に使われたエーテル。誰か研究所の人間が、くーなを事件に巻き込んだのか？ しかし

ーなと研究所の関係って？

リュウイチの瞑想はここで深い霧に包まれた。静かに目を開ける。くーなが顔をこちらに向けて、黙ってリュウイチを見ている。

くーなが倒れた晩のこと、何か覚えているか？

リュウイチへ届け物って、宅配便の人が来たわ。それで受け取りに出たの。

何時頃？

あまりよく覚えていないけど、結構遅い時間だったわ。たぶん十時頃。それで受け取りに行ったら、いきなり首をしめられそうになって……。そうそれから、湿ったタオルのようなもので、口や鼻を塞がれたと思う。苦しくて暴れたような気がするんだけど、声が出せなかった。そのうちにだんだん気が遠くなってきた、次に気がついたら病院にいたわ。でも荷物を受け取りに行った後のことは、ちよつと記憶があやふやだけだね。

その宅配便を運んできた奴には、見覚えは？

よく覚えていない。帽子をかぶっていたような気がするんだけど、どうもその辺りから、記憶が曖昧なのよ。

くーなは静かに頭を起こした。わずかに蒲団が持ち上がり、くーなの大理石を磨き上げたような肩が露わになつた。

リュウイチも起き上がり、服を着た。くーなにも服を着なよと言った。くーなは、その前にシャワーを浴びてくるわ、と言って浴室に向かった。

シャワー室に入っただけのくーなは、すぐに「ない」と言って、青ざめた表情のまま、全裸で浴室を飛び出してきた。
どうしたんだ。

ないのよ、ピアスが。右だけ。病院で落としたのかしら。今までずっと、耳についているものと思っていただけ。

くーなは大切なものを失ったことに、興奮していた。左耳にだけぶら下がったピアスは、兄弟を失ったように寂しげに、くーなの動き

に合わせて揺れていた。

仕方ないよ。あんなことがあったんだ。

でも嫌。もう一度病院に探しに行く。

また買えばいいと言うリユウイチの言葉にも、くーなは耳を貸さず、探しに行くの一点張りだった。結局リユウイチが折れて、くーがシャワーを浴び終えたら、一緒に探しに行くということになった。

家から病院までの道中、二人は小さなピアスの輝きを見逃すまいと、帰ってきた道を思い出しながら病院に向かった。しかしその道中で、くーなの左耳で揺れるピアスは、自分の片割れを発見することはできなかった。

くーなたちはつい数時間前に後にした病院に着くと、先程看護師たちの見送りを受けた正面のエントランスから中に入った。くーなは病室から自分の歩いた道を辿りながら、目を皿のようにしてピアスを探した。

探しながら二階に上がると、ナースステーションから女性看護師が、彼らを見て出てきた。この二日間、くーなの面倒をみてくれ、リユウイチに見えない面会者の来訪を教えてくれた看護師だった。「どうしたの？ 何か忘れ物でもしたの？」

看護師がくーなに尋ねた。

「忘れ物じゃなくて、落とし物なの。ピンク色のピアスんだけど、涌井さん、見なかった？ これなんだけど」

涌井と呼ばれた看護師に、くーなは自分の左耳にあるピアスを見せた。ちよつと待って、と言って涌井はナースステーションに引っ込んだ。再びくーなの前にやって来た涌井は、首を横に振りながら言った。

「こつちには落とし物として、届いていないわ」

「それじゃ病室を探したいんだけど、いいかしら？」

「ええ、匡子さんの部屋には、まだ誰も患者さんは入っていないから、どうぞご自由に。見つかるといいけど」

そう言つて、涌井は一緒に二〇五号室に向かった。

三人はくーなが寝ていたベッドを中心に、部屋中を隈なく探し回った。しかし右耳にあるべきピアスは、この部屋でもその輝きを取り戻すことはなかった。

「くーな、これだけ探しても見つからないんだ。もう諦めるよ」
ピアス探しに疲れ、リュウイチはくーなの肩をそつと叩いた。振り返ったくーなの目には、涙がいつぱいに溢れて^{あふ}いた。

なおもピアス探しを続けるくーなをどうにかなだめて、涙を拭かせると、リュウイチは涌井に、一緒に探してくれたことへの礼を述べて病室を出た。重い足取りのくーなを連れて一階に降りると、意外な形でピアスはくーなの手に戻った。

病院の一階ロビーは、外来の患者たちがあふれていた。その患者たちをかき分けるようにエントランスに向かう途中、リュウイチに声を掛けてくる者があった。アキだった。

こんにちは、と言いながら、アキは患者の人の群れから、によつきりと生えてきた竹の子のように現れた。リュウイチは頭を下げるとくーなに向かつて言った。

覚えているかい。ユイちゃんのお姉さんのアキさんだ。

こんにちは。この前はありがとう。アキさんっておっしゃるんですか。

くーなちゃん、もう良くなったのね。元気そうで安心したわ。
ええ、すっかり良くなりました。

ところでこれ、くーなちゃんのものじゃないかしら。
そう言つてアキはバッグの中から、小さく光るピアスを取り出した。それは間違いなく、くーなの左耳の片割れであった。

以前リュウイチさんのところで、くーなちゃんに会ったときに、何となく見覚えがあつたので、もしかしたらと思つたの。

これをどこで？

アキはエントランスの方を指差した。

病院の入り口だね。先ほど風邪の診察に来た時に、ドアの前で

見つけたのよ。

くーなにピアスを手渡すアキに、リュウイチが尋ねた。

ところでくーなが入院していることをご存じだったんですか？
アキは不意を突かれたような表情で、はっとリュウイチを見た。しかしすぐに聡明な無表情に戻ると、言った。

実は昨夜、ユイから電話で聞きましたの。

では、それまでくーなの入院については、ご存じなかったと。

ええ、元気なくーなちゃんが入院しているなんて、ユイから聞かされてもなかなか信じられなかったくらいでしたわ。

そう言くとアキは、じゃあまたねとくーなに手を振って、外来患者の群れにしばらく見え隠れしていたが、やがてその群れに飲み込まれた。

くーなは横で、大切なピアスが戻ってきたことに無邪気に喜んでいった。

家に戻るとまた騒動が持ち上がった。くーなが「本がない」と騒ぎながら、自分の荷物を入れていた大きなバッグを引っかき回していた。シャツやスカートや下着が、ところ構わず撒き散らされた。

リュウイチは半狂乱になっているくーなと、衣服が散乱する部屋を見て、驚愕した。

一体今度は、どんな本がなくなっただんだよ。

トルストイの本。『戦争と平和』って本よ。

それはくーながリュウイチと最初に出会ったとき、唯一身につけていた持ち物だった。くーなはそれを、彼女の父の部屋に忍び込んだ時に掠め取った、たった一つの戦利品だと言って笑った。それ以来、家を出るまでの間、父が作り上げた結界には足を踏み入れていない。

だから何度も読んだわ。その本だけが、私とあの部屋との繋がりのような気がしたの。それにしてもあの部屋にある本には、文学小説であっても 戦争 なのかと思ったら、ちょっと可笑しかったわ。

それはそうと、本以外に何かなくなつたものはないのか。

ないわ。でも病院から戻ったら、バッグのチャックがちよつとだけ開いていた。それでおかしいなと思つたの。私、そういうの結構気になるのよね。シャワーの後、着替えたときに、きちんとチャックは閉めたはずんだけどな。

ということとは、本はなくなつたというより、盗まれたつてことになるんじゃないのか？

誰もいない間になくなつたんだから、そういうことになるわね。何だか怖いわ。でもどうして、あんな擦り切れかけた本だけを盗むのか、まったく理解できない。それに帰つて来た時、ドアの鍵は閉まっていたわよね。

くーなは今更ながら、背筋に冷水を浴びせかけられたように、ぞつとした顔をした。彼女の頭の中を、二日前の事件の記憶が去来した。

うん、閉まっていた。だが古いマンションだし、針金一本で鍵を開けるなんて人もいるからな。それよりその本には、何か大切なもの、例えばお札さつのようなもの、が挟んであつたりしないのかい？

いいえ、ただのおんぼろの文庫本よ。何冊かの分冊になつていたんだけど。確か四冊目あたりには、父が書いたんじゃないかと思われる、何か落書きのようなものも書いてあつたしね。普通の人欲しがるとは、到底思えないわ。

（落書き？）

その落書きつていうのは、何て書いてあつたんだ。

よく覚えていない。そもそも変な式のような、意味不明な文字が書き連ねてあつただけで、見ても全く意味不明よ。

そういうとくーなは、本は意外とあっさり諦めたあきらように「もういいわ」と言つた。

本はまた買えばいいわよ。そういえば、父は、私がああの部屋に入ってから、その本を探していたみたいだったわ。何日か後に、何度も「知らないか」って聞かれたもの。でもこつちも叱られて、ふてくされていたから、知らないと言って隠しておいたの。

くーなは、シャツや下着の海を中心に座り込んだまま、さも可笑しそうに笑ったが、リュウイチは笑わなかった。その落書きが無性に気になった。

その夜、いつもの風呂上りのコーヒーを飲みながら、くーなが話しかけてきた。

リュウイチ、トルストイ知っている？

名前くらいは知っているよ。ロシアの作家だよ。

そのトルストイの有名な言葉があるんだけど、それは？

知らないな。

やった、リュウイチが知らずに、私が知っていることもあるのね。

嬉しそうにくーなは、トルストイの名言を披露した。

「過去も未来も存在しない。在るのは現在という瞬間だけだ」

結構好きな言葉なのね。トルストイがどういう意味でこの言葉を言ったか、それは分からないけど、今という瞬間を懸命に生きると言われているような感じが好きなの。

なるほどな。でも未来も大事だと思うけどな。

そうかしら。

くーなは未来について、どう思っているんだい？

うまく言えないんだけど、未来というのは、結局今、つまりトルストイが言う 現在の延長でしかないわ。こう話している今も、そう言っている間に今ではなくなつて、未来だと思つていた時間が、次の瞬間には 今 になっている。だからいつも 今を懸命に生きていれば、それは結局、常に懸命に生きていることになるんじゃないかしら。未来っていうのは、言つなれば予約された 今 ね。

もしかすると、とリュウイチは考えた。くーなの楽天的とも思えるほどポジティブな生き方の根源は、ここにあったのではないかと。

なかなかくーなもいいことを言うね。

そう言つとリュウイチはコーヒーを飲み干し、「そろそろ寝よう」と立ち上がった。

くーなの退院に始まつた、騒動に満ちた一日が終わつた。

眠りに落ちゆくリュウイチの夢の中では、昔観た、オードリー・ヘプバーンが演じている「戦争と平和」の映画が再生されていた。ヘプバーンの天真爛漫な笑顔で走り回るシーンを、不条理な出来事に立ち向かい、^{あらが}抗い、くーなを守る使命感を抱えて進む自分に重ね合わせていた。

僕のナターシャを守らなくてはいけない。彼女を巻き込む、不条理な何かから守らなくてはならない。くーなの顔から天使の笑顔を消し去つてはいけないんだ。

浅い眠りにまどろみながら、リュウイチはそう誓つたのだつた。

10 父との再会

その朝、研究所で一仕事を終えたリュウイチを、ツジイが休憩コーナーに誘った。休憩コーナーにはユイもいた。

ツジイは席に着くなり、開口一番、リュウイチに唐突な質問を浴びせかけた。

リュウイチ、君と一緒に暮らしているっていう妹さんは、本当に君の妹なのか？

リュウイチはどきりとした。一瞬口ごもった。しかしツジイの目は真剣であり、決して冗談で聞いているようには思えなかった。

隣で二人の会話を邪魔しないように座っているのがユイだけであり、かつ彼女はすでにあらかたリュウイチとくーなの関係を知っている。そのことがリュウイチを決心させた。

実は一緒に暮らしているのは妹ではありません。嘘をついたり、隠したりするつもりはありませんでした。ただ何て言うか、つまりタイミングがなかったんです。すみません。

よく分からないまま、リュウイチは何となく謝った。

いや別に、謝ることはないさ。君だって大人だし、僕も君のプライベートに、不必要に介入するつもりで聞いたのではないんだ。ただ所内で噂になってしまっていてね。気になったものだから。

そうでしたか。それでその噂というのは、一体どんな話なんですか？

最初は君が 妹 と称する女性と、急に一緒に暮らし始めたという、こう言っては何だが興味本位の噂話だった。先日の打ち上げで、君から聞いた妹の話を、ついキトウやミヤシタ達に話してしまった。それが発端だったかもしれないし、そのことについては僕が謝らないといけないかもしれない。しかし最近、単に噂話と放っておけないような話が持ち上がってきていてね……。

というと？

うん。

そこでツジイは言うべきか、言わざるべきか、やや逡巡した。そして意を決したように、きっぱりと言い切った。

君と一緒に住んでいる、君が 妹 と称する女性が、実は大和田局長の娘ではないのかという話が出ているんだ。まさかとは思うが、本当なのか？

実を言うと、僕にもはっきりと分かりません。ですが、彼女の本当の姓が『大和田』であることは事実です。ですから、大和田局長の娘である可能性は、否定できません。

真摯^{しんじ}なまなざしで話したリュウイチを見て、ツジイも一応納得した表情を見せた。ツジイは「根掘り葉掘り聞いて、すまない」と言い、リュウイチの肩を一つポンと叩くと、コーヒーを飲みほし、席を立った。

横でコーヒーを静かに飲んでいたユイも、驚いていたようだった。

リュウイチは噂話の出所については、詮索しないつもりだった。そんなことをすれば、却ってクーなに累が及ぶ可能性がある。それにツジイもわざわざ直接リュウイチを呼んで、問いただした以上、今後不必要な他言は避けてくれるであろう。ユイにしても今まで蔭ではリュウイチやクーなの助けになってくれたのだ。余計な噂などすまい。そもそもユイには、噂話なんて似合わない。

しかしリュウイチは、クーなの本当の出自については知る必要があるのではないかと考えた。

確かに今まで、大和田という姓の一致と、クーなの父親が防衛庁に勤める人物であることから、クーなの父親はすなわち 大和田局長 であると考えてきた。しかし果たして防衛庁に勤務する大和田姓の人物が、いかほどいるだろう。

（やはり確かめておかなくてはいけないだろう。）

帰り道、リュウイチはクーなの父親と会う決心をした。

もし彼女の父親と対峙するとなれば、リュウイチはまだ二十歳^{はたち}にも

満たない少女を誑かした、とんでもない男だとの誹りを免れないかもしれないぬ。少なくともくーなは、再び彼女の父の庇護下に置かれ、リュウイチとの二ヶ月にも満たない蜜月は、間違いなく幕を引くこととなるであろう。

それでもリュウイチは会わなければならないと考えた。それは悲壮感で満たされた決心だったけれども。

その決心は、くーながかの文豪トルストイの言葉を借りて語った言葉に、後押しされたものかもしれないかった。

「今を懸命に生きる」ことは、そういうことではないのか。仮に明日、くーなどのかけがえのない蜜月が終わるとも、僕はくーなを守ると思ったんだ。

いつしかリュウイチは、くーなによって強くなった自分を省みた。

明日は週末という夜、リュウイチはくーなに己の決心を切り出した。

君の父親に会いに行こう。

くーなは狐に鼻をつままれたような表情になった。さもあるう。リュウイチの言葉は、くーなにとって、父の許へ帰れという通告でもあったから。

どうして。もう父のところへなんて、帰りたくないわ。私が邪魔なら、そうはつきり言ってくれてもいいのよ。でも父の所へは、帰らない。どうして急にそんなこと言い出すのよ。

たちまちくーなの目には、リュウイチの決心を最も鈍らせてしまう、ダイヤモンド色の涙が溢れた。実際、リュウイチは一瞬、己の言葉を取り下げるべきかとさえ考えた。しかしリュウイチは、もう以前の彼ではなかった。

誤解しないでほしいんだ、くーな。君が邪魔だなんて、考えたこともない。いやむしろ、今の僕にとって、君は何よりも大切な人だ。だからこそ、僕は君の父親と会う必要がある。

涙で真っ赤になったくーなの目をまっすぐ見据えて、リュウイチははつきりと言った。

それから彼の研究所での噂話について、説明した。彼とくーなのことを秘密にすることはおろか、はつきりしておかないと噂は必要以上の尾ひれをつけて、二人の大切な時間を蝕むむしばかもしれないこともそしてリュウイチは、ここ数日、一人でじっと考えていたある推量を語った。

これはまだ僕の考えでしかないんだが、君を事件に巻き込んだのは、僕の研究所の人間ではないかと考えているんだ。

リュウイチはくーなに、彼の頭に数日来わだかまっていた考えを話した上で、事は急を要する、と言った。

それでもくーなは執拗に反対した。彼の胸に飛び込んだくーなは、まだ大人になりきれない駄々かぶりつ子のように、激しく頭を振った。

でも、父の所に行ったら、きっと連れ戻されるわ。そうしたらもう、リュウイチともおしまいよ。私はまたあの開かずの間の隣に、幽閉されてしまうかもしれない。そんなの、嫌よ！

くーなの言葉は、リュウイチにも痛いほど同感できた。ただ出会って、一緒に生活を始めただけの、二人の時間を妨げる 何か を恨んだ。リュウイチのその 何か と対峙しなければならぬという決心は、もういささかも揺るがなかった。

大丈夫だ。君は僕が守ると決めたんだ。きっと君のお父さんにも分かってもらうさ。分かってもらえるまで、僕は何度でも話す。僕を信用してくれ。今のままでは、おそらく君は安全ではない。僕は君を守りたい！

訴えかけるリュウイチの眼力が、かたくななくーなの心をようやく融とかした。

くーなはまだ泣きじゃくったまま、彼の胸の中でかすかに頷いた。

翌日、二人は夏の日差しに今にも融解しそうな、アスファルトの緩やかな坂道を、並んで歩いていた。

瀟洒な邸宅せうしやうが立ち並ぶ東京の山の手郊外の一角に、ひときわ目を引く、広い庭と高い塀に囲まれた家がある。黒い大理石でできた表札

に、美しく彫られた名前は　大和田　である。

リュウイチはくーなの案内で、門の前に立った。圧倒されるほどの邸宅の大きさに、息を呑み、思わず足がすくんだ。横を見れば、くーなは手馴れた様子で、門柱に取り付けられているインターホンを鳴らしていた。

リュウイチは慌てて心の準備をしなければならなかった。

はい。大和田でございます。

齡を重ねたと思われる落ち着きと邸宅にふさわしい上品さを兼ね備えた声が、インターホンから聞こえてきた。

私、匡子。今、門の前にいるの。開けてちょうだい。

匡子なの？　お父様から、今日来ることは聞いていたわ。では今から開けますから、お入りなさい。

三秒後、金属製の重そうな門はその重厚さにふさわしく、威厳ある音を立てながらゆっくりと開いた。門の向こうには、ちょっとした森を思わせる植え込みと車が数台あった。さらにその奥に、簡素なデザインでなければしさを極力抑えながら、しかも高級感は損なわずに聳え立つ家が^{そび}あった。

くーなの肩をリュウイチがぽんと叩いた。くーなはリュウイチを見て頷いた。そして「行きましょう」と言って、まるで行進でもするように大きく手を振り、門の中に入って行った。その仕草は、自ら出て行った家に再び舞い戻ったことへの、照れ隠しにも見えた。

門をくぐり、邸宅の木製のドアに向かって進み始めたとき、ドアが開かれた。中からは、髪を短く揃えた和装の女性が現れた。

くーなが「お母さんよ」と、リュウイチに小声で言った。ドアから顔を出した女性は、久しぶりの娘との再会を喜んでいるのか、ドアの前に出て大きく手を振っていた。

くーなの母の顔がはつきりと分かるところまで進むと、リュウイチは彼女に向かって、一つ頭を下げた。くーなの母も頭を下げ返した。我が娘が男性をエスコートして、久しぶりに帰ってきたことにも、さほど頓着はしていなかった。きっと世俗全般に疎いまま、齡を重ね

ねてきた女性なのだと、リュウイチは思った。

母が二人を快く迎えてくれたことで、リュウイチは一時に緊張感が解け、膝が、がくりとする感覚に襲われた。

ドアの前に到着すると、二人を見比べながらくーなに母が尋ねた。

匡子ちゃんのお友達？

そうよ。リュウイチさん。お友達っていうより、命の恩人って感じがしら。

「まあ、そうなの！」とくーなの言葉を文字通り受け止めた母は、大仰な調子で驚いた。そしてリュウイチを頭から爪先まで、ずっと眺め、もう一度大きくお辞儀をした。

何があつたか存じませんが、申し訳ありませんが、匡子がお世話になりました。

まだ家にも入っていないうちに、くーなの母によつて、リュウイチは覚えず英雄に祭り上げられてしまった。予期しない展開に、彼はどぎまぎしながら、くーなと彼女の母の顔を交互に見ていた。

くーなの母に促され、二人はようやく邸宅の中に入った。大理石でできた広い玄関で靴を脱ぎ、それに続く廊下を奥に進んだ。廊下を突き当たったところに、リュウイチの住むマンションの一室を飲み込んでしまうほどの大きさの応接間が控えていた。二人は広すぎるその部屋に通され、くーなの母からしばらく待つようと、グレーの大きなソファを勧められた。

十分間、ソファに座ったまま、応接間に並ぶ豪華な調度品を眺めていた。やがてくーなの母は、盆に載せたコーヒーと一人の男を伴つて、再び応接間に入ってきた。リュウイチの目はその男を、素早く捕捉した。

やはり、あなたでしたか。

唐突なリュウイチの言葉にも、その男は官僚らしい殷懃^{いんぎん}さと尊大さを崩さなかった。しかし男の目には、にわかに警戒の色が浮かんだ。それを察知したリュウイチは、慌てて挨拶もなくいきなり話しかけた非礼を詫び、改めて自分の名を名乗った。

防衛庁、防衛政策局の大和田局長でしたね。以前、研究所視察の折に、お見かけしました。

そうか。君は荒木君のところの所員かね。いかにも私は、防衛政策局の大和田だ。

リュウイチが荒木の部下であることを知り、大和田も警戒心も少し解いた。大和田は茶色の紙巻煙草を取り出すと、「失礼するよ」とリュウイチに言い、火をつけてうまそうに一息吸い込んだ。

くーなを見て一言、「久しぶりだな」というと再びリュウイチを見た。

何か私に話があるそうだが。

はい。今日はいくつか大和田局長に確かめたいことがあって、お邪魔しました。

ほう。何だね。

その前に、一つお断りします。これから確認させていただくお話は、もしかすると大和田局長のお仕事に関わることもかもしれません。もし局長の、あるいは防衛庁の機密に関わるのであれば、お人払いしていただいても構いませんが。

ふむ。なかなか君は機転が利くな。では念のため、そうさせていただく。

妻君に、「絹代、私が呼ぶまで下がっていてくれ」と言った。続いてリュウイチに「匡子は？」と尋ねた。

これまでの経緯もあるでしょうから、匡子さんにはここにいてもらいましょう。いいよね、匡子さん？

リュウイチから「匡子さん」と呼ばれたくーなは、くすぐったそうに肩をすぼめて、黙って首を縦に振った。

盆を持ったまま大和田の脇に立って控えていた絹代は、静かに応接間を出て行った。

さあこれでいいかな。早速話を伺おう。

はい。まず匡子さんがこの家を出て行った原因からお話します。

リュウイチはそう切り出した。

そしてくーなに代わって、大和田の書斎に忍び込んだこと。それはただ単に、読むべき本を探すためであったこと。たった一度、開かずの間に入ったことをなじられ、そのことへの反発として、高校を卒業すると同時に家出することを決心した、ということをかいつまんで説明した。

大和田はただ黙って、じつと煙草をくゆらしたまま聞いていた。リュウイチはそこで、第一の矢を放った。

ところで匡子さんは局長の部屋に入ったとき、マル秘と書かれた『核兵器開発』に関する書類を見たと言っています。それは本当のことですか。

それまで黙って聞いていた大和田の瞳が、ゆっくりと大きく見開かれた。その目はリュウイチを射抜くかのように、鋭かった。そしてその鋭い眼光のまま、視線の先をくーなに移しながら口を開いた。

いかにも。君が人払いをした理由も分かったよ。しかしそれは、防衛庁とは何ら関係のない資料だ。部屋に入ったのなら、匡子にも分かるだろうが、私はいわば個人的な趣味で兵器の研究をしていた。信じていいですね？

リュウイチは再び向けられた、大和田の鋭い視線を押し返しながら、念を押した。

ああ、もちろんだ。

大和田は大きく頷くと、やおら自分の研究について、とつとつと話し始めた。

まだ防衛庁に荒木もいた頃だ。随分前になるが、彼と私は半ば冗談で原子爆弾の製造ができないか、などという話をしていたことがあってね。冗談で始めたんだが、そこはお互い、元々が研究者だ。二人とも、そのテーマに夢中になっていた。しかし理屈は知っていても、なかなか実際には製造できないんだね。一つ間違えれば、自分が死んでしまうかもしれない危険なテーマだ。だが、それだけに私も荒木も夢中になった。

そこで一息つくくと、大和田はコーヒで喉を潤した。リュウイチが言葉を継いだ。

そうすると局長の机に載っていた資料というのは……。

そうだ、その冗談で始めた研究の成果だ。実を言うと、匡子が部屋に入った段階で、原子爆弾の設計図とも言つべき計画は、ほぼ出来上がっていた。ただ一箇所を除いてな。

その一箇所とは？

その質問に大和田は逡巡した。話すべきか、決めかねているように腕を組み、およそ二十秒間じつと考え込んだ。

くーなは父の様子をじつと見ていた。一言も発することなく。

大和田とくーなの目が合った。その瞬間、彼は話す決心をした。

そう、それこそが私の計画の要だった。けれどもその箇所は、今の私にもわからない。

どういうことです？

つまりその答えは、匡子が私の部屋から、パズルの最後のピースを持ち出したんだ。本人は否定しているがね。

くーなと目を合わせたまま、さも残念そうな面持ちで、大和田は吐き出すように言った。

第二の矢が放たれた。

それは本ですか。

そうだ。君も読んだことぐらいあるだろう。トルストイの「戦争と平和」だよ。

思わず、リュウイチとくーなは顔を見合わせた。

その本を読んでいるときに、突然最後の「一箇所」が、私の頭に閃いたのだ。それはもう嬉しくてね。しかしベッドの灯り以外、部屋を暗くしていたから、思わず手近のペンで、その本にメモをした。資料には後で書くつもりでな。

それで結局、資料にはそのメモは書かれたんですか？

いや、だから言っているだろう。その本は、私が資料に書く前に、私の部屋から持ち出されてしまったんだよ。閃きはそのまま、

本とともに私の頭の中から消え去った。閃きというものは、いくら理詰めで考えようとしても出てこないものだ。だから私の研究もそこで頓挫した。いや、一気にその研究への情熱が、失われてしまったと言ふべきかな。

リュウイチは激しく動揺した。予感があった。だが今まで、彼の心は、そんな恐ろしいものが在るといふ事実を受け入れることを拒んでいた。これまで彼が、己の理性で否定し続けたものが、在った。それゆえ、リュウイチは、揺れた。

次の質問に移るまでに、リュウイチはかなりの時間を要した。大和田もくーなも、しかしその空気を察知してか、リュウイチが再び口を開くのを黙って待った。

やがて上ずったような、半オクターブ高い声で、リュウイチは話した。

では次の質問をさせていただきます。

ああ。

その資料は視察の際に、研究所にお持ちになりましたか。そして荒木所長とその資料について、論議されましたか。

大和田は一度、彼の秘私的プライベートな事実について話したせいか、もはや澀みなく言った。

持つて行ったし、荒木にも見せたよ。そもそも荒木に、私の研究成果を見せるのが、視察の真の目的だった。荒木は核分裂や核融合の分野では、私よりはるかに先んじていたよ。だが彼には、兵器に関する知識が欠けていた。それが、彼が防衛庁を離れて、研究所を立ち上げる端緒だった訳だが……。いずれにせよ、私が原子爆弾の製法を完成させたと話したとき、彼は我が事のように絶賛していたよ。是非拝見させてくれ、と言っていた。それで視察という名目で、資料を持つていくことにした。まさか堂々と原子爆弾について議論すると言うのは憚はにかられるし、私も公務が忙しくて、そんな口実でも作らないと、純粹にプライベートな時間に荒木と話をする余裕

もなかったのね。

銜^{ていつ}うことなく、淡々と語る大和田の言葉を、リュウイチは信じた。そうして素直に頭を下げた。

ありがとうございます。私のような者に、包み隠さず話していただいて。

仕方ないだろう。娘が連れてきた男だ。私も娘を持つ親として、粗末に扱う訳にはいかないよ。

そう答えた大和田の顔に、微かではあるが初めて笑みらしい表情が浮かんだ。官僚の顔が、いつしか父親のそれに変化した。

テーブルに置かれたコーヒ―は、とつくに冷めていた。リュウイチは一口飲み、大和田は二本目の煙草を取り出した。

続いてリュウイチは、彼がくーなと出会ってから一緒に生活を始めた経過を、かいつまんで話した。リュウイチがくーなを女にしたことは伏せた。父親の顔を見せた、大和田の心情を慮^{おもんはか}つてのことであつた。

そして話はくーなが、何者かに襲われ、昏睡状態になったことに及んだ。父親になった大和田は、驚きを隠そうともせず、かつ心配そうな表情でリュウイチの話を聞いていた。

病院での医師との会話を、リュウイチは反芻した。医師の見立てに拠^よれば、くーなはエーテルを用いて昏睡状態にさせられたと話した。大和田はその見立てに、科学者らしい反応を見せた。

エーテルか。まるでテレビドラマだな。だがエーテルが、そう簡単に作れるかな？

リュウイチと全く同じ感想を漏らした大和田に、リュウイチは思い切つて己の推測をぶつけることにした。

私もそう思います。

一瞬そこで間を置くと、リュウイチは一気に言い切った。言いづらいことではあつたが、第三の矢は放たれねばならなかつた。

だから匡子さんを襲った暴漢は、研究所の人間ではないかと考えています！

再び大和田は、沈思の表情になった。黙ってしまった大和田に向かって、リュウイチは己の推測の根拠を述べた。

研究所なら、エーテルの原料になる試薬もありますし、エーテルの製法を知る者もいると思います。

さらにリュウイチは「一つ、大事なことをお伝えするのを忘れまして」と前置きして、まるで苦いものでも吐き出すような調子で、言った。これが最後の矢であった。

しかも局長がメモを書かれた本も、先日、何物かが僕の部屋に忍び込んで、盗んでいきました。

大和田の顔が蒼ざめたが、それでも彼はじっと考え込んだままだった。

散りつく島もない大和田の前に、リュウイチも黙るしかなかった。横で、くーなが、停滞してしまった空気を、不安そうな顔で見つめていた。

そのまま長い五分が経過した。目を閉じて、考え込んでいた大和田は、静かに瞳を開くと、独り言のように呟いた。

これはもう一度、私が荒木と会う必要があるそうだな。

大和田の呟きが意味するところを、リュウイチは尋ねたかった。だが大和田が苦渋に満ちた表情をしていた。それは一研究者としての苦悩とも、愛娘を危険に晒す要因を作ってしまった父親の苦悩ともとれた。くーなを守ることを使命に、この邸宅にやって来たリュウイチは、主に父親としての苦悩に同情した。結局、彼はその問いかけを飲み込んだ。

リュウイチはやや大和田の表情に柔和さが戻ったところで、再び話し出した。

これで僕が大和田局長に確認したかったことは、全てです。ただ最後に一つ、お願いがあります。

何だね。言ってみなさい。

大和田の言葉には、腹を割って話した男同士の気安さが、いつしか含まれていた。リュウイチもその言葉に、大和田の表情を窺^{うかが}うことなく話すことができた。

その……匡子さんをもう一度、この家で住まわせてください。

くーなは弾かれたように、リュウイチを見た。驚きと悲しみをない交ぜにしたような表情で、彼女は頭^{かぶり}を振った。

それは私と君が決めることではないよ。

大和田はきっぱりと言った。

そもそも匡子がここを出て行ったのは、私の責任なんだろう。

私はやはり、何としても、娘を、いや誰も私の書斎に入れるべきではなかったのだよ。そう、私はやはり大きな過ちを犯したのだ。だから今は、匡子の気持ちを尊重したい。もちろん、この家に残ることは歓迎するがね。

大和田は父としての顔を、くーなに向けた。くーなも眩しそうに、父の顔を見返した。これまでの、一般的な家庭ではおよそ交わされることのない会話は、確実に、大和田とくーなの間に長いこと横たわっていた確執を洗い流していた。

どうする、匡子？

そう尋ねた大和田の顔は優しくかった。

私、今日家に帰ってきて、良かったと思っている。でもね、私も私自身の恩返しが終わっていないの。リュウイチさんは、行き場をなくしかけた私を救ってくれただけでなく、この私を守って、庇^{かば}ってくれたわ。だから私もリュウイチさんから受けた恩は返さなければならぬと思うの。

いや、それは違うよ。くー……

言いかけたリュウイチの言葉を、畳み掛けるようにくーなが遮った。リュウイチさんは、私にとってかけがえのない人なのよ。お父さん、信じて！ 私はこの恩返しができれば、きつとお父さんの所に戻ってくる。だから少しだけ、私に恩返しの時間をください。

いつしかくーなの目からは、大粒の涙が溢^{あふ}れていた。リュウイチはもう何も言わず、そつとくーなの肩に手を置いた。

大和田は腕を組んだまま、その様子を見ていた。

ふむ……分かった。

組んでいた腕を解くと、大和田はリュウイチに歩み寄り、その右手を取った。固い握手をした大和田の目にも、心なしか光るものが浮かんでいるように見えた。

そして泣きじゃくるくーなに言った。

そつと静かに家を出るんだよ。絹代にばれたら、また一騒動起きてしまう。

そう言つて快活に笑った。もう二度とくーなに会えなくなるかもしれないという覚悟で臨んだ、大和田との二度目の邂逅で、リュウイチは図らずも大和田の父親、研究者、官僚のそれぞれの矜持^{きやうじ}を垣間見ることとなった。

大和田は静かに応接間のドアを開けると、首だけを廊下に突き出した。誰もいないことを確認すると、人差し指を口に当てて、二人に合図した。その顔は何かいたずらを仕掛けようとしている少年のように、生き生きと楽しげであつた。

手招きされてドアに歩み寄る二人の背中を、大和田はそつと静かに押した。忍び足で玄関に向かう二人の背中に、父は小さく手を振った。

家に帰る道すがら、リュウイチは大きく伸びをしながら、前を歩くくーなに向かつて叫んだ。

素敵なお父さんだね！

11 懺悔

くーなは今、ここにいる幸せを堪能していた。父とのわだかまりも解け、リュウイチも彼女の隣で、朝食を頬張っている。

父はくーなに、リュウイチへの恩返しの間を与えてくれた。リュウイチの傍にすることを許した。きっと母は出迎えたきり、いつの間にか煙のように消え去った、親不孝な娘を大いに嘆いているのだらう。

空想はいつだって楽しい。くーなはにやにやと笑っている。今、彼女は自分の空想の世界を、大きな羽を広げて飛び回っているのだ。だが空想とは、架空ヴァーチャルの世界である。そこに今はない。「今を懸命に生きる」ことを説いたくーなは、今を忘れ去り、時間軸のない世界に身を委ねていた。

しかし彼女が今の存在する、現実世界に生きることを放棄しようとしまいと、現実の世界は、確実に未来を取り込み、それを今というフィルタで漉しとり、過去を紡ぎ出す作業を飽くことなく繰り返す。だからくーながふつと我に返り、再び今を意識したときには、すでにリュウイチは朝食を食べ終えて、コーヒーを飲みながら、すでにフィルタで漉された過去という残滓ざんしを吟味し、これから訪れるであらう今の連続を、頭の中で分析シミュレートしていた。

大和田が作成した資料が、もし研究所の何者かにわたっていたとしたら……。リュウイチはまず、その可能性から出発した。

その機会があるとすれば、おそらく大和田が視察に訪れた機会だらう。実際に研究所内を視察に周っていたときには、大和田は無論そんな資料は手にしていない。それは視察に同行したリュウイチ自身も見ていることだ。

ならばその資料は、視察の間、どこにあったのか？

（所長室？）

そうだ所長の部屋だ。視察前に大和田は、荒木所長と部屋でまさにその資料を見て、議論していた、と言っていた。視察の間、その資料は所長の部屋にあったのだ。

ではその時、所長室はどうなっていたのだろう。視察を担当したのはツジ主任だった。荒木所長は視察には同行していない。

もちろん荒木所長は視察から戻った大和田に、彼のライフワークの成果とも言つべき、「原子爆弾の製法」が書かれた資料は返しただろう。だが、もしも、視察の間自室にいた荒木所長が、その資料をコピーしていたとしたら……。

そしてくーなが持っていた本が、もし彼の手に落ちていたとするならば……。

リュウイチの思考が、そこで停止した。

「リュウイチ」遠くでくーなが呼んでいる声がする。彼の心には、にわかに、その顔の色とは対照的な、どす黒い雲が立ち込めた。リュウイチ、リュウイチ。呼びかけながら、くーなが体を揺すっている。

ねえ、リュウイチ。どうしたの、変よ。

リュウイチは、はっと我に返ったが、すぐにくーなの肩を掴んだ。その目はまるで幽霊を見たかのように、大きく見開かれ、くーなは思わず息を呑んだ。

くーな、お父さんに電話してくれないか。確か昨日、君のお父さんは『もう一度荒木と会う必要がある』って言っていたよな。

そうね、言っていたわ。電話するのはいいけど。

くーなは携帯電話を取り出し、大和田の携帯電話にダイヤルした。三回かけ直した。しかし彼女の携帯電話は、空しく留守番サービスのアナウンスを繰り返すばかりだった。

じゃあ今度は、自宅にかけてみてくれ。

わかったわよ。でも、どうしてなの？

理由はあとで話すからさ。まずは君のお父さんが、家にいるのか確かめて欲しいんだ。

くーなは再び携帯電話を開き、自宅に電話した。受話器から、絹代の声がした。

はい、大和田でございます。

もしも。

あら匡子ちゃん。昨日はどうしてまた出て行ってしまったの。てつきり帰って来たものと思っていたのに。

ごめんなさい、お母さん。お父さん、いるかしら。

そのとき大和田は、庭の植木の手入れをしているところだった。絹代に呼び出されて、間もなく大和田が電話に出た。

匡子か、どうした。リュウイチ君と喧嘩でもしたのか。

受話器から、隣にいるリュウイチにもはつきりと分かるほどの笑い声が聞こえた。

そうじゃないわ。実はね、リュウイチがお父さんと話したいって言っているの。

「かわるわね」と受話器に言うと、それをくーなはリュウイチに手渡した。

大和田局長、お休みのところ申し訳ありません。実はもう一つお聞きしたいことがあります……。

リュウイチ君だね。何だい？

できたらお会いして、お話をさせていただきたいんですが。お時間ありますか？

そうか。

考えているのか、少し大和田は無言になった。リュウイチは祈るような気持ちで待った。

祈りは通じた。

夕方でも構わないかね。

ええ、ご都合のいい時間と場所をおっしゃってください。

間もなく私も外出してしまう。夕方五時に新宿でどうかね。西

口の……そうだな、JR改札で落ち合うことにしよう。

わかりました。必ずその時間に伺います。ありがとうございます。

何、構わないさ。夕方以降は、どうせ空いている。それに不謹慎かもしれないが、君の昨日の推理は、なかなか聞いていて楽しかった。ではまた、夕方会おう。

電話が切れた。

くーなはテーブルに携帯電話を置くと、リュウイチに尋ねた。

父と会うの？

ああ。夕方五時に、新宿で会って貰えることになったよ。

でも昨日、父とは話をしたばかりじゃない。どうして急にまた？

もう一度、確かめておきたいことがあるんだ。それに、いい忘れたことも。

結局、くーなへの説明はそれだけだった。

午後になって、二人は新宿に向かった。くーなが、折角だから買い物をしたいと言いだしたからだ。デパートのレストランで昼食をとった。その後は夕方まで、リュウイチは足が棒になるほどくーなの買い物に付き合わされることとなった。

（それにしても女という生き物は、どうしてショッピングとなると恐ろしいほどのバイタリティを発揮するのだろうか）

ねえ次はあの店に行こう、と言って、くーなはリュウイチの腕を引っ張る。リュウイチはデパートでは、完全にくーなの操り人形と化していた。

ようやくくーなの買い物への情熱は治まり、色とりどりの女性服売場が立ち並ぶフロアの一角にあるカフェに、二人は入った。リュウイチは干からびた魚のようになった体に、冷たい飲み物を注ぎ込み、ほっと生き返った心地がした。

隣の空いている椅子に、大きな紙袋を二つ置くと、くーなもオレシジューズを瞬く間に飲んでしまった。

ああデパートで、買い物なんて久しぶり。楽しかったわ。あちこち連れ回してごめんね、リュウイチ。

今更ながらにクーなは、すでに疲れた顔をしたリュウイチを氣遣っていた。

うん、クーなもこのところ、大変だったしな。楽しかったのなら、良かったよ。

「大変だった」という己の言葉が、またクーなを巻き込んだ事件を思い出させた。否が応にも、あの事件をを考えてしまう。クーなへの心配が、鎌首を持ち上げる。一体僕には、そしてクーなの前には、何が待ち受けているのだろうか？

しかし未来は臆^{おぼ}げにしかその姿を現さない。リュウイチはすでに過去に押しやられた出来事の残滓^{ざんし}をかき集めて、やがて今となる未来を予測するしかないのだ。そんな危うい未来予測に、クーなと自分の命運を託しているのかと思うと、リュウイチはふと「本当にクーなを守るだろうか？」という弱気な気持ちになった。

（とにかく突き進むしかないよな、リュウイチ）自分に向かってそう呼びかけ、とにかく弱気な心を眠^{ふる}らせる。気持ちを奮^{ふる}い立たせ、真っ直ぐ前を向く。

その視線の先にある時計は、午後四時三十分を告げていた。

約束の時間に遅れまいと、リュウイチは席を立った。クーなが抱えていた大きな袋を持ち、小さい袋はクーなが肩にかけて、二人は連れ立ってカフェを出た。

週末の夕方に差しかかる時間、デパートから駅へと向かう人で、新宿の街はごった返している。JRの改札までの道のりはさほど長いものではなかったが、人垣を掻き分けて改札にたどり着くまで、たつぷり十五分を要した。

改札の前もまた、恐ろしくなるほどの人たちが、波のように右へ左へ揺れていた。こんな中で大和田を発見するのは、広い波打ち際で落とした一粒の石を捜すようなものだった。その感慨から、リュウイチは過去の残滓の一つを拾い上げた。

（あの外来患者が行き来する病院のエントランスで、アキさんはよくくーなのピアスを見つけられたな）

感慨に浸っていると、捜すまでもなく大和田は二人の前に現れた。

やあ、待たせたね。

お父さん、なんだか外で会うというのも不思議な感じね。

そう言ってくーなは、左腕を父の腕に回し、もう一方をリュウイチの腕に絡めて、行きましようと言った。大和田は、間にくーなを挟んで、首だけを横に向け、ともすると人波が発する雑音にかき消されそうになる声を張り上げて話した。

どうだい。折角だから少し早いけど、食事でもしながら話をするというのは。

はい、僕はどこでも構いません。

じゃ店は私に任せてくれるね。

三人は間にくーなを挟んで、蝶のようにひらひらと人の間を潜り抜け、高層ビルの立ち並ぶブロックへと向かった。

空にまで届くのではないかと思われる摩天楼が、いくつもいくつも伸びる高層ビル街に着くと、大和田はその中でもとりわけ高いビルに入ってしまった。

一階は広いホールになっており、低層階と高層階で利用するエレベーターが分かれている。大和田は高層階用のエレベーターに乗り、五十二階のボタンを押した。

エレベーターは音もなく上昇し、リュウイチの耳をキーンとさせながら、あっという間に五十二階に到着した。

大和田はエレベーターを降りると、迷うことなく、間接照明がほの暗さを演出したイタリア料理店に入った。大和田の顔馴染みの店なのか、彼が店の入り口に顔を出すと、すぐさま接客用のきつちりとしたユニフォームを着た店員が出てきた。「こちらでございます」と案内された席は、店の一番奥に個室風にしつらえられたテーブルであった。すぐ脇の窓に目を移せば、気が遠くなるほどはるか下方に、新宿の街並みが照らし出すネオンが、やや薄暗くなりかけた景

色を彩り始めていた。

魚介が鮮やかな野菜とともに皿に載せられたアンティパストと、アペリティブのシェリーが運ばれてきた。くーなの前に、ミネラルウォーターのボトルも置かれた。くーなは真っ先にグラスを取り上げ、乾杯とグラスを突き出した。

食事が始まると、大和田はシェリーをちびちびとなめるように飲みながら、リュウイチに話しかけた。

さあ、そろそろリュウイチ君の話を聞こう。そのために来たんだからな。

そうですね。大和田局長は……。

話しかけたリュウイチを、大和田が遮った。

その『局長』というのは、やめてくれないか。君は僕の部下ではないし、ましてや娘の友人じゃないか。いや、命の恩人 だったかな。ま、大和田さんでもいいし、別にお父さんと呼んでくれても構わない。だが局長は、よそよそし過ぎる。そこでくーなが合いの手を入れた。

『お父さん』にしちゃえば。いずれそうなるかもしれないしね。くーなはリュウイチに、軽いウインクをした。思わず、グラスに伸びたリュウイチの手が止まった。

リュウイチは、気まずそうな咳払いを一つして、話を続けた。

では……お父さん。

横でくーなが「きゃっ」と言いながら手を叩いた。大和田がくーなをたしなめると、赤面しながらリュウイチは続けた。

視察に来られた日、実際に視察に周られる前に、荒木所長と所長室で話をされていましたよね。

いかにも、それはもう昨日話したと思うが。

失礼、たしかにそれは昨日お聞きしました。僕が聞きたいのは、その後のことです。大和田、いえお父さんが視察されている間、例の資料は所長室に置かれたままでしたか？

ええと、そうだな。置いてあったはずだよ。あんなものを荒木

以外の所員に見せる訳にも行かないだろう。だから視察の間、荒木に預けたよ。

やはり……。

それがどうかしたかね。

ここからは、あくまでも僕の推察に過ぎません。昨日、お父さんとお話してから、いくつかの可能性を考えてみたんです。ほう。

大和田はやや身を乗り出して、リュウイチの次の言葉を待った。大和田の仕草を見て、くーなの好奇心は父親譲りかもしれないなど、リュウイチはこの場にそぐわない感慨を覚えた。

つまり視察の間に、荒木所長はお父さんの計画、つまりあの計画書をコピーすることができたのではないかと。

うん、あの計画書は二十枚程度のものだし、視察の間にコピーすることくらい、訳ないだろうな。だが視察を終えて、彼のところに戻ったときに、そのようなコピーがあるようには見えなかったがな。

そこなんです。もし荒木所長がコピーしたという事実を知られないために、コピーをどこかに隠したとしたら……。元の資料をお父さんに返してしまえば、あたかも何でもなかったかのように思いますよね。しかし、あくまでも可能性の話ですが、計画書のコピーを荒木所長が今も手にしているとしたら……。

なるほど。荒木に疑いを持つているという訳かい。

お父さんの友人を、悪く言うつもりはないんです。お気に障ったのなら、謝ります。しかし事実、匡子さんも理由なく危険に晒されている。しかもそれは、あの視察のすぐ後に起きた。

そういうことになるかな。

もう一度、計画書に話を戻しましょう。いいですか、お父さん。あの計画書はお父さんの書斎、それも通常は誰も入れない部屋で管理されていた訳ですよ。けれどもあの視察の日、それは研究所にあった。そしてお父さんが視察をしていた時間、それはほんのわず

かの時間かもしれませんが、お父さんの管理下から離れた。つまりあの計画書を複製できるとしたら、おそらくその時間しかない。そして実行できる人は……。

荒木しかないわけか。確かに視察に出た後、彼の部屋には他の所員はいなかったな。だが、どうして？

そこへウェイターがパスタを盛った皿を運んできた。続いて肉料理も運ばれてきた。

大和田はウェイターに「いつものやつを頼むよ」と言った。ウェイターは、まるでイタリア女性を思わせる、ふくよかな丸みを帯びた赤ワインのボトルを持ってきた。

ウェイターが赤ワインを、大和田とリュウイチの前に置かれたグラスに注いで去った。

くーなは運ばれてきた料理を頼張っていたが、二人の話に聞き耳を立てることは忘れていなかった。ワインを飲みつつ、パスタに手を伸ばしている二人に、くーなが口を開いた。

そうするとこういうことなのかな。リュウイチの研究所の所長さんは、お父さんの資料をコピーしたとするでしょ。でも仮にその資料を手に入れたとしても、実際にはお父さんがメモした本がないと、計画書の通りに爆弾を作ることはできないのよね。

その通りだ。荒木なら爆弾らしきものは作れるかもしれないが、あくまでもらしきものでしかない。さらに言えば、荒木は完全主義者などところがあるぞ。おそらく仮にあの資料を見たとしても、その通りには作るまい。あの資料は完全には完成していないのだからな。実際、視察前に彼に資料を見せたときも、『まだ完璧ではないんだな』と言って、残念がっていた。それで何となく議論も終わり、私は視察に向かったんだよ。

もし所長さんが、お父さんのメモを手に入れたとしたら、爆弾は作れるの？

ああ、あの資料の唯一の瑕きずはそこだけだからな。荒木ほどの実力があれば、作れるだろうよ。それにあの研究所なら、材料には事

欠かんしな。

リュウイチが大和田を見た。

そう、僕が考えたのも、その点です。そしてお父さんに、今日最も確認しなかった点も。

というと？

視察前に荒木所長と議論されているときに、お父さんはそのメモの書かれた本について、所長と話をしましたか？

大和田は天を仰ぎ、荒木との会談を思い出していた。彼は、彼の頭の中に残った数多あまたの過去から、荒木との会談の記憶を選別するため、しばらく唸りながら考え込んだ。そして再び、リュウイチを見て、言った。

うん、思い出した。確かに言ったな。荒木はそのメモさえあればと、我が事のように残念がっていたよ。

そのメモは本に書かれていることも話したんですね。

話したよ。

荒木所長はその本がどこにあるかということをお父さんに尋ねませんでしたか？

荒木が聞く前に、私がそのメモについて話したときに、一緒に説明したな。『うちの馬鹿娘が、一番大事なメモを本ごと持って、どこかに行ってしまったよ』とな。実際そのときは、匡子は家を出てしまっていたし、私の書斎に入った者は、私を除けば匡子しかないからね。

ひどい！ 『馬鹿娘』はひど過ぎるんじゃないかしら。責任は感じますけどね。

横でくーなが甘えたようなふくれっ面をしていた。リュウイチは思わず「くーな」と、いつもの呼称で呼んだ。

でもその本を君が持って出たことが、君を事件に巻き込んだ元凶かもしれないだぞ。

くーなはきよんとした顔をしたが、すぐに合点が言ったようだった。

そうね。もし所長さんがメモを手に入れようとすれば、その本を持っている私を狙うって訳ね。

動機としては十分考えられる。

何ということだ。

大和田は父としての憤りを、一瞬露にした。リュウイチは続けた。

でもまだ、僕の中で完全にパズルは完成しない。一つ腑に落ちないことがあるんです。

いや、君の洞察力には驚いたよ。私も長年の友人を疑いたくはないが、やはり一度荒木に確かめねばなるまいな。

その前に、もう一つ確認させてください。くーなが、いや匡子さんが……。

「くーな」でいいじゃない。

そう言ってくーなが笑うと、大和田も頷いた。

じゃくーなさんが家出したことを、荒木所長に最初に話したのはいつですか？

ああ、電話で話したな。匡子が出て行った翌日だ。私もあのときは少し動転したよ。それですぐに荒木に相談した。

そうでしたか……。

リュウイチは両手で顔を覆うと、大きく深い溜息をついた。大和田とくーなが心配そうに彼を見た。

大丈夫かね、リュウイチ君。気分でも悪いのかい。

いえ、大丈夫です。今まで私が知りえたことから考えた推察は、以上です。後は直接、荒木所長と話をするしかないようです。

いつしかテーブルには、コーヒーとデザートが運ばれてきた。ボトルにまだ半分ほど残っているワインを見て、ウェ이터が「お気に召しませんでしたか」と心配そうに尋ねた。

いや、いつも通り最高のワインだよ。気にせんでくれ。

優しく静かに、ウェ이터に大和田がささやくと、ようやく安心したようにボトルが下げられた。どっしりとした赤ワインの後の、苦

味が効いたコーヒーは心地よかった。

ところでリュウイチ君。私は早速明日にでも、荒木と会おうと思う。君の推察が正しければ、話は早い方がいい。

どうしてですか。

相手は荒木だ。しかも推理通りなら、資料は揃っていることになるじゃないか。荒木も科学者だ。科学者というものは、常に実証したがるものではないかね。

つまり荒木所長が、資料通りに原子爆弾を作ると……。

大和田は大きく頷いた。

荒木ほどの実力があれば、あの資料から実験用の爆弾を作るにとくらい、そう難しいことではないはずだ。

リュウイチは背中に、うそ寒いものを感じた。

急いだ方がいいですね。できれば、その場に私も同席させてください。

しかし君からすれば、彼は所長だ。一般の企業なら、さしずめ社長だよ。そんな男を敵にしてみうかもしれないが、それでもいいのかい？

ええ、もし私の推測が正しいならば、荒木所長は……、所長である前にくーなに危害を加えた敵ってことになります。もし僕の推察が誤りならば、そのときはもう一度始めから、くーなの敵を探さないといけませんからね。いずれにしても彼女の身の安全を確保することが、今の僕にとって第一の使命ミッションですから。

リュウイチ。

くーながリュウイチを見つめた。その視線は、熱かった。

リュウイチ君、君はそこまで匡子のことを……。

大和田も一瞬、やや声を詰まらせた。その語尾は不明瞭になって、聞き取れなかった。

よろしい。じゃ荒木へは私が連絡する。敢えて君が同行することとは、伏せておこう。いいね。

はい、その方がいいと思います。荒木所長と話をする前に、所

長に何らかの予見を持たれるのは、今は得策ではないですからね。

承知しているよ。

もう一つお願いがあります。その場に、その、できればクーなも同席させたいんですが。リスクは承知していますが、推察を確信にするためには、彼女の助けが必要です。

そしてクーを見て「いいね？」と言った。クーは力強く頷いた。お父さんにこんなことをお願いするのが、どれほど非道なことかは理解しています。そこを曲げて、是非お願いします。

言ったじゃないか。そもそも私が匡子を危険に晒したんだ。こんなお転婆を独りで放っておいたら心配で仕方ないが、今は君がついている。大丈夫だよ。

ありがとうございます。

心から感謝の気持ちを込め、深々と頭を下げた。

いや、私こそ、君と話をしていて、大いに反省したよ。何て、とんでもないものを作ってしまっただってね。しかも我が娘にもひた隠しにして、挙句の果てには危険な目に遭わせて……。

そこで大和田は声を詰まらせた。彼が纏まとっていた威厳の鎧は脱ぎ捨てられた。重い鎧を背負っていた肩を落とし、両手をテーブルについた。

リュウイチ君には、本当に大切なことを教わったね。私にとって何が一番大切なものだったのかを。匡子にも心配と迷惑をかけてしまったな。

テーブルに手をついたまま、大和田は慈愛に満ちた父の目でクーなを見た。涙もろいくーなな目は、すでに潤んでいた。大和田はひとつ大きく深呼吸した。長く重い深呼吸であつた。

「すまなかつた、この通りだ」

大和田は、テーブルに手をついたままの格好で、テーブルクロスに額を擦りつけるのではないかと思うほど、深々と頭を下げた。

すでに外は夜の帳とほりが下りて、ネオンはより一層くつきりと、夜空に

映^はえた。その光は、はるか高いビルの窓にも射し込み、大和田の心を照らした。

12 帰還したくーな（前書き）

いよいよ最終章に近づきました。ここまで読んでいただいた方がいたことが、励みとなり、何とか書き続けることができました。この場を借りて、感謝申し上げます。

次話が最終章となります。是非とも最後までお読みいただければ幸いです。

そしてできましたら、最後までお読みいただいた後、忌憚ない感想をお寄せいただければ、望外の喜びと思います。

拙文ではありますが、どうか最後までお付き合いいただけますようお願いいたします。

12 帰還したクーナ

大和田との研究所への同行を約した朝、新聞の社会面に、次のような見出しと記事が掲載された。

「 研究所で爆発事故。放射能拡散の危険も」

昨夜未明、研究所から数回連続で小さな爆音のような音が聞こえた
と、近隣住民から当局に通報があった。近くの警察が駆けつけたと
ころ、建物の一部から煙が出ていた。被害者の有無、被害の規模に
ついては、現在調査中である。云々^{うんぬん}

リュウイチはともすれば見落とされそうな、この小さい記事を見て、
さっと気色ばんだ。それは自分の推理の完成が間に合わなかったこ
とへの悔しさでもあったが、起きてはならぬことが、現実のものに
なったことへの憤りでもあった。

リュウイチはクーナに、大至急、父へ連絡をするように要請した。
クーナが大和田の携帯電話に連絡したとき、彼はすでに車中にいた。
おはようございます。お父さん、今朝の新聞はもう読まれましたか。

ちょうど今、車で読んでいたところだよ。大変なことが起きて
しまったようだな。

はい、気付くのが遅すぎました。

君の責任ではないよ。君が、自分を責めることはない。いいか
い、リュウイチ君。とにかく今は、研究所に足を運ぶしかない。間
もなく君のマンションに着くだろうから、今少し待っていてくれ。

程なく大和田から、到着の連絡があった。リュウイチは大和田と同
行するため、ツジイに本社が遅れることを連絡しようとしたが、研

究所への電話は繋がらなかった。

視察のときと同じく、中川の運転する黒い車が停まっていた。リュウイチは視察のときにこの車に感じた禍々しさ^{まがまが}を、またもや感じた。はやる心を抑えつけて、リュウイチはくーなとともに、大和田のセダンに乗り込んだ。

研究所までの道中、車内はほとんど無言だった。リュウイチも大和田も、じつと何かを考えるように前だけを見つめていた。くーなもその雰囲気^{まがまが}にのまれ、じつと車の中で身を固くしているばかりだった。

やがて景色は、雑木林の合間に民家が立ち並ぶようになった。そして前方に 箱 が見えてきた。正面から見る限り、その 箱 は完全な形を保っているように見えたが、入り口に群がる人々が、事故があったことを物語っていた。

お父さん、正面は報道関係の人がいっぱいいるようです。裏に回してもらえませんか。そちらなら所員しか知らない入り口があります。報道陣に見つからないよう、迂回して行きましょう。

大和田は、うむと頷くと、運転手の中川に車を後退させて迂回するよう命じた。

もしこのとき、大和田の車が正面入り口からの突破を敢行していたら、あるいはリュウイチは気付いたかもしれない。入り口に沿った壁の内側の、大きな木が植えられている脇に、ブルーメタリックの車が停まっていたことを。

裏口に回るとさすがに人はおらず、ただ警察が残っていた。黄色いロープが、壁に張り巡らされていた。裏口は、一見壁に見える部分に、小さな認証装置が取り付けられているのみであり、そこに入り口が存在することを示すものは他になかった。そのためか、裏口付近には、出入りを規制するための警官も配置されておらず、リュウイチたちは誰にも気付かれることなく、研究所の敷地内にすべり込むことができた。

敷地に入ると、箱の裏側が見えた。裏側もその形はほぼ完全だったが、所長室の隣にある倉庫付近の壁に穴が開いており、その周囲だけが黒かった。

とにかく中に入りましょう。車はどこか離れたところに隠しておいた方がいいかもしれません。正面から入れない記者が、いずれ裏に回ってくるかもしれませんがね。

そうしよう。

大和田はその黒い穴の近くで、中川に電話をした。車を連絡があるまで、研究所から遠ざけた場所で待機せよとの指示だった。三人は、リュウイチを先頭に箱に足を踏み入れた。

研究所の裏口は、一階の一番奥にある所長室のすぐ隣に設けられていた。所長室も、一階ホールもひっそりとして人気が感じられない。リュウイチはホールの隅にあるベンチに、二人を連れて行った。

「少し待っていてください」と言い残して、彼は二階に続く階段を駆け上がった。

プロジェクトルームに入ると、すぐにツジイと目が合った。今回のプロジェクトには参画していないユラを除き、キトウとミヤシタもいたが、ユイはいないようだった。

どうした、リュウイチ。随分遅い会社じゃないか。

すみません。今朝電話を入れたんですが、繋がりませんでした。そうか、昨夜の事故で電話が不通になってしまっていたんだ。とにかく今は待機を命じられている。リュウイチもあまりうつくなよ。

そう言っただけで仕事に戻ろうとするツジイを、リュウイチは呼び止めた。ツジイさん、一緒に来てもらえませんか。

聞こえなかったか、今は待機だと言っているんだ。

分かっています、急ぐんです。

リュウイチの目は、あくまで真剣だった。

ツジイに、階下に防衛庁の大和田局長を待たせていることを耳打ち

した。何か喋りだしそうになったツジイを目配せで制して、リュウイチは、お願いしますと頭を下げた。

ツジイは仕方なさそうな顔で、行こうと言った。ツジイは他の所員に「絶対に部屋を離れるな」と大声で命じた。突然の号令に、呆然ぼうぜんとしているメンバーを尻目に、リュウイチとともに静かに部屋を出た。

一階で、リュウイチはツジイを大和田とくーなに引き合わせた。大和田はツジイを見ると、すぐに立って、握手を求めた。

先日は視察でお世話になりましたな。

大和田局長、今日はまた急にどうしました？

ツジイは唐突に目の前に現れた大和田に驚いていた。そして隣に座っているくーなに目を移した。

こちらのお嬢さんは？

リュウイチに尋ねた。

先日お話した、僕の妹です。いや、正確には、大和田局長の娘さんです。

いったいどういうことなんだ。訳が分からないぞ、リュウイチ。ツジイはからかわれたと思ったのか、やや声を荒げた。物音一つしない、事故から明けたばかりとは思えぬほど静まり返ったホールに、ツジイの声は事の外よく響いた。リュウイチはたしなめるように、「しっ」と指を唇に当てた。

すみません、ツジイ主任。今はあまり詳しくお話している暇がありません。急いているんですよ。ところでツジイ主任に、もう一つお願いがあります。

ツジイは惘然とした表情のまま言った。

何だい。

ツジイ主任は、確か所長室への入室ができるんですよね。

ああ。それがどうかしたのかい？

リュウイチは声を潜ひそめて、耳打ちするような調子で言った。

実は大和田局長が、荒木所長にお会いしたがつています。今日、研究所に来られたのもそれが目的です。ただ所長室に入るまで、荒木所長には悟られたくない。だからツジイ主任に、所長室を開けていただきたいのです。

傍らにいた大和田も、口添えした。

ツジイ君、私からもお願いする。

ツジイは困ったような顔をしたが、渋々ながら承知した。

分かりました。大和田局長をお連れすれば、所長も文句は言わないでしょう。ただ所長は、事故がショックだったようで、朝から部屋に入ったきりなんです。

実は私も、そのことで話をしに来た。君の悪いようにはしないつもりだ。

大和田のきつぱりとした言葉に、ツジイも心を決めたように、行きましたと言った。

ホールの廊下は薄暗く、所長室の隣にある倉庫代わりの部屋の前に、『立入禁止』の札が立てられているのが物々しかった。

ツジイは所長室の前に立つと、ゆつくりと認証装置に手をかざした。緑色のランプが点滅し、ピツという電子音が静かな廊下に響いた。ゆつくりとドアが開いた。

部屋の中には、荒木と二人の女性がいた。三人はデスクの前に置かれた円卓を取り囲むように、正三角形を描く位置に座っていた。ツジイとリュウイチがまず部屋に入った。大和田とくーながそれに続いた。

リュウイチとツジイの間からテーブルを見たくーなが、声を上げた。あら、ユイさんとお姉さんもいたのね。

そのとき不思議なことが起きた。荒木のデスクに置かれた、小さな四角いスピーカーが、くーなの発した声を、ほんの少し遅れてややノイズが入った音で繰り返したのである。

テーブルに座った三人は反応を示さなかったが、たった今この部屋

を訪れた四人は、一斉にそのスピーカーを見た。

何だこれは？

どこから声が出ているの？

リュウイチとくーなの声が、重なり合った。それらの声もスピーカーは忠実に繰り返した。

リュウイチは憤りに満ちた顔で、デスクに歩み寄り、スピーカーのスイッチを切った。そして怒りに蒼ざめた顔で、荒木に掴みかからんばかりの勢いで言った。

荒木所長。あなたはここで、僕やくーなの話を盗み聞きしていたのですか？

荒木は含み笑いをしていた。彼はリュウイチの発言を無視して、大和田を見た。

やあ大和田。連絡もなく研究所に来るとは、どうしたのだ。まあ、君が来ることは分かっていたがね。

いったい昨夜の事故は、どういうことだ。まさか、お前……。すると荒木は堪え切れないといった風で、「あつはつは」と自虐的に笑った。

おい、荒木。何が可笑しいんだっ！

まあそう怒るなよ、大和田。実験にはありがちな些細なミスさ。それにこの実験は、君のために行なったとも言えるんじゃないかね。ということとは、貴様、やはり私の資料を盗んだんだな。

人間きが悪いな。資料は君に返したじゃないか。

コピーしたのだろう、あの視察の日に。そうしてお前は、あの資料に書かれた製法にしたがって、恐ろしい物を作ったんじゃないのか。

恐ろしい物 を考えたのは、お前の方だぞ。しかしあのような事故が起きてしまったし、今更隠しても仕方があるまい。確かに作ったよ、プルトニウム爆弾の試作品だ。無論、実験目的だから、ごく微量のプルトニウムしか使用していない。しかしこれほどの威力を発揮するとは、な。やはり科学者というものは、何事も実験し、

実証しなければならぬのだよ。大和田、君もそうは思わないか。

今は、科学者としてのあり方を議論しているんじゃない。お前の作ったものが、そしてやろうとしている実験が、どれほど危険なことか、まさか分からないはずあるまい。

分かっているよ。だから予想を上回る速さで、プルトニウムが自発的に核分裂を始めたときは焦ったさ。それでつい爆発音を聞いて、隣の実験室に使っていた倉庫に入ってしまった。

入ってしまった？ ということは、荒木、お前まさか！

ああ、私としたことが。科学者としてあるまじきことだが、私は無防備で部屋に入っただけ。どうやら大量の放射能を浴びてしまったようだ。恥ずかしいことだが、被曝したよ。

どうして。なぜそんなに実験にこだわるんだ。

君の研究成果が素晴らしいからさ。大和田、君の資料は本当に素晴らしいものだったよ。妬ましいほどにね。だから私の手で作りたかったのさ。

だからと言って……。お前自身が危険な目に遭ってどうするんだ。しかも関係ない人間まで巻き込みやがって……。

そこまで言つと大和田は絶句し、その場にしゃがみ込んだ。

くーなが父の横で、心配そうに背中の手を当てて、何かしら声をかけた。リュウイチの頭には、ここ数日、何度も考え、検証した推測が、これまでに以上の現実感を伴って去来した。父を氣遣うくーなの様子を見て、言い得ぬ憤怒が、腹の底からこみ上げてきた。全ての事実をつまびらかにすることを、リュウイチは自分の心に誓った。リュウイチは狂気めいた、うつろな目をして座っている荒木を睨みつけた。こみ上げる怒りを必死になだめながら、リュウイチは努めて冷静に切り出した。だがその声は、少し震えたビブラートになっていた。

荒木所長。僕からもいくつかお聞きしたいことがあります。よろしいですか？

荒木は疲れ切った目を、少しだけ動かした。

何だね。

荒木の全身からは、倦怠感が噴き出していた。

あそこにいるのは、大和田局長の娘さんの、匡子さんです。彼女が家出したことはご存知ですよね。

ああ。

荒木は無関心な顔で、投げ遣りな返事をした。しかし横に座り、先ほどから黙って成り行きを見ていたユイは、リュウイチの言葉に驚きを隠さなかった。

そうだったの。

思わずユイの口から、呟きが漏れた。アキはただ能面のように無表情なままだった。

では荒木所長は、匡子さんが家を出た後、新宿の店で働いていたことも知っていましたね。

すっかりお見通しして訳か。ああ、知っていたよ。

どうして、それを？

ユラとアキに調べさせたのさ。

アキ？

おお、そうか。まだそのことは知らなかったのか。まあいい。

私ももう永くはないだろうし、いい機会だから紹介しておこう。私の長女のアキ、それに次女のユイだ。

この言葉には、リュウイチも心底驚いた。脳天から、太い鉄の棒を撃ち込まれたような衝撃があつた。アキがくーなも巻き込んだ一連の出来事に関与しているとは薄々感じてはいたが、よもや親子だったとは。

リュウイチはアキとユイの顔を見た。アキは俯うつむいて黙っていた。ユイは先程の驚きの表情を脱ぎ捨てて、無表情の仮面を被り、荒木の方を見ていた。

なるほど、そういうことでしたか。

君がどこまで突き止めたのかは分かんが、どうせ終わったこ

とだから話してやろう。

そして荒木は胡乱な表情のまま、静かに話し出した。

荒木は、大和田が作成した資料を探していた。荒木には到底考え出すことのできないアイデアを大和田は持っていた。荒木は、どうにかしてそのアイデアの書かれた資料を入手しようとした。せめてその計画を、自らの手で具現化したいという、科学者としての矜持でもあり、嫉妬でもあった。

そんなことを考えていたら、大和田から電話があった。くーなが家を出をしたという連絡である。荒木は「それは大変だ」と大和田を慰めたが、それは彼にとって千載一遇のチャンスでもあった。最初はくーなの居場所突き止めて、それと引き換えに資料を入手しようとした、らしかった。

最後に、「大和田は天才だよ」としみじみとした声で付け加えた。

では、どうして所長は、匡子さんに、僕のところに行くように仕向けたんですか。メモを渡してまで。

すると後ろで、くーなが何かを思い出したように、あっと声を上げた。

リュウイチ。確かにこの人だわ。私に店でメモをくれたのは。

君なら私と大和田の関係について、知らなかったからな。私は大和田の娘をどこか自分の目の届くところに置いておきたかったんだよ。それに幸い、君の住んでいるところは、アキの家から近かった。つまり君という人間が、私にとって、彼女を預けるのに一番好都合だったってことだ。

何てことを！

リュウイチは絶句した。思わず荒木につかみかかりそうになる衝動を抑え、努めて淡々と言葉を紡いだ。まだ確かめねばならないことが残っていた。

もう一つ、確認したいことがあります。これが今回、僕が真相を突き止めようとしたきっかけです。荒木所長はどうして匡子さんを昏睡させなくてはならなかったんです。

大和田が視察に訪れたとき、本に書かれたメモのことを話したからさ。あの視察の機会に、私は待望の資料の写しを、図らずも入手することができた。だから娘さんは、何らかの方法で大和田の許に返そうと思ったよ。しかし大和田自身が、その資料は完全ではないと話した。そうしてその資料を完全なものにするには、娘が持っている本が必要なのだとな。

匡子さんが持ち出した本に書かれた　メモ　が、ということですよ？

その通りだ。だから私は大和田の娘を、もう少し君のところに留めておくことにした。そしてそのメモを入手するための方法を考えたのさ。

堪りかねたように、大和田は獣のような咆哮を叫びながら、荒木に掴みかかった。高級官僚として荒木に接していた、視察の時の姿はもはや微塵もなかった。

慌ててリュウイチとツジイが、間に割って入った。もう大和田は怒りから来る興奮を隠そうともしなかったが、荒木は一層倦怠感を剥きだしにして、椅子にぐったりとした。

いけないと思い、リュウイチは矢継ぎ早に質問した。

それではそのメモを探すために、匡子さんを昏睡させた？

荒木は力なく頷いた。その目は半開きで、口を開くエネルギーさえ残されていないように見えた。荒い息を吐き、肩が激しく上下した。

それで、そのスपीカーから何故匡子さんの声が……。

そのとき荒木は、完全に目を閉じて、椅子から崩れ落ちた。

アキが荒木に駆け寄る。「お父さん」と言いながら、何度も体を揺すったが、もう荒木は何の反応も示さない。ツジイが救急車を呼ぶと言って、部屋を飛び出した。大和田は床に這いつくばってしまつた旧友の姿を、複雑な表情で見つめるばかりであつた。

ツジイはすぐに戻ってきて、正面はまだ人が一杯なので、裏口に音

を鳴らさずに来てもらおうよう依頼した、と言った。そして救急隊員を誘導するために、再び部屋を出て行った。ユイがツジイの後を追いかけた。

部屋に残された大和田とくーな、リュウイチ、アキの四人は、床に横たわる荒木をそつと入り口の近くに運んだ。しばらくするとツジイが戻ってきて、救急車の到着を告げた。続いて救急隊員が担架を持って部屋に入ってきた。荒木は謎と科学者の矜持を抱えたまま、ツジイとユイに付き添われて、病院へと運ばれていった。

残った四人はしばらく無言のまま、家主のいない部屋に立ち尽くした。やがてアキが観念したような溜息とともに、重い口を開いた。

続きは私がお話しますわ。

そう言つてアキは、再び円卓の脇に置かれている、とうに正三角形を形成していない椅子の一つに腰をかけた。くーなと大和田も残りの椅子に座った。リュウイチだけが荒木のデスクにもたれかかるように立ったまま、アキの方を見た。

ではアキさん、まずこのスピーカーからくーなの声がしたのは、何故ですか。

ピアスです。くーなちゃんのピアスに、小型集音マイクを埋め込みましたの。私がしたことです。

アキはすまなそうに、赤面して俯うつむいた。

なるほど、あなたが病院で渡したピアスが、それだったんですね。

くーなは驚いて、両耳からピアスを外した。左右を見比べると、なるほど右のピアスに埋め込まれた石の中心に、ほんの小さな黒い点が見える。それが集音マイクなのだろう。それは、一目では見分けがつかないほど精緻せいちに作られていた。

リュウイチが再びスピーカーのスイッチを入れて、くーなに何か話してみて、と言った。くーながピアスに向かって、「リュウイチ」と呼びかけた声は、果たして机の上のスピーカーからこだました。

しかしくーなは、ピアスを落としたと言っていました。彼女がピアスをなくしたことを、あなたは、あるいは荒木所長はどうして知ったのでしょうか。

知ったも何も、それも私がしたことです。くーなちゃんが病院に運ばれた翌朝、リュウイチさんが病院に来る前に、眠っているくーなちゃんの耳から私が抜き取りました。

話し始めると、アキは堰を切ったように説明を始めた。それは例え自分の父である荒木に加担したものにせよ、どこかで自分の理性を曲げたことへの自戒にも見えた。

少し遡さかのぼってお話します。リュウイチさんがユイや先程の主任の方と打ち上げをした夜、駅でお会いしましたわね。

リュウイチは聞き役になり、「ええ」とだけ相槌を打った。

実はリュウイチさんが駅に着いたことは、すぐにユイから連絡がありました。私の携帯電話にです。それで私は、すぐさま車から出て、改札に向かいましたの。

ずいぶんタイミングがいいと思いましたよ。でもどうして僕に会う必要があったのですか？

アキは言いにくそうに逡巡した。ややあつて口を開いたが、その声はそれまでの闊達さを失い、震えを帯びた。

父が……父が、その……くーなちゃんのところにおりましたから。本当にくーなちゃんには、もう何て言っていていいか。今更ですけど、本当にごめんなさい。

アキの目には、みるみる涙が浮かんだ。彼女の慙愧ざんきの気持ちは、堪たえ切れず涙となって流れ落ちた。

くーなが、目の前の自分を恐怖に陥れた首謀者の肩に手を置いて、慈愛の目で彼女を見た。こんなときでも、彼女の目は潤んだ。リュウイチは、そのくーなの姿に、聖母を見出していた。くーなはマリアの優しさで、アキを包み込んでしまった。

アキさん、あなたもお父さんに頼まれてやったのでしょ。それに私はもう、ほら、ぴんぴんしているわ。

アキはその言葉で、とうとう陥落した。その場で崩れ落ちるように椅子から降りると、大和田とくーなに向かって、繰り返し頭を下げた。

そのアキの姿を見ながら、リュウイチは思い出していた。病院からの帰り道、駅前の書店から、駅の改札口は見えなかったことを。そしてそのことが、彼の心に^{おり}澱となつてこびりついていたことに気がついた。

それゆえにリュウイチは、打ち上げの晩、アキが見事なタイミングで改札に現れたことに、違和感を覚えたのだ。今にして思えば、荒木所長とその二人の娘の、あっぱれとも言いたくなるような連係プレイだった。

その間、アキは大和田の慰めで、ようやく己の慙愧^{ざんき}への楔^{みそぎ}を終えようとしていた。泣き腫らした目を隠すように下を向いたまま、アキは再び椅子に座りなおした。

アキさん、最後に一つ、確かめておきたいことがあるんです。

アキはまだしゃくりあげたまま、頷いた。

僕の家^{うち}に忍び込んで、くーなの本を盗んだのは、誰なんですか？

それも、私です。

しゃくりあげながらアキが語るには、事実是这样だった。

くーなを昏睡させた夜、眠り込んだくーなを見て、荒木はリュウイチの部屋に忍び込んだが本は発見できなかった。鍵のありかも分からないので、荒木は粘土のような物で鍵穴の型を採った。後日、その型から、荒木は合鍵を作つてアキに渡した。アキはくーなが退院する前に、リュウイチの部屋から本を奪うことを、荒木に指示されたそうである。それでアキは、本を盗み出すまでの間、常にリュウイチの動向を^{うかが}窺い、リュウイチがくーなを見舞っている間に彼の部屋に忍び込んだという。

この一連のくーなを巡る事件で、アキの果たした役割は、それは彼女の自発的な行動ではないにせよ、大きかった。そしてそのターゲットに、アキの近くに住んでいる、何も知らないリュウイチを選ん

だ、荒木の計算の巧妙さに今更ながら身の震える思いがした。全てが終わり、リュウイチと共に謎を紐解いたくーなも、彼女自身の受難から解放された。

結局、荒木は搬送先の病院で、まもなく死亡した。アキは泣いた。ユイも泣いた。そして大和田も。

大和田は自分が興味本位で作った、些細な数頁の資料が、かような結果を招いたことに、すべてが明らかになった後も、ずっと己を責めていた。己の資料のために、旧友を失い、愛娘を危機に追い込んでしまったがゆえに。

大和田はこの事件から五年後、絹代に看取られながら、まだ若いと惜しまれつつ荒木の後を追うこととなる。しかし彼は、いまわの際まで自分を責め続けたという。

ともあれ全てを白日の下に晒して、主を失つて崩れかけた箱あるじを後にした三人は、中川の運転する車で大和田の邸宅に戻ってきた。前と同じように、絹代は快くリュウイチを迎えてくれた。

リュウイチが通された部屋は、居間だった。絹代の心づくしの料理がテーブルに並べられて、ささやかな饗宴が始まった。

食事の席で、大和田はリュウイチが止めるのも聞かず、何度も床に頭をこすりつけてお礼を言った。

本当に君がいなければ、私も、そして匡子もどうなっていたか分からない。君にはどれだけ感謝しても、し尽くせないほどだ。

饗宴の間、大和田は感謝の言葉を繰り返した。そのときの大和田の顔は、まるで憑物つきものが落ちたように、晴れ晴れとしていた。

居間では四人の笑い声が、途切れることなく、いつまでもいつまでも続いていた。

13 二十年後のエピローグ（前書き）

私の当サイトでの初投稿作品「くーな」も、本章で最終話となります。これまで読んでいただいた方に、お礼を申し上げます。

最後まで書き続けられるだろうかと心配にもなりましたが、読んでくださる方がいることを励みに、ここまで何とか漕ぎつけました。最終話、是非お楽しみください。

そして拙作への感想も、是非一言お書き添えいただけますよう、お願い申し上げます。

13 二十年後のエピローグ

お茶、いかが。

リュウイチの前に、美しい白髪をたたえた上品な老女が、コーヒーの入ったカップを置いた。カップにはコアラの絵が描かれている。随分使い込んだカップで、ところどころ黒ずんでおり、デザインも今のリュウイチにはいささか不似合いに思われたが、彼は今もそれを好んで使っている。

絹代が淹れる^いコーヒーは絶品だ。二十年前、この家の応接間で、絹代が給仕してくれたコーヒーの味は、今も変わらない。彼女の入れたコーヒーは、いつもたおやかに香りが立ち昇り、リュウイチはいつまでもその香りを嗅いでいたくなる。

香りとともに、過去が今も色褪^あせることなく、鮮明に蘇^{よみがえ}る。

今になって思い返してみても、背筋がゾツとする。もう二十年の歳月が経過した。リュウイチがくーなに出会ってから。

リュウイチがくーなどの出会いに思いを馳^はせていると、絹代がテーブルの上に一通の封書を置いた。封筒の表には『大和田隆一様』と書かれている。見覚えのある筆跡だ。今は亡き、くーの父、大和田琢磨が書いたものであろう。

お母さん、これは？

実はお父さんが亡くなる前、あなた宛に残した遺書なの。お父さんは『私がもし死んだら、これをリュウイチ君に渡して欲しい』と言っていてね。私はそれをずっと預かっていたのよ。

しかしお父さんが亡くなられて、もう十五年くらい経ちますよ。ええ、そうね。本当はこんなもの、見せずにおこうと思っていたの。私とともにあの世に持って行って、お父さんに返してしまおうとね。だってこれを読めば、あなたはきっと辛い出来事を思い出すことになるわ。

リュウイチは「はあ」といささか間の抜けた相槌を打った。

でも、やはり気になるのよ。

読んでいないんですね。

もちろんよ。それでお父さんの遺志を、このまま封印していいのかしら。やはりこれはあなたに読んでもらうべきなのではないかな、とも思ったの。そもそも開封もしないで、リュウイチさんに渡さないまま、中身を勝手に想像して、封印したまま私があの世に抱いていつて、もし想像した内容と違っていたらお父さんに怒られてしまうわ。だから。

「さあ読んで聞かせてくだらない」絹代はそう言つて、テーブルの上を手探りで自分のカップを探し、コーヒーを飲んだ。

いつもリュウイチを、そしてくーなを物静かに支えてくれていた、盲目の母は、見えないはずの目をじつと閉じて、それきり黙ってリュウイチが読むのを待っていた。

絹代は三年ほど前から、急に視力が衰え、今はほとんど見えない。それでも住み慣れた家の中のこととは、手が覚えていると言ひ、健常者のように何でもこなしてしまう。

彼女の最近の口癖は、「ただ字だけは読めないのよ」だった。視力の衰えに伴って、彼女の気力もまた衰えたようだった。静かな物腰の中に気丈さを備えていた絹代も、もう以前の彼女ではなくなっている。

リュウイチは、「では読ませてもらいます」と言い、目の前の封筒を開けた。封筒は何の飾り気もない純白だったが、中にびつしりと文字の書き込まれた便箋もまた純白だった。

飾り気のないところも、まるで定規を当てたようにきっちり^{まっす}と真直ぐに書かれた字も、父らしいなとリュウイチは思った。

一度絹代の手に触れて、読みますよと声をかけてから、リュウイチはゆっくりと遺書を読み始めた。

隆一君

今、これを読んでいる君は、匡子と一緒にだろうか。そうであつて欲しいと、死に際してそれだけが今の私の願いだ。

我が友にして、永久とわの仇敵でもある荒木毅彦が、匡子と君を巡り合わせて以来、君が匡子のために奔走し、助けてくれたことは感謝に堪たえない。ここに匡子の父として、今一度感謝したいと思う。

思えば君と匡子を引き合わせたのも、私が元凶だった。家庭も我が娘のことも顧みず、ただひたすら神を冒瀆するようなことに盲進してしまつたがゆえ、君は匡子とともに、実に数奇な出来事に巻き込まれてしまつた。荒木もまた、私が犯した罪の哀れな犠牲者となつた。

かくも罪深い私を励まし、匡子を救うために身を盾にしてくれた君に、図らずも出逢えたということだけが、唯一、神が私に与えたもうた僥倖うまいちかきだったかもしれない。

私には科学者としての資格はなかった。科学は人を不幸にしてはならないし、人に隠れてこそこそと研究するものでもない。

私は自らの手で、大切な友を始め、多くのものを失つた。だが幸いにして、君は匡子とともに、今も私の傍そばにいてくれている。

だから我が心の友なる君に、いささか親に似て不出来な娘と、私が遺のこした遺産の全てを譲ることとしたい。また身勝手なお願いであることは承知の上で、残された絹代を匡子とともに支えてはくれまいか。

おそらくは絹代も反対はすまい。

糟糠そうこうの妻なる絹代に、私は何の恩返しもできないまま、あの世に旅立つこととなつてしまつた。だから君に、私の持てる全てを譲るとともに、我が妻に、私が考えうる一番素敵な贈り物、すなわち君を匡子とともに遺のこして旅に出ようと思う。

大和田 琢磨

最後の数行はやや字が乱れていた。父はこれを、まさにいまわの際

の、最後の力を振り絞ってたたためたのであろう。

絹代は静かに泣いていた。そのうつろな目からは、とめどなく流れる涙が、天井から降り注ぐシャンデリアの光を反射して美しく輝いていた。

むせび泣きながら、絹代は「やはり、読んでもらって良かった」とリュウイチの手を握った。何度も、ありがとうよと繰り返した。

リュウイチはくーなの耳で光っていた、ピンクのピアスの輝きを思い出した。絹代の涙の輝きを見て、再び二十年前の出来事に思いを馳せた。

唐突に目の前に現れて、妹 になると主張したくーな。無遠慮にリュウイチの部屋に上がりこみ、それでも憎めなかった。そして妹から女への秘めやかな儀式。

あれは恋だったのか？

それともくーなが巻き込まれた、数々の苦難から彼女を救ってやろうという、青臭い英雄主義ヒロイズムに過ぎなかったのか。

くーなどの思い出は、どれも過去へのフィルタでろ過されることなく、今もリュウイチの中に在る。あいやむしろ、思い出は二十年という歲月の中で、精製され、美しい結晶として昇華している。

くーなはいみじくも言っていた。

今を生きろ、と。

そして父は、母を支えてくれと遺した。

だから、とリュウイチは考えた。くーなと僕を逢わせてくれた父のためにも、くーなと母を支えなくては。

リュウイチが再び父の遺書に目を戻したとき、隣で母はリュウイチの手を握ったまま、テーブルの上に顔を伏せていた。リュウイチは、眠ってしまったのかな、と思った。

絹代は、最後まで静かに、安らかに息を引き取った。

くーなが娘とともに家に戻ってきたとき、リュウイチは絹代の手を握って、静かに絹代の顔を見ていた。リュウイチと絹代の周囲だけ、時間が凝固したように見えた。

「パパ」と叫びながら、娘の圭が駆け寄った。まもなく中学生になる圭は、母であるくーなの面影を映して、愛くるしい顔立ちをしていた。リュウイチは圭に、目を細めて優しく微笑みかけた。

お祖母ちゃん、寝ちゃったの？

圭、お祖母ちゃんはね。つい今しがた、お祖父ちゃんのところに行ったんだよ。

部屋の入り口で、リュウイチに駆け寄る圭を見て、微笑んでいたくーなが、急に顔色を変えて絹代のところに駆け寄った。絹代の体を揺すりながら「お母さん」と呼びかけた。絹代の体はもはや自律性を失い、くーなの腕にもたれかかった。

くーなが、わっと泣き声を上げた。その声に驚いてか、圭も呼応するように泣き出した。

（泣き虫なところまで、そっくりだな）

リュウイチは泣き声で合唱する母娘を見て、現在の状況にはそぐわない感慨を持った。

リュウイチの腕にすがりついて、泣きじゃくる圭に、彼は父の慈愛を込めて、優しく諭した。

お祖母ちゃんはお祖父ちゃんの待つ、天国に行ったんだよ。見てみなよ、圭。だからお祖母ちゃんは、こんなに幸せそうな顔をして、眠っているじゃないか。もうお祖母ちゃんは、お祖父ちゃんと天国に住むって決めたから、起きることはないけれどね。でも圭、君にはパパもいるし、優しいママもいる。だから、そろそろお祖父ちゃんに、お祖母ちゃんを返してあげよう。お祖父ちゃんも独りで寂しいのさ。

圭は納得したように、涙を拭いて「うん」と首を振った。父の腕にすがりついたまま、祖母の安らかな寝顔を見ている圭の表情も

また、優しくった。それはいつか、リュウイチがくーな顔に見出した聖母の表情であつた。

その日、しめやかな通夜が行なわれた。読経とくぎょうが終わり参列者も皆帰つた部屋で、リュウイチは独り、絹代の眠る棺うつぎの前に座つていた。棺の前で一度合掌すると、リュウイチは立ち上がつて、そつと棺の蓋を持ち上げた。青白い顔をした絹代の、白装束の胸元に、リュウイチは胸のポケットから取り出した何物かを差し込んだ。それは父、琢磨の遺書であつた。

これは僕とお母さんだけの秘密です。くーなことは僕が守ります。圭のこと。だから安心して、父の許へ旅立つてくださいね。そして父に『ありがとう』と伝えてください。

小声で眠る絹代にそう呟くと、リュウイチは再び棺の蓋を閉じた。

絹代が茶毘だひに付された日。

絹代と父の遺書を天に送るかのように、煙突から出る黒煙は真直ぐに空へ立ち上つた。左に圭、右にくーなど、しっかり手を繋いで、リュウイチは天に昇る竜にも似た煙を、じつと見送つた。

リュウイチは微笑んで、今も過去もない世界で、待ち遠しそうな顔をして、祖母の帰りを待っている祖父を見ていた。そつとくーなと繋いだ手に、力を込めて。

(了)

13 二十年後のエピソード（後書き）

「くーな」最後までお読みいただき、本当にありがとうございました。

次回作で、またお逢いできることを楽しみに……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2597d/>

くーな

2010年10月8日12時05分発行